

# 2024年度 健康メディカル学部理学療法学科

## 学修行動と学修成果の調査アンケートの解析

理学療法学科のディプロマポリシーとして①幅広い教養とコミュニケーション力を発揮し社会人として自立できる力を有している。②理学療法士としての使命・責任・態度そして社会・職業倫理観を基に、クライアントとの信頼関係を構築し、多職種との連携を築く。③科学的知識に立脚した理学療法を実践し、更に新たな知識への探求心・研究心を身につける。④国内外に対する見聞を広め、その地域特性に応じた関わりを見出す、と掲げている。とくに①②は社会に出るうえで必須の能力である。そこで全学年を対象とした I. 学修行動と学生生活においては①に重点を置き、4年生を対象とした II. 学修成果については①～④に重点を置いて調査結果を分析した。\*2024年度より新たな設問が追加されたことから、設問番号は昨年度までと一致しない。

### <I. 学修行動と学生生活について>

#### 設問 7 授業の予習や復習、授業課題のための勉強

昨年、一昨年度に比べ、「頻繁にした」「かなりした」の合計が漸増する一方、「あまりしなかった」、「全くしなかった」と回答した学生の割合は漸減傾向にある。今後は「時々した」と回答した学生をより頻繁に予習・復習に向かわせる働きかけが必要である。

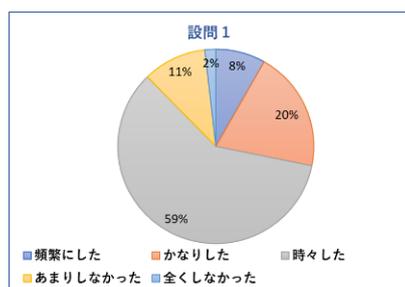


図1 設問1 2022年度

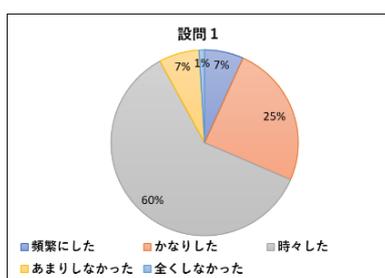


図2 設問1 2023年度

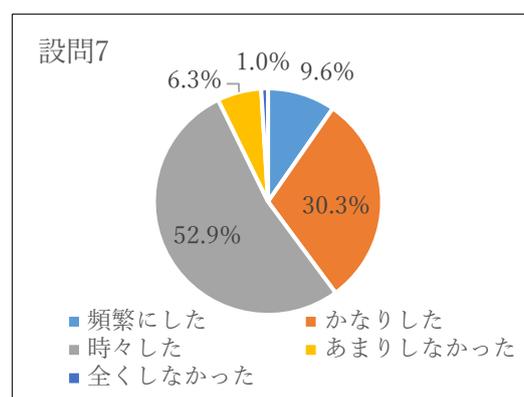


図3 設問7 2024年度

#### 設問 8 学修支援システム(「Manaba」)を利用した勉強

昨年、一昨年度に比べ利用者数が上昇し、「あまりしなかった」、「全くしなかった」学生は全体の17%程度に減少した。しかしながら未だに17%の学生は友人からの情報に大きく依存している可能性があり、連絡事項が伝わらない、提出期限を忘れる学生が一定数いる。この結果を学科教員と共有し、さらなる改善に努める必要がある。

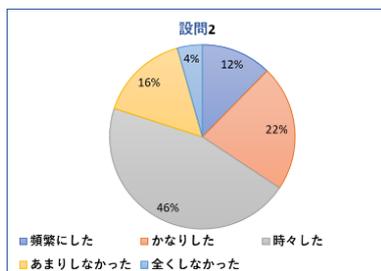


図4 設問2 2022年度

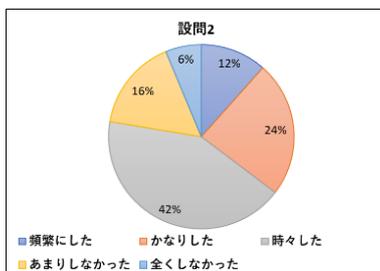


図5 設問2 2023年度

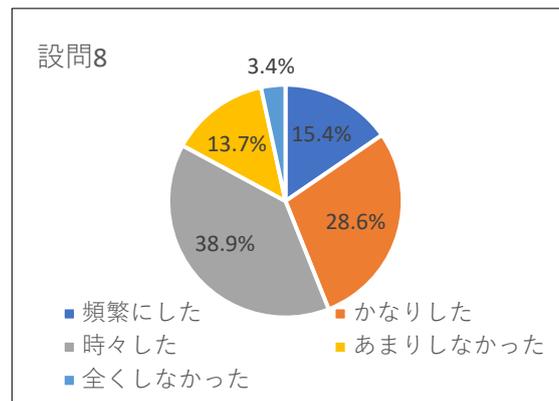


図6 設問8 2024年度

### 設問 9 授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問や要望

昨年度、一昨年度と比較し、「頻繁にした」「かなりした」と回答した学生が、一昨年の 10%、昨年の 14%と比べ、2024 年度は 20%を超える結果が出たことは良い傾向と思われる。その一方、約 37%の学生が教員に「あまり相談しない」あるいは「まったくしない」状況である。漸減傾向ではあるものの、教員へ相談しない（できない）学生に対するアプローチ方法をさらに検討していく必要がある。

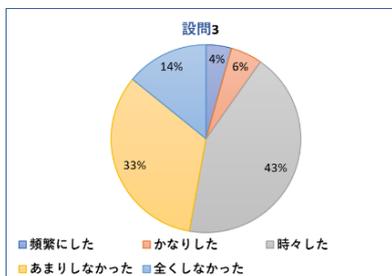


図 7 設問 3 2022 年度

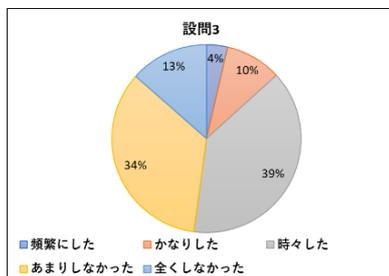


図 8 設問 3 2023 年度

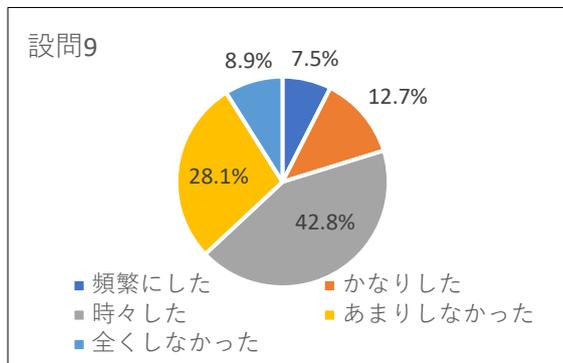


図 9 設問 9 2024 年度

### 設問 11 友人と一緒に勉強

昨年、一昨年と比較して「頻繁にした」、「かなりした」が漸増傾向にあり、「あまりしなかった」「全くしなかった」が減少した。学生同士の関係性が年々良くなっており、クラスづくりが成功しているといえる。その一方、設問 39「学内の友人関係の悩み」に「ある」と回答している学生が約 16%存在することから、この層に対してセミナーでの仲間づくりを促すなど、早い段階からの介入が必要といえる。

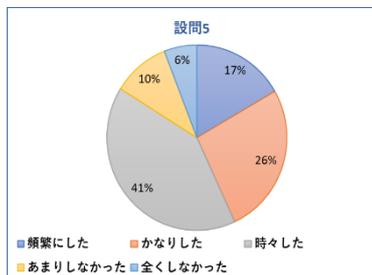


図 10 設問 5 2022 年度

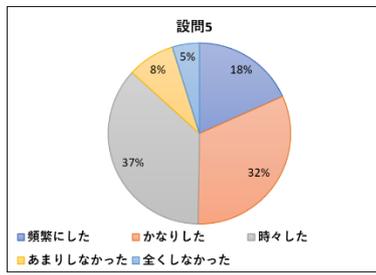


図 11 設問 5 2023 年度

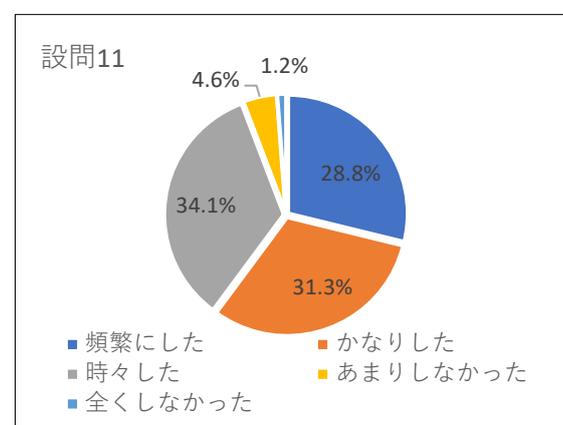


図 12 設問 11 2024 年度

### 設問 12 メディアライブラリーセンター(図書館)を利用した勉強

昨年、一昨年と比べほぼ同様の傾向である。ただし学年別に見ると、年次があがるにつれて「頻繁にした」が上昇し、「あまりしなかった」「全くしなかった」は減少している。

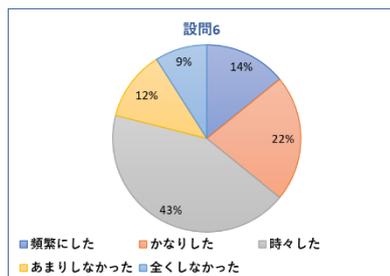


図 13 設問 6 2022 年度

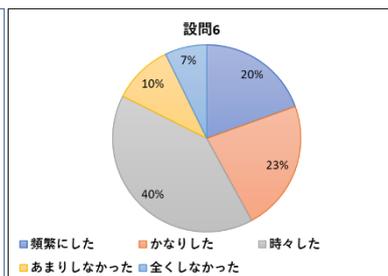


図 14 設問 6 2023 年度

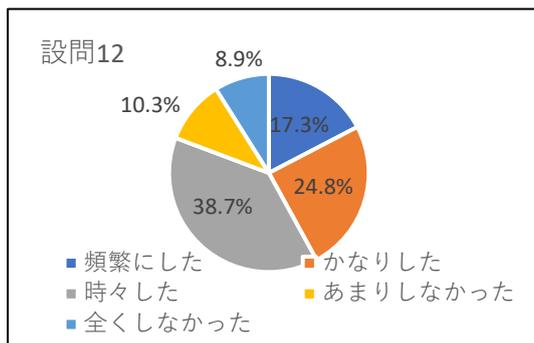


図 15 設問 12 2024 年度

## 設問 15 授業の内容

昨年、一昨年と比べ、「とても満足」「かなり満足」と回答した学生が漸増している一方、「やや不満」「とても不満」と回答している学生は漸減している。今後はこの約 7%の学生を「やや満足」に変えていく対策が必要である。

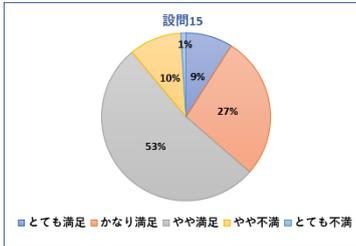


図 16 設問 15 2022 年度

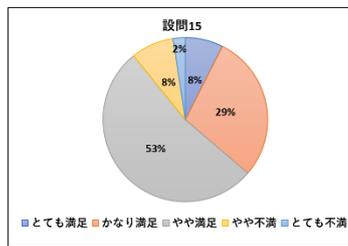


図 17 設問 15 2023 年度

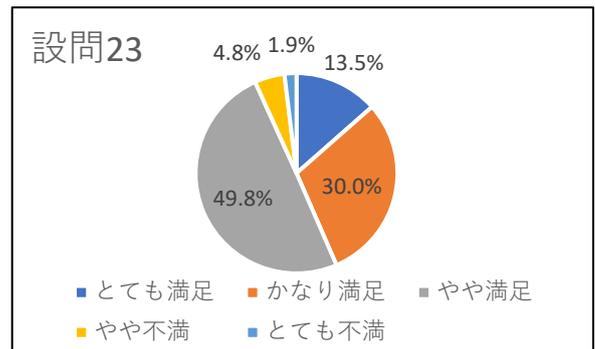


図 18 設問 23 2024 年度

## 設問 24 所属する学科・コースで学ぶことができる教育内容

「とても満足」「かなり満足」と回答した学生が半数を超え、「やや不満」「とても不満」と回答している学生は約 3%である。今後はこの約 3%の学生を「やや満足」に変えていく対策が必要である。

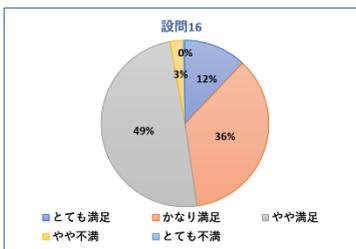


図 19 設問 16 2022 年度

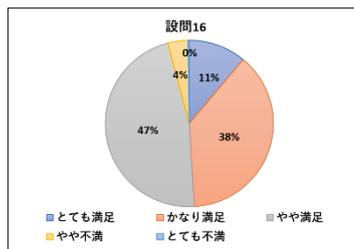


図 20 設問 16 2023 年度

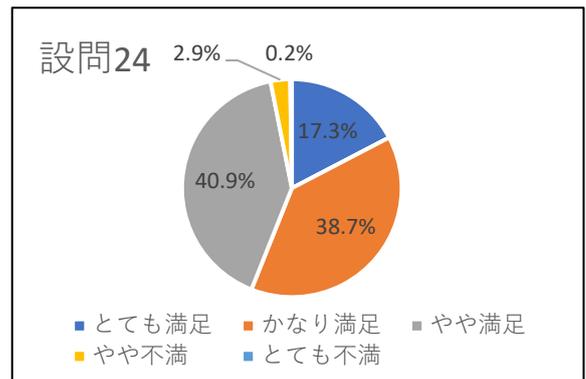


図 21 設問 24 2024 年度

## 設問 31 学科・コースの教員による指導・相談

大半が「満足」している一方で、「やや不満」「とても不満」と回答した学生が約 4%となり、全体の 15-20名の学生が不満を感じていると推測できる。また設問 43「不安や悩みについて誰に相談するか」に対して「教員」と回答した学生の割合が、大学全体の数値(3.6%)と比べてやや低く(2.8%)、健康メディカル学部(1.6~8.0%)の中でも低い方に属する。「相談しても取り合ってくれない」等の不満から相談を避けることや、SNS などへの不適切な発信による悪影響を避けるため、指導や相談を適切に実施する必要がある。

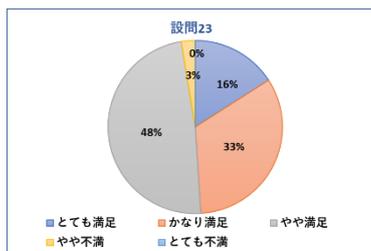


図 22 設問 23 2022 年度

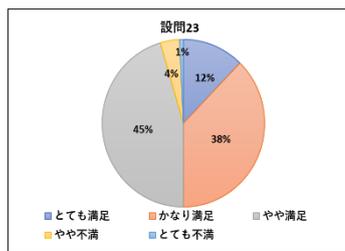


図 23 設問 23 2023 年度

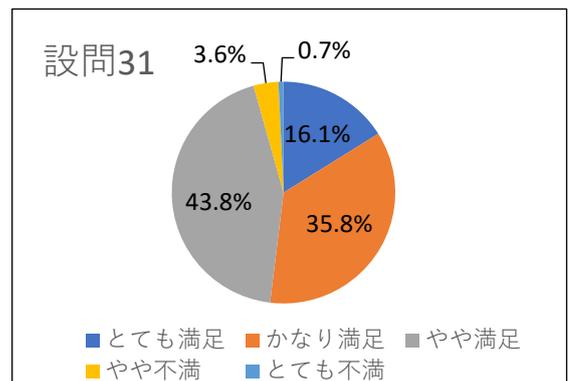


図 24 設問 31 2024 年度

## 設問 35 授業の内容についていけない

「大いにある」「少しある」と回答した学生が半数近くに上り、授業内容についていけない学生を減らせていない。この傾向は特に下級生に顕著であり（両カテゴリで1年生約7割、2年生約4割8分、3年生約3割8分、4年生約3割2分）、他学科と比較しても多い傾向にある。この項目は満足度だけでなく留年や退学に関わる問題であるため、とくに下級生には専門用語だけでなく、平易な言葉で説明を補足するなどの工夫が必要である。

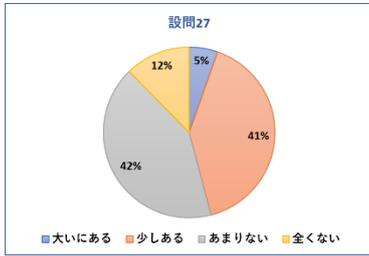


図 25 設問 27 2022 年度

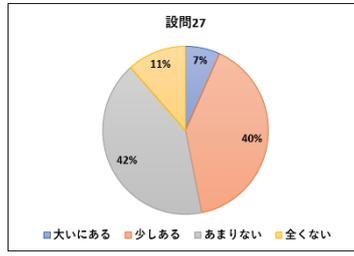


図 26 設問 27 2023 年度

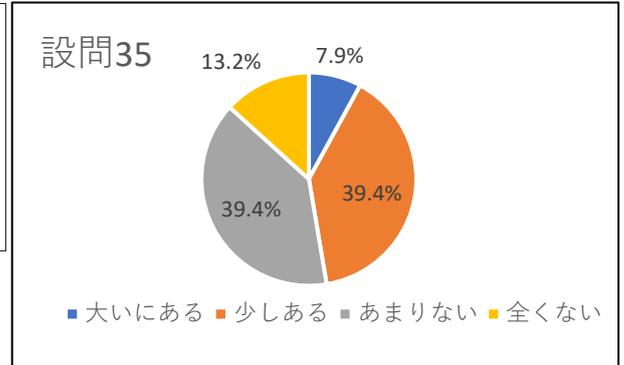


図 27 設問 35 2024 年度

## < II. 学修成果について > 4年生に対する理学療法学科独自設問（2024年度のみ）

実学の精神を基に教育を行っている医療系学部として、理学療法に関する知識・技術はおおむね満足できる結果であった。ここでは、本学が目標とする6つの力、および当学科ディプロマポリシーの①～④に関連する設問についての分析を中心にまとめる。

**本学の目標とする6つの力：設問1 人間愛（利他の心）、設問2 他者と協働する力、設問3 自立して逞しく生きる力、設問4 創造的な問題解決能力、設問5 専門性を高める意欲と力、設問6 我が国と世界の持続・発展に尽くす力**

本学の目標とする力「十分付いた」「かなり付いた」「やや付いた」と回答した学生が約90%～98%である。医療に携わる者として利他心は必須の条件であるため、望ましい結果が出ているといえる。また翌年から社会に出る4年次までに、親や教育機関から自立し、収入を得て自活できる育てることが大学の使命である。さらに当学科では国際交流プログラムを2つ揃えているためか、設問6 我が国と世界の持続・発展に尽くす力が、大学全体（約83%）と比較して高かった（約90%）。今後は「やや付いた」と回答した学生を「かなり付いた」「十分付いた」に改善させるべく、教育手法を改良していく必要がある。

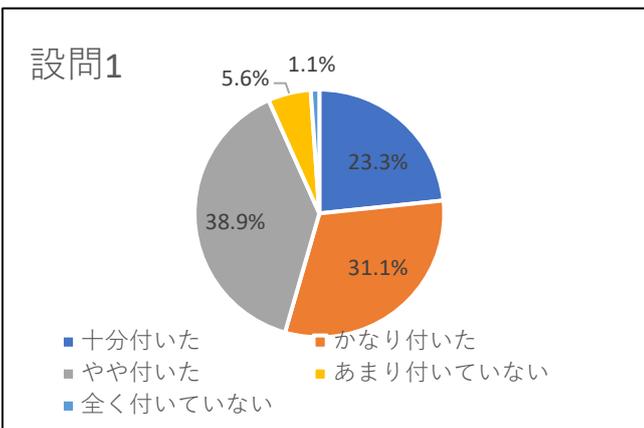


図 28 設問 1 人間愛（利他心）

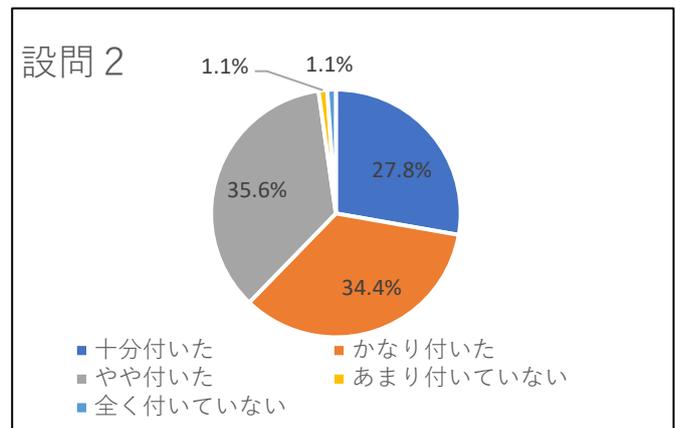


図 29 設問 2 他者と協働する力

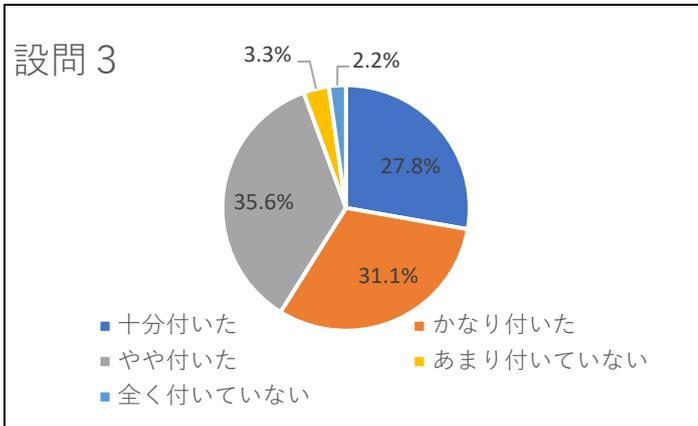


図30 設問3 自立して遅く生きる力

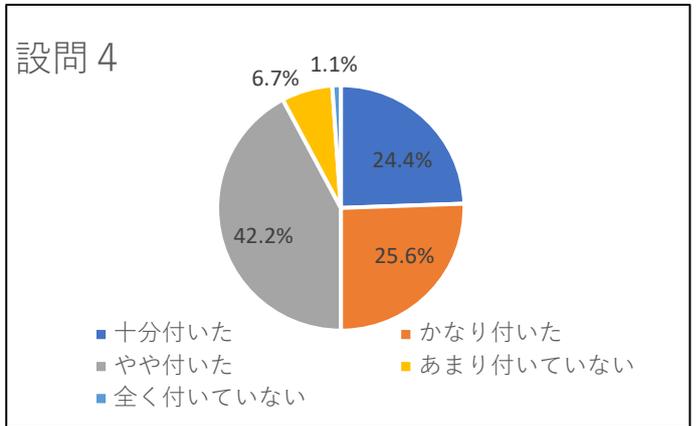


図31 設問4 創造的問題解決能力

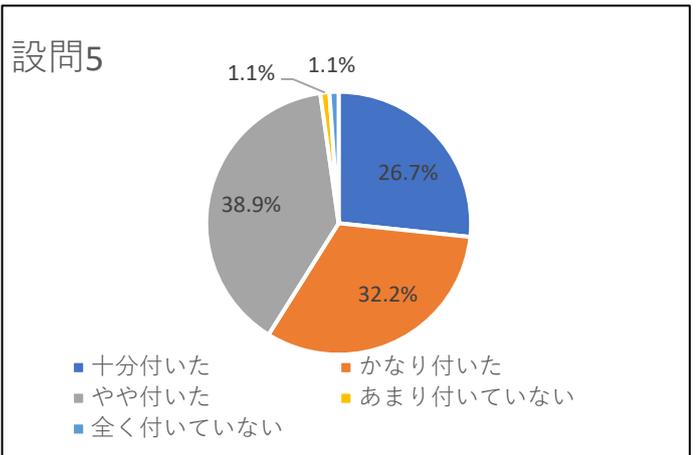


図32 設問5 専門性を高める意欲

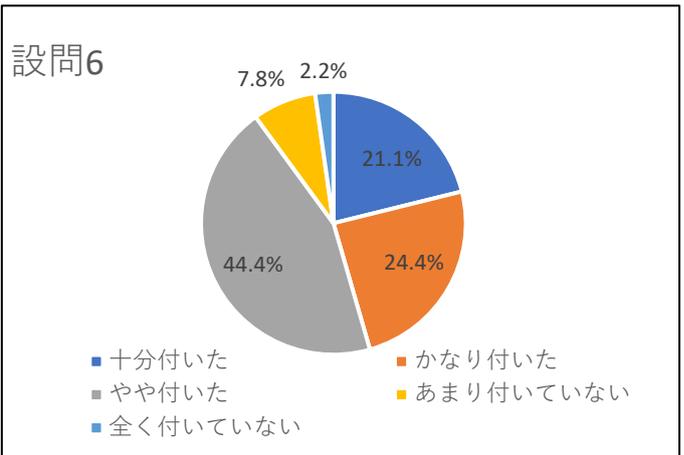


図33 設問6 我が国と世界の持続・発展に尽くす力

### 理学療法学科独自設問

#### 設問47 人とのコミュニケーションする力、設問49 自ら課題を見つけて解決する力

これら2項目については「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」と回答した学生が大半を占め、概ねディプロマポリシー①を満たすことができたといえる。その一方、約5%の学生は「あまり付いていない」「全く付いていない」と回答していることから、これらの学生に対する教育手法を見直していく必要がある。

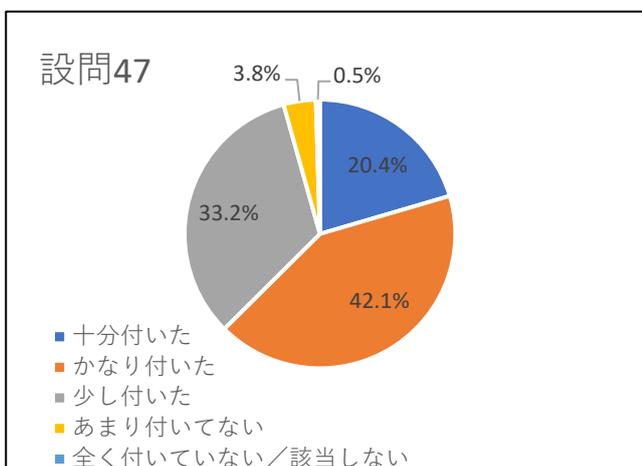


図34 設問47 コミュニケーション力

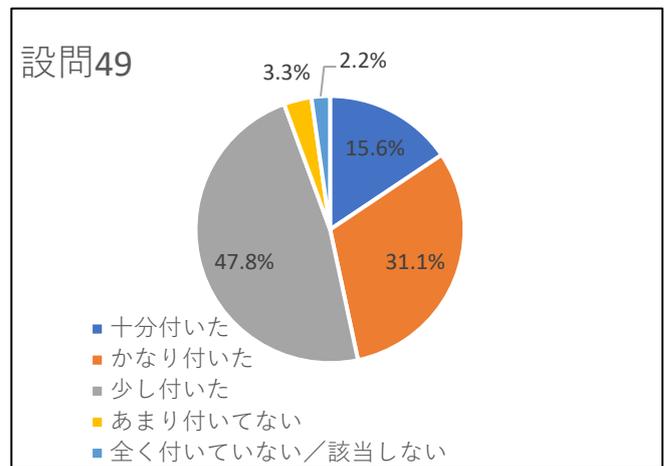


図35 設問49 課題発見・解決力

### 設問 53 規則や約束を守る態度

「身についた」と回答した学生が約 98%である。これに関しては1年次から指導を徹底しており、医療に携わる者として関連法規、病院施設の規定を守ることは必須である。今後は「少しついた」と回答した学生を「かなり付いた」「十分付いた」に改善させるべく、教育手法を検討していく必要がある。

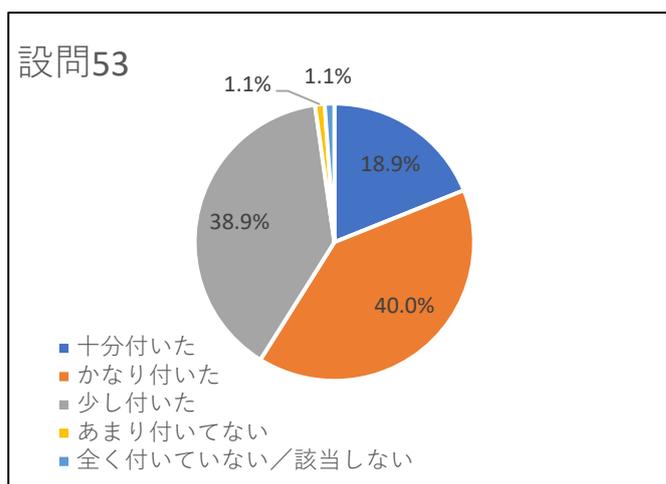


図 36 設問 53 規則や約束を守る態度

### 設問 54 健康や生活を自己管理する力

「身についた」と回答した学生が約 95%である。自己管理能力が低ければ、健康的に仕事や生活を継続することは難しい。患者の健康を管理することは一層困難となろう。今後は「身についていない」学生を、「少しついた」に変え、「少し付いた」学生を「かなり付いた」「十分付いた」に改善させる方策を検討する必要がある。

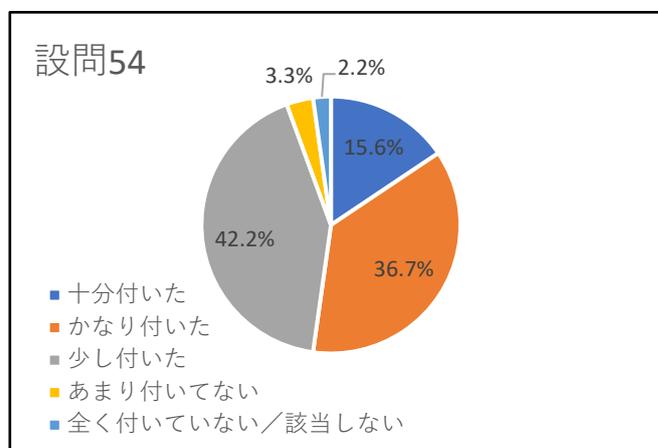


図 37 設問 54 自己管理能力

### 設問 60 信頼関係を構築する力

「あまりついていない」「全くついていない」と回答した学生は皆無で、全体の約7割が「十分付いた」「かなり付いた」と回答した。スタッフや患者との信頼関係の構築は、社会に出たときから重要であり、長く働き続けるための基礎でもある。今後は「少し付いた」と答えた学生を「かなり付いた」に改善させるための働きかけ（たとえばサークル活動やプロジェクト活動）をより充実させ、他者とのかかわりから力をつける方策が必要かもしれない。

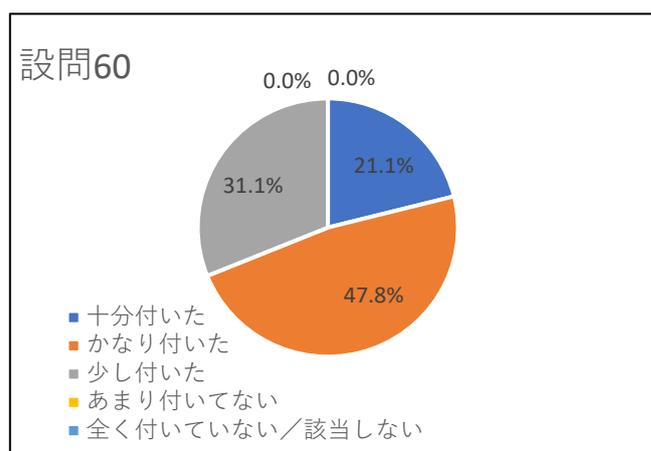


図 38 設問 60 信頼関係構築力

設問 78 理学療法研究への興味と関心、設問 79 理学療法を研究する意義の理解、設問 80 研究倫理への理解、設問 81 理学療法研究を行う基礎能力

これら 4 項目については 90%以上が「付いた」と回答したため、概ねディプロマポリシー③を満たすことができたといえる。その一方、選択科目である卒業研究を履修しない約 7 割の学生にとっては、興味関、理解および基礎能力が身に着けることが難しかったようである。4 年次は長期臨床実習、国家試験準備、そして就職活動が重なることから、卒業研究への取り組みに困難が伴う場合も少なくない。対策としては、3 年次に開講される必須科目「理学療法研究方法論実習 I, II」を通して、科学に基づく実践力を養うことを検討していきたい。

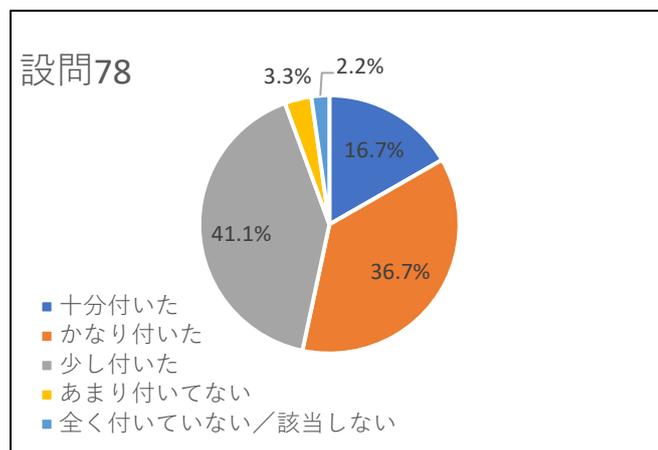


図 39 設問 78 研究への興味関心

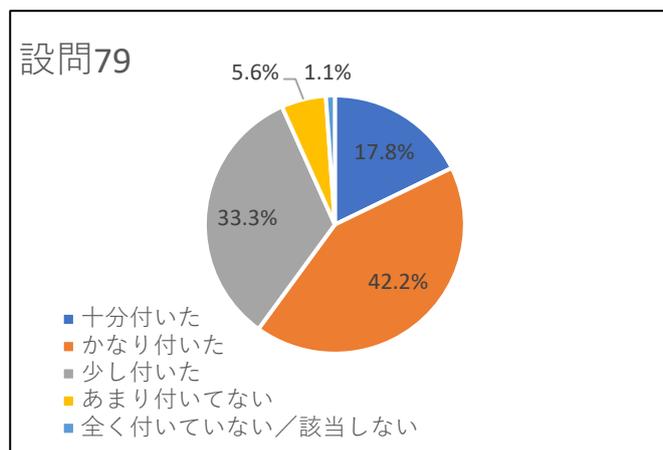


図 40 設問 79 研究意義の理解

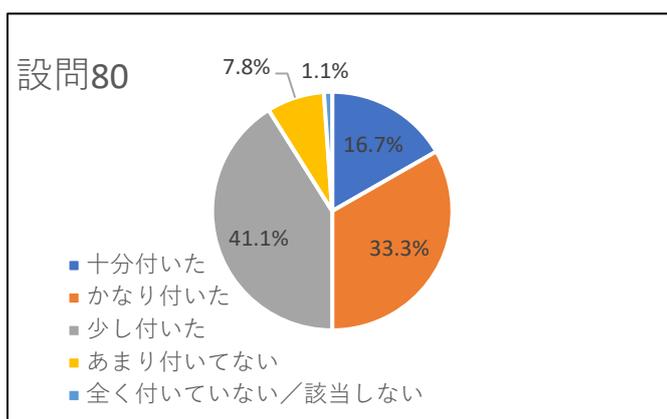


図 41 設問 80 研究倫理の理解

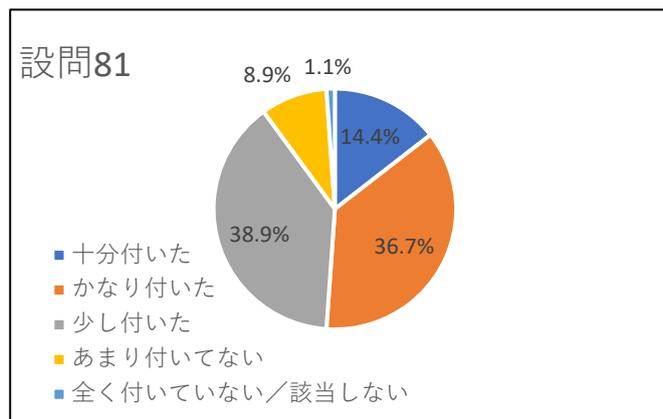


図 42 設問 81 研究を実施する基礎能力

<2024 年度のまとめ>

本学が目標とする 6 つの力、および理学療法学科のディプロマポリシー①から④を概ね満たす結果が出ており、教育機関としての最低限の使命を果たしているといえる。また学生の学習時間、授業や教育方法に対する満足度、教員への相談なども昨年、一昨年と比べて増加していることから、学習に取り組む上での教員との信頼関係を一定のレベルで保つことができていると思われる。

その一方で、授業についていけない、と感じている学生の数が他学科と比較しても多く、この傾向が特に低学年に顕著である。この点は留年や退学に関わるため、下級生に対してはより丁寧な教授法が必要である。また少数ではあるものの不満を持つ者もあり、他学科と比較しても教員へ相談する割合が低いことは懸念材料である。オープンキャンパスでは「学生と教員との距離が近い学科」として学生を集めることができていることから、学生が悩む授業、進路、就職等の相談をしやすい雰囲気づくりや、適切な教授、指導が必要である。

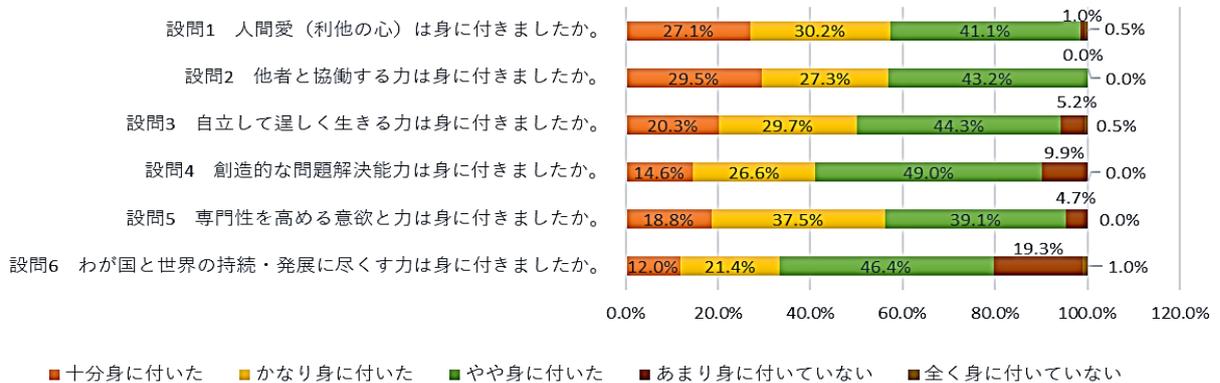
## 2024年度 健康メディカル学部作業療法学科

### 学修行動と学修成果の調査 アンケートの分析

本学の目標とする力、および、作業療法学科のディプロマポリシー「①幅広い教養とコミュニケーション力を発揮し、他者と適切な人間関係を構築できる力を有している。②作業療法士としての豊かな人間性と倫理感を持ち、自律的に業務に取り組むことができる。③作業療法に関する知識と技術、および態度を身につけ、作業療法対象者の多様性を尊重し、そのニーズに誠実に応えることができる。④国内外の地域特性に応じた作業療法実践の基礎力を身につけ、多職種と連携しながら健康な社会づくりに貢献することができる。⑤社会情勢に応じた作業療法の専門的発展に貢献し自己研鑽できる力を有している。」を念頭に、到達度と今後の課題を検討したので報告する。

#### I. 本学の「目標とする力」（設問1～6問）

##### 本学の「目標とする力」がどの程度身についたか 4 学年全体

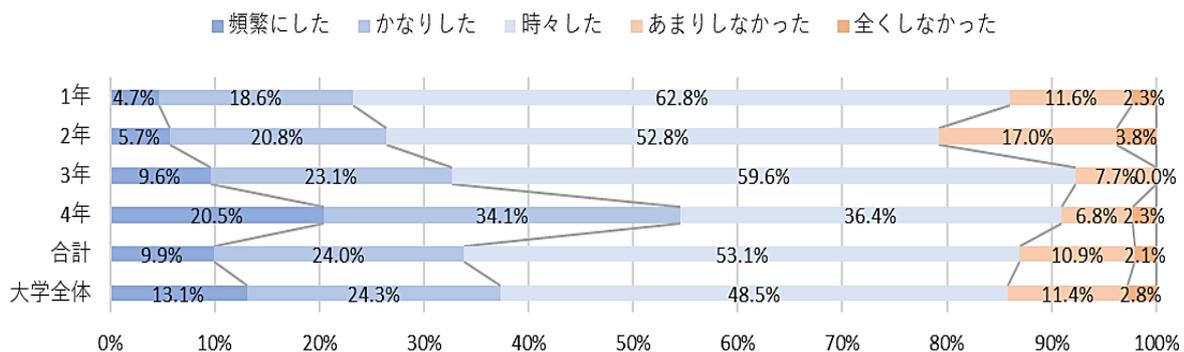


4 学年全体の回答傾向は、大学全体とほぼ同様、「協働力」にはポジティブな回答が多かった。一方、「持続・発展」については、「やや身についた」「あまり身に付いていない」の割合が高めであった。

#### II. 授業関連の学修（設問7～13問）

「学習支援システムを利用した学修」「教員への質問」「友人との勉強」「図書館を利用した勉強」のいずれも全学年では、半数以上が「頻繁にした」「かなりした」と回答した。特に「友人との勉強」は、大学全体と比

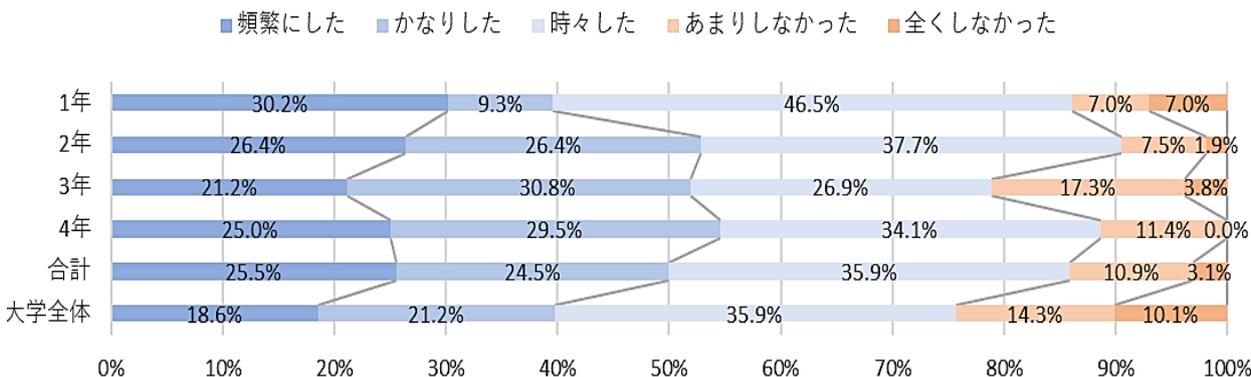
##### 設問7 授業の予習や復習、授業課題のための勉強



較して全学年で「頻繁にした」とする回答が高かった。コミュニケーション力を発揮し、他者と適切な人間関係を構築できる力を身に着けつつ勉学を積極的に進める上でも、引き続きグループ学習の積極的活用が望まれる。

一方、「予習・復習などの勉強」は、1・2年生では「頻繁にした」「かなりした」が25%以下と低かった。「資格取得に係る勉強」と比例する形で、学年を追うごとにその割合は上昇しているものの、作業療法に関する知識の基礎を身に着ける上でも、低学年の段階からの学修の習慣化は、改善すべき課題と考えられる。

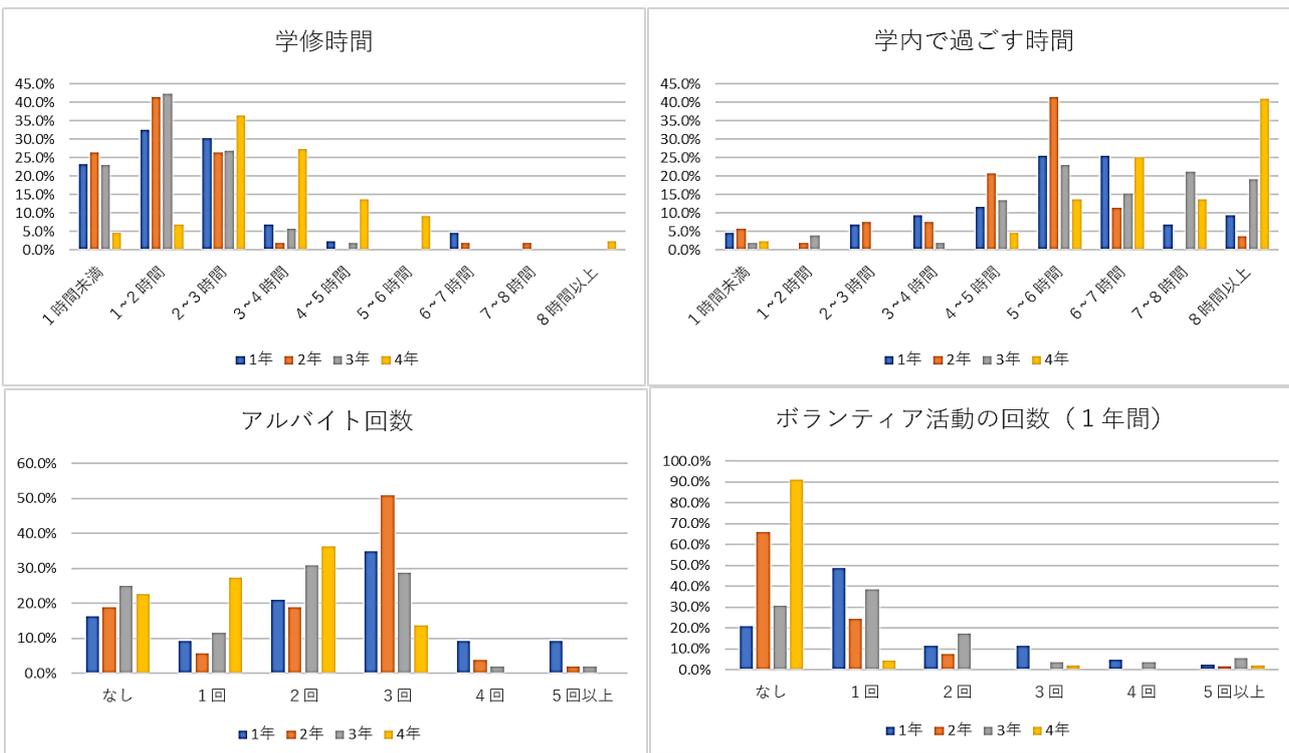
### 設問11 友人と一緒に勉強



## Ⅲ. 1日の時間の過ごし方・授業期間中に行ったこと（設問14～22問）

授業期間中の学修時間は1・2・3年生ともに「1～2時間」が最も多く、4年生では最長「8時間以上」になった。「学内で過ごす時間」も同様に学年を追うごとに多くなっていることから、自宅ではなく大学学内で学修を行う傾向が伺われた。

授業期間中の1週間当たりの「アルバイト回数」は、各学年の2割弱が「なし」と回答した一方、1・2年



生の半数が「3回以上」、3・4年生でも半数が「2回以上」とした。全学年に共通して、授業時間外の多くがアルバイトに費やされたものと考えられる。また、1日の睡眠時間は、各学年ともに半数以上が「5～6時間以上」であった。スケジュール管理と学修時間の確保の指導は全学年に共通して重要と考えられる。

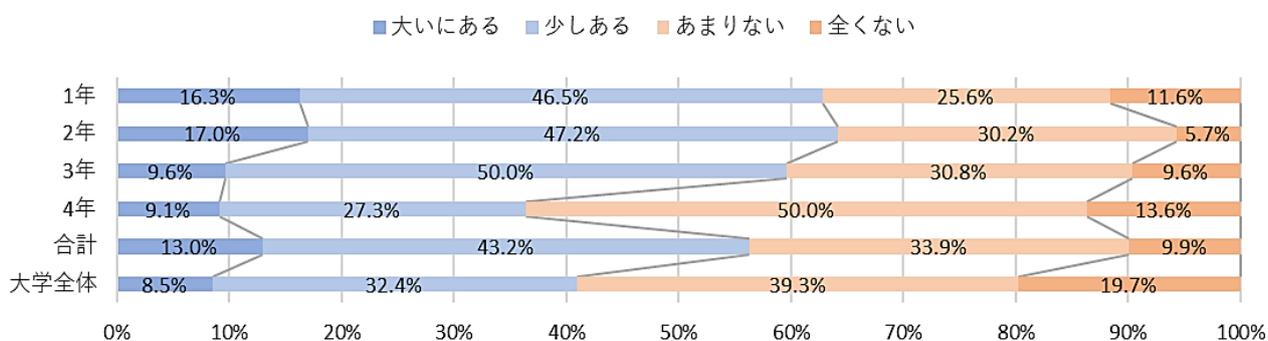
「本を読んだ時間」は各学年に共通して「1時間未満」と低い傾向を示した。また、1年間の「ボランティア活動の回数」は、授業課題として地域参加を推奨された1・3年生の7～8割が「1回以上」参加していた。幅広い教養を身に着け、作業療法の専門的発展に貢献し自己研鑽ができる人材、また、多職種と連携し健康な社会づくりに貢献する人材を育てる上では、引き続き様々な情報提供と国内外の地域参加の機会を提供していくことが必要と考えられる。

#### IV. 教育内容や設備、学習支援への満足度・不安や悩み（設問 23～42）

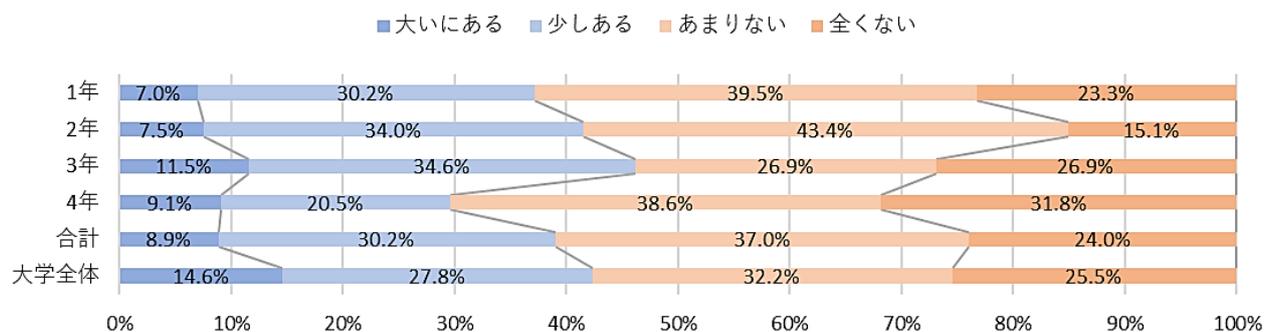
教育内容や設備、学習支援への満足度に関する回答では、全学年の半数以上が、大学全体の回答傾向と同様に、「大学全般を総合的に判断して」、「とても満足」「かなり満足」としていた。

不安や悩みも、大学全体の回答傾向と大きい差がみられる項目はなかったが、「授業内容についていけない」と「卒業後にやりたいことがみつからない」への1・2・3年生の回答は、「少しある」が高かった。早期からのキャリア教育と、不安を抱えながら勉学に向き合う学生支援を充実させる必要があると考えられる。授業内容の理解を深めるために、引き続き学科独自で毎週実施している1・2年生対象の「学修支援の取り組み」を有効活用していきたい。

設問35 授業の内容についていけない



設問36 卒業後にやりたいことがみつからない



## V. 学科独自設問 大学入学時と比べて身についたと感じる「能力」(設問 44～85 問)

全項目において、1・2年生に比べ、3・4年生において「十分に付いた」「かなり付いた」とする回答の割合が高かった。特に、「作業療法士の役割に対する理解」「人と作業の多様性の理解」「作業療法士になる使命感・責任感・倫理感」における「十分に付いた」「かなり付いた」とする回答は全学年を通じて高いものとなっていた。総合すると、学生は、学年を追うごとに自らの学修成果を多方面にわたり自覚しているものと考えられた。

全41問中の8問「他の人と協働しながら物事を進める力」「自分の考えをまとめて発表する力」「地域課題を見出す」「社会情勢への興味・関心」「作業療法研究への興味・関心」「作業療法を研究する意義の理解」「研究倫理への理解」で、「十分に付いた」「かなり付いた」とする回答の割合は、3年生に比べ4年生でやや低かった。これらは1・2年生に比較すれば高い回答割合を維持していたが、就職や資格試験の準備、臨床実習等に費やす時間の多い4年生では、実践機会の少なさが影響している可能性が考えられる。また、4年生が、総合臨床実習等を経て最上位学年としての多くの学修成果を自覚している一方、作業療法の専門的發展に貢献し自己研鑽できる力や、実社会で自律して対象者の多様性を尊重しニーズに誠実に応える力を発揮するには、まだ多くの不安を有することの表れとも推察される。

1年生では、「自己研鑽する意思」「人とコミュニケーションする力」に対する「十分に付いた」「かなり付いた」とする回答が比較的高かった。これは学修意欲の高まりと、幅広い教養とコミュニケーション力を発揮し、他者と適切な人間関係を構築できる力の表れとも考えられる。この点に対応し、引き続き「フレッシュセミナー」等を通じたきめ細かい学修支援と問題解決型学修を推進していく必要性が指摘される。また、「生活行為向上マネージメント (MTDLP) に関する基本的な知識」「地域課題を見出す」においては、当該課題を学習目標として掲げる科目「地域作業療法学」や「臨床実習Ⅲ (地域実践)」の配当学年である3年生において、「十分に付いた」「かなり付いた」とする回答が高かった。引き続き、各科目、また各学年のセミナークラス等において、学生が自らの学修成果を振り返り実感することのできる工夫を図ること、また、eポートフォリオの有効活用などが課題として指摘される。

### まとめ

例年通り、多くの設問において4年次では高い修得状況が見られた。中でも、「作業療法士の役割理解」や「対象者の多様性への対応力」、「倫理観・使命感」に関しては3年次に比べてさらに高い到達が確認された。臨床実習や国家試験準備といった実践的負荷の高い時期にありながらも、学びへの前向きな姿勢を保ち、知識・技術に加えて、専門職としての責任感や人間的成長も着実に育んでいる様子がうかがえた。学生生活の初期をコロナ禍の制約下で過ごしてきた世代であるが、対人支援職としての成長に必要な多様な学びを、自らの努力と環境支援のもとで積み重ねてきた結果といえる。

2024年度の健康メディカル学部作業療学科の回答率は、休学中等の学生を除くとほぼ100パーセントであった。多くの学生の協力を得た調査結果として、今後の教育内容の改善につながるよう、各学年のセミナー授業担当者ともより詳細なデータの分析と協議を重ね、引き続き、来年度以降の教育改善と、学生自身の学修行動の改善並びに学修成果の実感につなげられるよう、学科一丸となって研鑽していく必要がある。

## 2024年度 健康メディカル学部言語聴覚学科

### 学修行動と学修成果の調査の分析

言語聴覚学科では、教育上の目的を5つの能力、①医療専門職としての基礎力（日本語能力、社会性、倫理観等）、②言語聴覚士としての基礎知識、③言語聴覚士としての専門知識、④言語聴覚士としての臨床力（言語聴覚療法の実践力、他職種と連携する能力等）、⑤言語聴覚士としての総合力の修得としている。そこで、言語聴覚学科では全学科共通のアンケート調査内容に加えて、全学年に対し、①～⑤の修得状況を確認するためのアンケート項目を加えて調査を実施している。

#### 1. 授業関連について

授業の予習や復習について、1～2年生は「頻繁にした」と「かなりした」を合わせるとそれぞれ31.1%、18.5%で、学修習慣があまりついていない学生が多いことが分かった。一方、3年生は40.6%、4年生は79.3%であり、学年が上がると学修に対する意識が変化することが分かった。1～2年生で学ぶ必修科目の多くは言語聴覚士国家試験と関係しているため、低学年から授業の予・復習を習慣付ける指導が必要と考えられた。

#### 2. 本学の教育内容、設備、学生支援について

大学の設備について「やや不満」「とても不満」と学生が回答した割合（全学年平均）が高かった項目は、「講義教室の設備（空調や照明を含む）」（やや不満11.3%・とても不満3.0%）、「学生食堂」（やや不満12.8%・とても不満5.3%）。学生がどのような点に不満を持っているのか、改善できる点はないか、継続して検討したい。

学科・コースの教員による指導・相談について、満足（とても満足・かなり満足・やや満足）と回答した学生の割合は、1年生82.2%、2年生77.8%、3年生81.3%、4年生96.6%であり、1～3年生と4年生とで大きく異なる結果となった。2年生から専門科目の学修が本格的に始まり、学修内容の量も増える。3. で後述するように、学生は学習についていけるか不安を抱えている。セミナーでの個別指導の他、各授業でもより丁寧な指導が必要と考えられる。本学科では国家試験に向けて、4年生に対する少人数指導／個別指導に力を入れている。4年生の満足度はその成果の反映と考えた。

#### 3. 学生の不安・悩みについて

「授業の内容についていけない（大いにある）」と回答した学生は1年生22.2%、2年生22.2%、3年生25.0%、4年生0.0%であり、1～3年生の2割強が実際に授業内容の理解が不十分であることが分かった。また「身体面の健康状態への不安や悩みが大いにある」と回答した学生は1年生8.9%、2年生11.1%、3年生21.9%、4年生6.9%、「精神面の健康状態への不安や悩みが大いにある」と回答した学生は1年生13.3%、2年生18.5%、3年生25.0%、4年生6.9%に上った。不安について、約85%の学生が友人・家族・教員等に相談しているが、誰とも相談しない学生も約10%いる。個別指導で丁寧に聞き取りを行い、必要であれば専門機関への相談へつなげる等の対応をしていきたい。また、授業内容についていけない不安が身体的・精神的な不調を増悪してしまう可能性も考えられるため、学修支援を丁寧に行う必要もあると考えた。

#### 4. 専門的な知識と技能の修得状況について

言語聴覚学科において修得が望まれる5つの能力(①医療専門職としての基礎力、②言語聴覚士としての基礎知識、③言語聴覚士としての専門知識、④言語聴覚士としての臨床力、⑤

言語聴覚士としての総合力)について、学年毎の評定平均値を算出し(表1)、学年間で評定平均値を比較した。

なお、「Q38 物事を分析的・批判的に見る力」～「Q55 健康や生活を自己管理する力」を①医療専門職としての基礎力、「Q56 基礎医学・臨床医学・臨床歯科医学に関する基礎知識」～「Q60 社会福祉・教育・リハビリテーションに関する基礎知識」を②言語聴覚士としての基礎知識、「Q61 言語聴覚障害に関する基礎知識」～「Q66 聴覚障害学に関する基本的臨床技能」を③言語聴覚士としての専門知識・技能、「Q67 言語聴覚療法を実践する力」～「Q70 他職種と連携(情報提供・収集)する力」を④言語聴覚士としての臨床力、「Q71 言語聴覚士になるための総合力」～「Q77 言語聴覚士として社会に貢献する力」を⑤言語聴覚士としての総合力と分類した。

表1：5つの能力の修得実感についての学年毎の評定平均値

	1年生	2年生	3年生	4年生
①基礎力(共通・教養・倫理) : DP1, 2, 3 に対応	3.5	3.3	3.6	3.9
②基礎知識(専門基礎) : DP1, 4 に対応	3.4	3.1	3.3	3.6
③専門知識・技能(専門) : DP1, 4 に対応	2.9	3.2	3.4	3.7
④臨床力 : DP2, 5 に対応	2.5	2.5	3.0	3.6
⑤総合力 : DP1～6 に対応	2.9	2.7	3.1	3.6
平均	3.0	3.0	3.3	3.6

(学生は「5:十分付いた、4:かなり付いた、3:少し付いた、2:あまり付いていない、1:全く付いていない」の5段階で回答した)

#### 【参考】2023年度 学修行動調査アンケート結果

(5:十分付いた、4:かなり付いた、3:少し付いた、2:あまり付いていない、1:全く付いていない)

	1年生	2年生	3年生	4年生
①基礎力(共通・教養・倫理) : DP1, 2, 3 に対応	3.2	3.3	3.5	3.8
②基礎知識(専門基礎) : DP1, 4 に対応	3.1	3.1	3.1	3.5
③専門知識・技能(専門) : DP1, 4 に対応	3.0	3.2	3.2	3.8
④臨床力 : DP2, 5 に対応	2.4	2.9	2.9	3.6
⑤総合力 : DP1～6 に対応	2.7	3.0	3.1	3.6
平均	2.9	3.1	3.2	3.7

1) 5つの能力のうち、①基礎力、②基礎知識の基礎的な能力は1年生の段階から「修得した」と感じていることが示された。

2) ③専門知識は2年生から、④臨床力は3年生から、⑤総合力は4年生になって「修得した」と感じており、カリキュラムに沿った修得状況となった。

3) ディプロマポリシー(以下DP)との関連について、DP1(人文・社会科学、自然科学の教養、人間愛にあふれた人格)、DP2(コミュニケーション能力、社会性、倫理感)については初年次からの修得が可能であり、フレッシュセミナーを中心とした初年次教育、学修支援が重要であることが考えられた。DP3(社会人として自立(律)する力)、DP4(基礎知識、専門知識)、DP5(臨床技能)、DP6(研究、発信)については、各論、実習等を通して高学年で徐々に修得されることが示唆された。

4) 2年生～4年生の平均評定値を前年度アンケート結果と比較すると、全学年評定値が上っており、1年前に比べて専門的な知識や技能を「修得した」と感じていることが分かつ

た。

## 5. 4年生について

### 1) 満足度について

表2に2024年度4年生の、2021年度（1年次）～2024年度（4年次）の満足度の推移を示した。「学科・コースの教員による指導・相談」の満足度は4年次で満足度が大幅に上がっており、臨床実習や国家試験の指導の手厚さを反映した結果であろうと解釈した。

次年度以降も、満足度の推移に着目して分析し、学生指導の参考にしたい。

表2：2024年度4年生の満足度の推移

(各項目に対する とても満足/かなり満足/やや満足 の合計、単位：%)

質問項目	1年次 (2021年度)	2年次 (2022年度)	3年次 (2023年度)	4年次 (2024年度)
メディアライブラリー(図書室)の設備や学修環境	94.9%	100.0%	96.9%	93.1%
演習室や実習室の設備や器具	100.0%	97.1%	93.8%	96.6%
講義教室の設備(空調や照明を含む)	76.9%	85.7%	90.6%	86.2%
学生食堂	92.3%	91.4%	81.3%	79.3%
所属する学科・コースで学ぶことができる教育内容	94.9%	94.3%	96.9%	96.6%
学科・コースの教員による指導・相談	92.3%	88.6%	81.3%	96.6%
事務職員によるサポート	94.9%	88.6%	87.5%	82.8%
保健室や付属の医療施設	94.9%	91.4%	100.0%	96.6%

### 2) 成長実感について

表3に、2024年度4年生の2021年度（1年次）～2024年度（4年次）の「言語聴覚学科において修得が望まれる5つの能力の修得実感」の評定値の推移を示した。2年次から3年次では評定値の下がった項目が見られたが、4年次では全ての項目の評定値が上がっており、専門的な知識や技能の修得実感が上がったことが分かった。

表3：2024年度4年生「言語聴覚学科において修得が望まれる5つの能力」の修得実感の推移  
(5:十分付いた、4:かなり付いた、3:少し付いた、2:あまり付いていない、1:全く付いていない)

	1年次 (2021年度)	2年次 (2022年度)	3年次 (2023年度)	4年次 (2024年度)
①基礎力(共通・教養・倫理) : DP1, 2, 3 に対応	3.4	3.6	3.5	3.9
②基礎知識(専門基礎) : DP1, 4 に対応	3.2	3.3	3.1	3.6
③専門知識・技能(専門) : DP1, 4 に対応	2.7	3.4	3.2	3.7
④臨床力 : DP2, 5 に対応	2.7	2.8	2.9	3.6
⑤総合力 : DP1~6 に対応	2.1	3.0	3.1	3.6
平均	2.8	3.2	3.2	3.6

## 2024年度 健康メディカル学部心理学科

### “学修行動と学修成果の調査”の解析

心理学科では全学共通の項目に加え、学生が在学中に修得することが望ましい学修内容について41の学科独自の項目を用いて、学修行動と成果について調査している。これらをもちいて3つのポリシー（アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー）を踏まえた学科の取り組みの点検・評価を試みた。ここでは主に5つのディプロマポリシーを中心に解析した内容について述べる。ディプロマポリシー（DP）とはすなわちDP①社会人として自立するために、主体的に学び、チャレンジし続ける力を有している、DP②幅広い教養と技術を活用し、多角的な視点を持って、問題に計画的に取り組む力を有している、DP③適切なコミュニケーションスキルを持ち、他者とチームを組んで能力を発揮する力を有している、DP④人間を理解する心理学の知識と方法を修得し、それらを社会で応用する力を有している、DP⑤心理に関する支援の学びを通して、責任ある社会人としての倫理的態度を有している、の5つである。ここでは昨年度と同様、全学共通の項目についての結果をまとめたのち（下の1から3）、特に卒業年次である4年生の満足度と成長実感（同じく4）、加えて学科のディプロマポリシーに関わる学修効果について評価、点検した（同じく5）。

#### 1. 授業と授業期間中の活動について

“授業の予習や復習”などの項目について、学生は「頻繁にした」、「かなりした」、「時々した」、「あまりしなかった」、「全くしなかった」の5つの選択肢から1つを選び回答した。

授業の予習や復習について、1年生は「頻繁にした」と「かなりした」を合わせると24.6%、「あまりしなかった」と「全くしなかった」を合わせると21.1%で、普段あまり学修していないという報告が一定数見られる。2年生では、予習、復習の頻度が増加する傾向であった（例えば2年生では「頻繁にした」と「かなりした」の合計が28.7%、「あまりしなかった」と「全くしなかった」の合計が17.9%に減少した）。3、4年生の回答を含め学年による増減は見られるものの、予習等を「頻繁にした」と「かなりした」を合わせた割合は全ての学年で大学全体の平均値（37.4%）を下回っており、今後、他の学科等の取り組みを参考にしながら、学生が予習、復習、授業のための勉強を行いやすい環境作りに努めることが望ましいと考えている。

オンライン学修支援システム（manaba）を利用した学修については、「頻繁にした」と「かなりした」を合わせると学年全体では62.8%であった。大学全体では「頻繁にした」と「かなりした」の合計は47.9%であり、心理学科ではオンライン学習支援システムが相対的に活用されている。

就職や資格取得に関わる勉強について、1年生は52.6%の学生が「あまりしなかった」あるいは「全くしなかった」と答えている。一方、4年生では「あまりしなかった」あるいは「全くしなかった」と答えた学生は、21.9%であり、学年が上がるにつれ改善する傾向が見られた。今後、低学年の意識を変えてゆく必要が示唆されている。

授業に関して“友人と一緒に勉強”することを「あまりしなかった」、「全くしなかった」学生の割合は1年生では29.8%であったが、学年が上がるるとともに増加し4年では40.0%であった。大学全体ではこの割合は24.4%であり、現在、心理学科では、学年が上がるにつれ友人と一緒に勉強する学修姿勢は優勢ではないことが示唆される。

授業期間中に、“部活動やサークル活動を行った回数（一週間あたり）”については、「なし」と回答した割合が1年生で80.7%であり、どの学年においても大学全体の値である78.2%より多かった（「なし」と回答した割合が最も低い値は1年生の80.7%であり、最も高

い値は3年生の91.8%であった)。つまり心理学科の多数の学生が部活動やサークル活動に関与していないと回答した。

## 2. 本学の設備や教育内容について

設備や教育内容についての満足度においては(5肢選択)、特に“学科・コースの教員による指導”に対して「かなり満足」、「とても満足」という回答の合計は、1年生では57.9%であるのに対して4年生では62.9%と5ポイント増加した。一方、その他の項目に関しては学年が進んでも大きな変化がないか、あるいは減少することがあった(例えば“所属する学科・コースで学ぶことができる教育内容”の満足度については同様の数値が1年生で63.2%、3年生で52.6%、4年生で59.0%と学年が上がることで一部減少を見せた)。こうした傾向は昨年度に行った分析と同様であった。

## 3. 学生生活における不安や悩みについて

学生生活における複数の不安、悩みのそれぞれについて「大いにある」、「少しある」、「あまりない」、「全くない」の4つから学生があてはまるもの1つを回答した。基本的に多くの項目で上の学年ほど不安、悩みが減少する傾向が見られた。例えば「卒業後にやりたいことがみつからない」点については、「大いにある」あるいは「少しある」という割合が1, 2年生では63.9%であるが、3, 4年生では45.5%と減少し、同じく「学内の友人関係に悩みがある」点については同様の値が1, 2年生では24.7%であるが、3, 4年生では16.3%に減少した。一方で、「希望の就職先や進学先へ行けるか不安だ」という点については、同様の値は1, 2年生で82.3%、3, 4年生でも57.4%と過半の学生が悩み、不安をある程度抱えていることが示された。この点で個々の学生の卒業後の進路準備に関する支援のさらなる強化が望まれる。

学内の友人関係などの悩みについて「誰に相談しましたか」という設問では、学生は友人、家族、教職員、その他等から最大2つを選び回答した。心理学科の学生について「誰にも相談していない」と回答した者の割合は全学年ではほぼ同様の値を示し、全体では13.2%であった。これは大学全体の割合である13.2%と同じ水準であった。全学的に相談相手を得やすい環境作りを意識することが実りある学生生活に有効かもしれない。

その他、「授業の内容についていけない」点については、1, 2年生では50.6%の学生が不安、悩みが「あまりない」あるいは「全くない」と回答したが、3, 4年生ではこの値は77.7%へ上昇し、学年の高低を問わず過半の学生が学修に不安、悩みを明確には感じていないことが示唆されるものの、1, 2年では50%程度が授業の内容に関して「少し」あるいは「大いに」悩みがあると回答しているとも言え、より効率的な学修支援体制の構築が望まれる。

## 4. 4年生の満足度と成長実感について

特に最終学年である4年生の満足度と成長実感について分析した。

満足度については、一部の項目について下位の学年よりも満足度が高いことが示された。例えば“学科・コースの教員による指導・相談”は、1年生では5段階評価における「かなり満足」と「とても満足」の合計は回答者のうち57.9%であったが、2, 3, 4年生では順に59.4%、60.8%、62.9%と漸増し、類似の傾向は“学生生活”への満足についても見られた。一部の例外はあると同時に、増加傾向はほぼ同内容の設問において一昨年度とそれ以前も観察されており、4年生の数値が1年生よりも高いことがうかがえる。

成長実感については、学生の自己評価による成長度合いを用いて分析した。例年と同様、4年生の成長実感は下位の学年と比べ高い傾向があった。例えば4年生では“心理学に関する基礎知識”が「十分付いた」あるいは「かなり付いた」と回答した学生の割合は回答者の56.2%をしめたが、1年ではこの値は40.4%であった。他にも“心理療法に関する知識”では1年次の29.8%が、4年次に56.2%に、同じく“主体的に行動する力”については40.4%

が61.0%に上昇するなど、全体として4年生の自己評価にみられる成長の実感はより高い傾向があった。全体的な傾向については次項と図も参考になる。

#### 5. 学修行動と学修成果の調査とディプロマポリシー (DP)

心理学科独自の41個の設問を用いて冒頭に記したディプロマポリシーごとの達成度を評価した。学生は主に、“大学入学時と比べて、以下に挙げる「能力」は身に付きましたか。”という共通の設問のもと、“幅広い知識と教養”などの41項目に対して回答した。この際学生は「十分付いた」、「かなり付いた」、「少し付いた」、「あまり付いていない」、「全く付いていない又は該当しない」の5つの選択肢から1つを回答した。全体的には全てのディプロマポリシーについて学年がすすむとともに、身に付いたという自己評価が高くなる傾向が見られると同時に、4年生後期の時点でディプロマポリシーに関する能力が「十分付いた」あるいは「かなり付いた」と答えた学生の割合が40%前後であることが示された(36%から46%の範囲)。

DP①社会人として自立するために、主体的に学び、チャレンジし続ける力を有している

“主体的に行動する力”など、このディプロマポリシーに関わる全項目を合わせると、能力が「十分付いた」あるいは「かなり付いた」と回答した学生の割合は、1, 2年では43.4%であったが、3, 4年では58.6%であった。

DP②幅広い教養と技術を活用し、多角的な視点を持って、問題に計画的に取り組む力を有している

“幅広い知識と教養”など、このディプロマポリシーに関わる全項目を合わせると、能力が「十分付いた」あるいは「かなり付いた」と回答した学生の割合は、1, 2年では43.8%であったが、3, 4年では55.8%であった。

DP③適切なコミュニケーションスキルを持ち、他者とチームを組んで能力を発揮する力を有している

“他の人と協働しながら物事を進める力”など、このディプロマポリシーに関わる全項目を合わせると、能力が「十分付いた」あるいは「かなり付いた」と回答した学生の割合は、1, 2年では46.1%であったが、3, 4年では58.4%であった。

DP④人間を理解する心理学の知識と方法を修得し、それらを社会で応用する力を有している

“心理学に関する基礎知識”など、このディプロマポリシーに関わる全項目を合わせると、能力が「十分付いた」あるいは「かなり付いた」と回答した学生の割合は、1, 2年では33.3%であったが、3, 4年では49.1%であった。

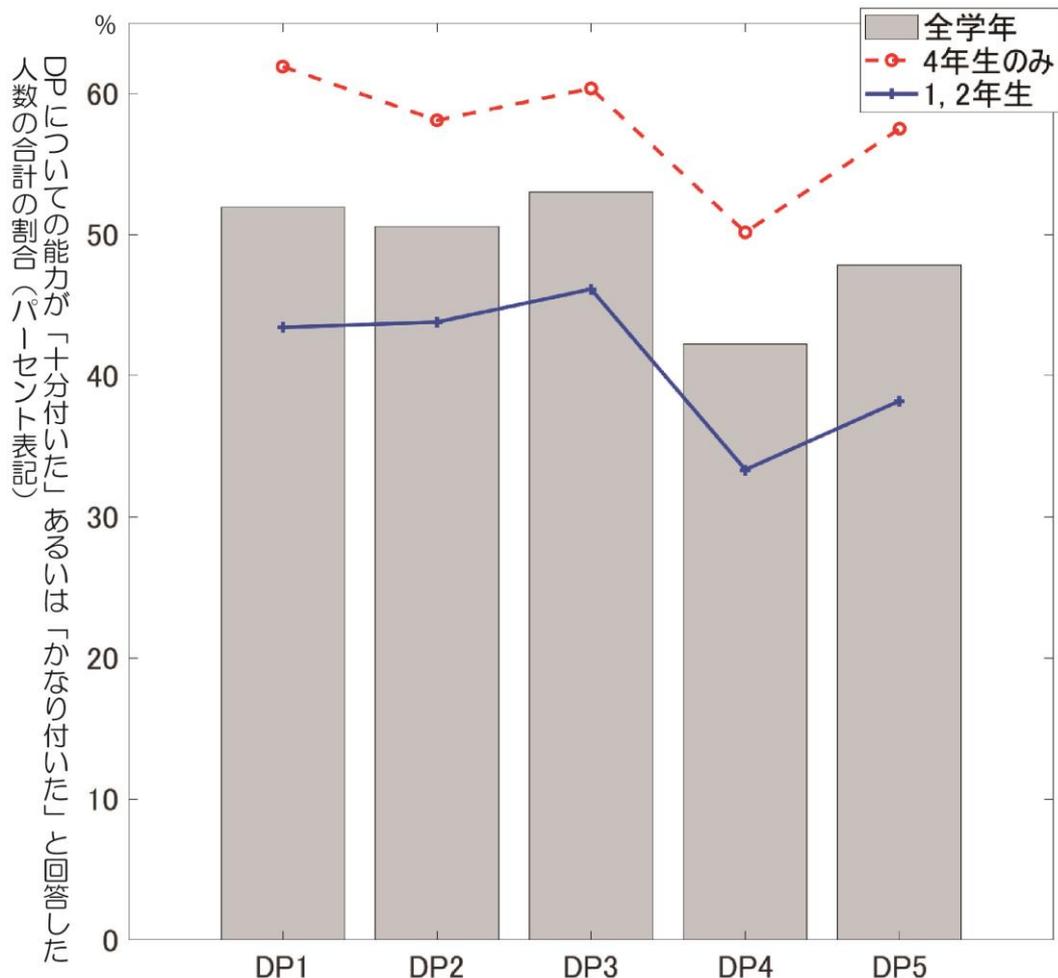


図 DP についての能力が、「十分付いた」あるいは「かなり付いた」と自己評価した学生の人数（2つの合計）が全体の人数に占める割合（パーセント）。卒業前の時点で概ね6割であることがわかる。

DP⑤心理に関する支援の学びを通して、責任ある社会人としての倫理的態度を有している“対人援助職になるための総合力”など、このディプロマポリシーに関わる全項目を合わせると、能力が「十分付いた」あるいは「かなり付いた」と回答した学生の割合は、1, 2年では38.2%であったが、3, 4年では55.3%であった。

ディプロマポリシーに関する分析からは、学年が進むとともにディプロマポリシーに沿った学修が進展していることを読み取ることができる。同時に、自分に身に付いたと自己評価する学生の割合は卒業前の時点でも全体の60%を大きく超えることはなく、これは昨年度も同程度の値であった。今後特にDP4の改善に向けて問題解決型の授業を導入するなど教育内容の見直しを進めること、PDCAサイクルを具体化していくこと、さらにアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの適切性自体を評価し続けていくこと、加えて卒業生が就職した組織・企業からの卒業生の評価など学修成果等についてのなんらかの客観的な指標を併用することが望ましいかもしれない。

## 2024年度 健康メディカル学部健康栄養学科

### 学修行動と学修成果の調査アンケート結果について

健康メディカル学部健康栄養学科では、3ポリシー<sup>注)</sup>（AP：アドミッションポリシー、DP：ディプロマポリシー、CP：カリキュラムポリシー）を基盤とし、高度な知識と技能、豊かな人間性を兼ね備えた管理栄養士の養成を重要な使命としている。本学科では、学生の学修成果の可視化と分析により、DPに掲げる学修成果の点検と評価、現行教育課程とCPの達成度の検証を目的として学修行動と学修成果の調査アンケートを実施した。

#### 【調査の概要】

- 調査対象      ・・・健康栄養学科に在籍する1～4年次の学生（274名）
- 調査期間      ・・・2024年11月18日～12月8日
- 調査方法      ・・・UNIPAを用いたWEBアンケート（選択式）
- 調査内容      ・・・全80問（全学共通設問43問、学科独自設問37問）
- 回答数        ・・・248人
- 回収率        ・・・90.5%

#### 【結果】

##### 1. 授業・学修について（全学共通）

4年次学生の学修に対する取り組み姿勢は3年次から大きな伸びが見られた。特に、授業の予習や復習、課題のための勉強、就職や資格に関わる勉強について、「頻繁または、かなりした」と回答した学生は4年次でそれぞれ49.2%（3年次は21.6%）、77.2%（3年次は15.0%）となり、前年度に比べ25ポイント以上の大幅な向上が見られた。この結果は、学生個人が国家試験の難易度と資格の取得、4年次必修科目の重要性をこれまで以上に強く意識し、勉強に取り組んだ結果と考えられる。一方、1年次の学生では、授業の予習や復習、課題に関する勉強について「頻繁または、かなりした」と回答した学生は25.4%となり、6割超の学生が「授業についていけない」と回答していることから、初年度教育の検証、充実化に向けた検討が必要と考えられる。

##### 2. 不安や悩みについて（全学共通）

授業内容に対する不安は学年進行に伴い減少傾向がみられるものの、1年次の学生の17.5%が「大いにある」と回答しており、授業の予習や復習、課題に関する取り組み（上記1）結果も踏まえ、新たな対応の検討が必要と考える。また、「オフィスアワー等を利用した教員への質問」を積極的に利用する学生は1、2年次では10%未満に留まることから、オフィスアワーの周知・活用方法について更なる検討が必要と考えられる。

##### 3. 教養、コミュニケーション力の修得状況について（学科DP1、DP2）

DP1（幅広い教養を身につけ、自立（律）できる力を有している）に該当する設問（44-50）に関しては、概ね学年進行に伴い身についた、特に「かなり、または十分ついた」と回答する学生が増加している。中でも、自分のキャリアについて考える力（設問47）の修得は4年次で

「かなり、または十分ついた」と回答する学生が3年次より20%程度増加した。臨地実習や就職活動、国家試験に向けた学修などが修得状況の向上に寄与したと考えられる。一方、文章（レポート）を書く力（設問45）、起立や約束を守る態度（設問49）は4年次に修得状況が若干低下し、就活などを通じて社会と接することによる自信の無さ、または自己評価を厳しくする様子が見られた。

DP2（コミュニケーション力を活かし、他者と協働する力を有している）に対応する設問（51-55）では、設問55を除き、2～4年次全てで50%以上が「かなり、または十分ついた」と回答していた。セミナーでの学外実習や臨地実習の実施、就職活動等の機会が修得状況の向上に関わるものと考えられる。多職種と連携（情報提供・収集）する力（設問55）に関しては、3年次で身についたと回答する学生が大幅に向上した。3年次の多職種連携論の履修や臨地実習において、様々な職種と接する機会があることが要因の一つと考えられる。

#### 4. 専門基礎分野の知識と技能の修得状況について（学科DP3）

DP3（食・栄養学における専門分野で社会に貢献できる力を有している）に対応する設問（56-63）では、調理・加工に関する基本的知識と技術（設問60）、食・健康・栄養学への興味と関心（設問63）で、各学年での修得状況が高く、特に2年次で「かなり、または十分ついた」と回答した学生が3年次よりも多い結果となった。食・健康・栄養学への興味と関心が高い高校生が健康栄養学科に入学するケースが多いことや、1年次で基礎調理学実習があり、基本的な調理の知識と技術が増したことが原因と考えられる。また、社会環境と健康に関する基礎的知識（設問61）では1年次で「かなり、または十分ついた」と回答した学生が最も多かった。セミナーでSDGsやフードロスに関する調べ学習とプレゼンテーションを行っており、食環境についての知識がついたと捉えたと考えられる。その他の多くの設問は学年進行に伴い増加がみられた。これらの質問は、対象となる科目が限定されていることから、修得状況が科目の配当年次と相関する可能性が考えられる。

#### 5. 専門知識と技能の修得について（学科DP4）

DP4（管理栄養士に必要な高度専門職としての資質・使命感を修得し、社会で活躍できる能力を有している）に関する設問（64-71）。いずれも設問も、「かなり、または十分ついた」と回答する学生は1年次では低く、学年進行に伴い増加した。専門科目や総合演習などの演習科目での学修、臨地実習等での経験が、必要とされる知識と技能の修得向上に繋がったと考えられる。

#### 6. 専門家を目指す学生としての態度の修得について（学科DP4）

管理栄養士として社会で貢献するには、知識・技術に加えて、クライアントの人権の尊重、守秘義務など社会観念も必要である。管理栄養士になる使命感・責任感・倫理感（設問72）、守秘義務の理解と秘密を守る態度（設問73）、クライアントの人権を尊重する態度（設問74）の結果は、学年が上がるごとに十分に身についた割合が高くなり、4年次ではほぼ100%の学生が身につけていると回答している。専門科目や総合演習、セミナー等での教育や臨地実習において人を対象とする場合の態度や実際に対象者と接する学修があることが専門家としての態度の育成の一助となっていると考えられる。

#### 7. 現場での実践力（臨床力）の修得について（学科DP3、DP4）

管理栄養士になる使命感・責任感・倫理感（設問66）、現場の状況に応じた行動力（設問75）食・健康・栄養学の専門家としての総合力（設問76）、の修得は4年次ではほぼ100%に近い割合で身につけている。横断的学習を目的とする総合演習や臨地実習の修得が、管理栄養士としての総合力や応用力を養う要因の1つと考えられる。

## 8. 研究への興味・関心について (学科 DP5)

問題提起、問題解決能力について、学年が上がるにつれ力をつけている (設問 77, 78)。健康・栄養に関する研究を行う意義の理解は4年生までに90%超が「かなりついた」～「少しついた」と答えている (設問 78)。研究倫理への理解も学年が上がるにつれ身についたと答える割合が高くなっているが、理解が足りない者が4年次で10.5%となっている (設問 80)。研究を遂行する上で研究倫理は重要であるため、研究への興味・関心を高めると同時に研究倫理の修得を高めることが重要と考えられる。4年次での研究倫理の指導機会と適切な教授方法について検討が必要と考えられる。

### 【まとめ】

例年通り多くの設問において4年次では高い修得状況が見られた。中でも、①現場の状況に応じた行動力、②食・健康・栄養学の専門家としての総合力、に関し、「十分またはかなり付いた」と回答した学生は3年次では40%程度であったが、4年次では65%程度の学生が「十分またはかなり付いた」と回答しており、学生自身が成長を実感しているものと考えられる。

本調査による学修行動・学修成果の検証と可視化を通じて、本学科の教育方針や教育課程の効果を客観的に評価し、更なる改善を目指したい。

注) [https://www.thu.ac.jp/aboutus/disclosure/policy/health\\_medical](https://www.thu.ac.jp/aboutus/disclosure/policy/health_medical) 参照

## 2024年度 健康メディカル学部医療科学科 救急救命士コース 学修行動と学修成果の調査アンケートの解析

2024年度は、オンライン授業等の新型コロナウイルス感染拡大に伴う影響を受けた学生が卒業し、本アンケート調査の対象は平常の学修生活を送った学生である。また、救急救命士コース独自の設問に関しては、統合や簡素化を図り、昨年までの設問数57から設問数37に見直しを図った。

これらを踏まえ、学修行動と学修成果のアンケート結果を分析した。

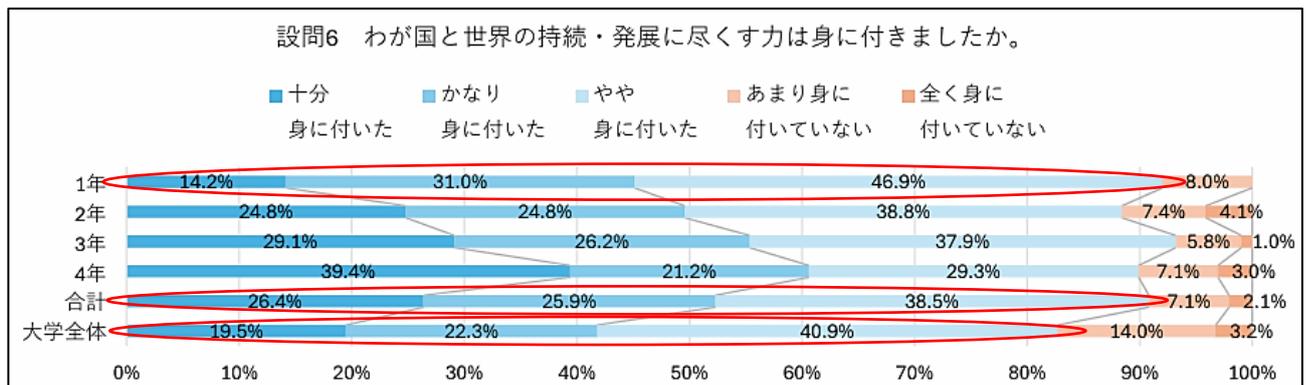
### 1 共通設問の分析

- (1) 項目1「本学の『目標とする力』がどの程度身についたかを教えてください。(設問1～6)」

本項目では、設問1から設問5においてコース全体と大学全体の結果は概ね同様の割合の回答となっていた。

設問6「我が国と世界の持続・発展に尽くす力は身につきましたか」については、肯定的回答はコース全体の91.8%に対し、大学全体は82.8%であり、107ポイント以上の差が認められた。

本コースでは2023年度から開設された「SDGs」に関わる科目の履修を強く推奨し、特に1年生は多くの学生が履修しており、このことが数値となって表れているものと推察する。【グラフ1】



【グラフ1】

- (2) 項目2「2024年度の授業に関連して、以下のことをどのくらいしましたか。(設問7～13)」

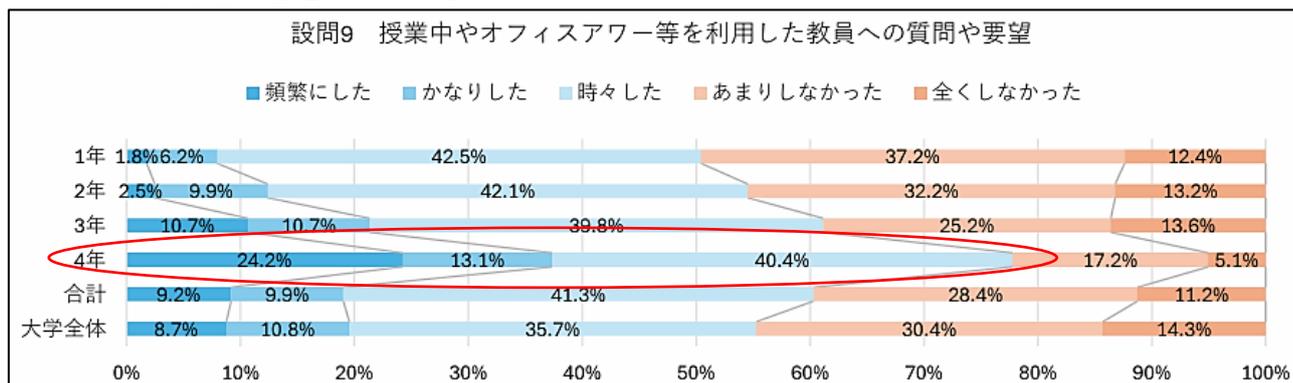
本項目では、コース全体と大学全体とを比較し、特に特徴的であった、設問9、設問10、設問12、設問13について考察した。

ア 設問9「授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問や要望」について

本設問では、コース全体と大学全体では大きな差異は認められなかったが、4年生の結果については肯定的回答が他の学年を大きく上回っていた。

4年生は国家試験対策や就職活動対策を理由に教員との関わりが深くなっているも

のと推察する。【グラフ2】

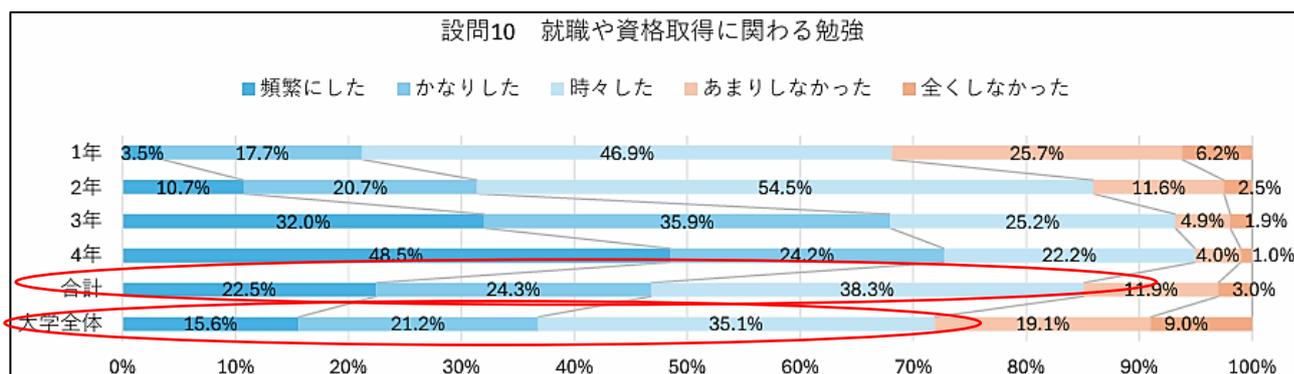


【グラフ2】

イ 設問10「就職や資格取得に関わる勉強」について

本設問では、肯定的回答が、コース全体と大学全体では13ポイント以上の差異が認められた。

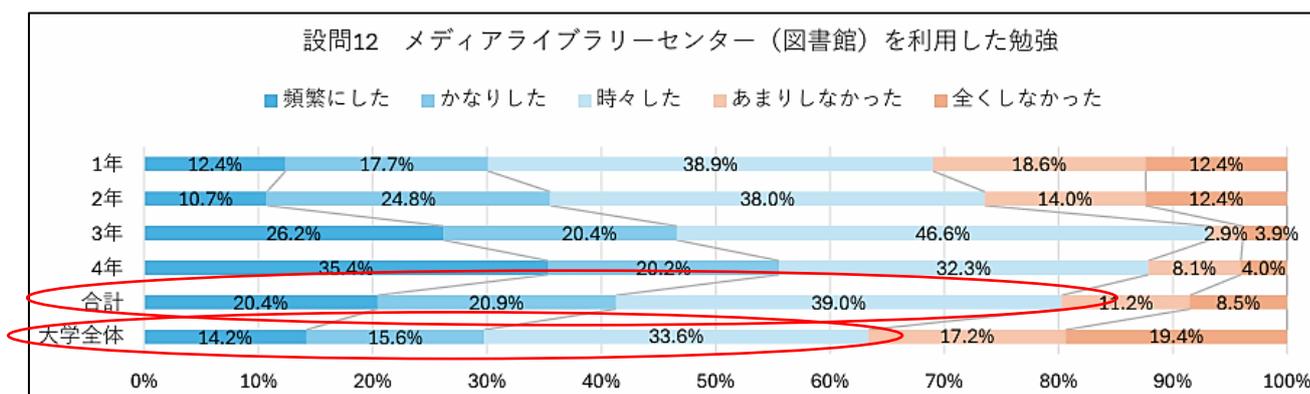
救急救命士コースの特徴として、救急救命士国家資格の取得という目標が明確であり、また希望就職先も資格と連動しており明確であることから、モチベーションに繋がっているものと考えられる。【グラフ3】



【グラフ3】

ウ 設問12「メディアライブラリーセンター（図書室）を利用した勉強」について

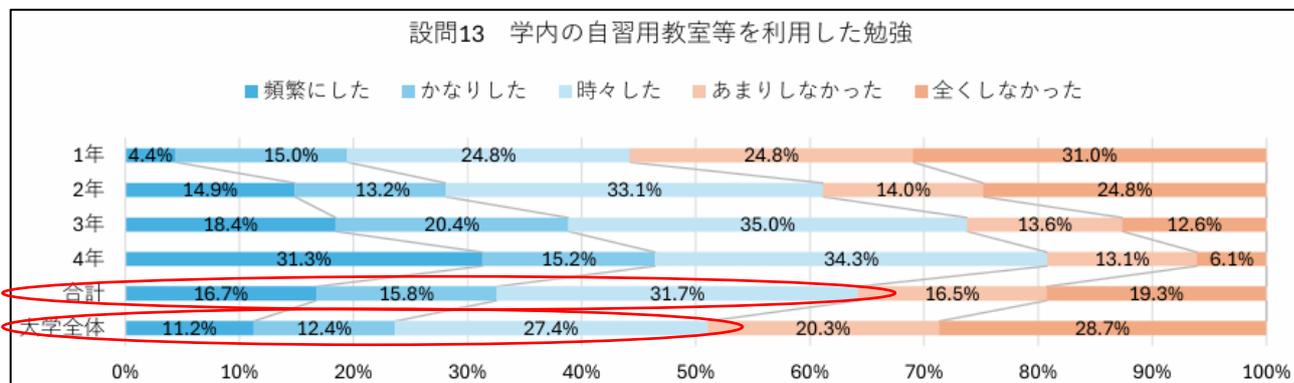
本設問では、肯定的回答が、コース全体と大学全体では17ポイント以上の差異が認められた。救急救命士コースの特徴として、概ね学年に比例し、多くの学生が図書室を利用している状況であった。【グラフ4】



【グラフ4】

エ 設問 13 「学内の自習用教室等を利用した勉強」について

本設問では、肯定的回答が、コース全体と大学全体では13ポイント以上の差異が認められた。設問 12 と同様、救急救命士コースの特徴として、概ね学年に比例し、多くの学生が自習用教室を利用している状況であった。【グラフ 5】



【グラフ5】

- (3) 項目 3 「2024 年度を平均して、授業期間中一日あたり以下のことにかけた時間を教えてください。(設問 14~18)」

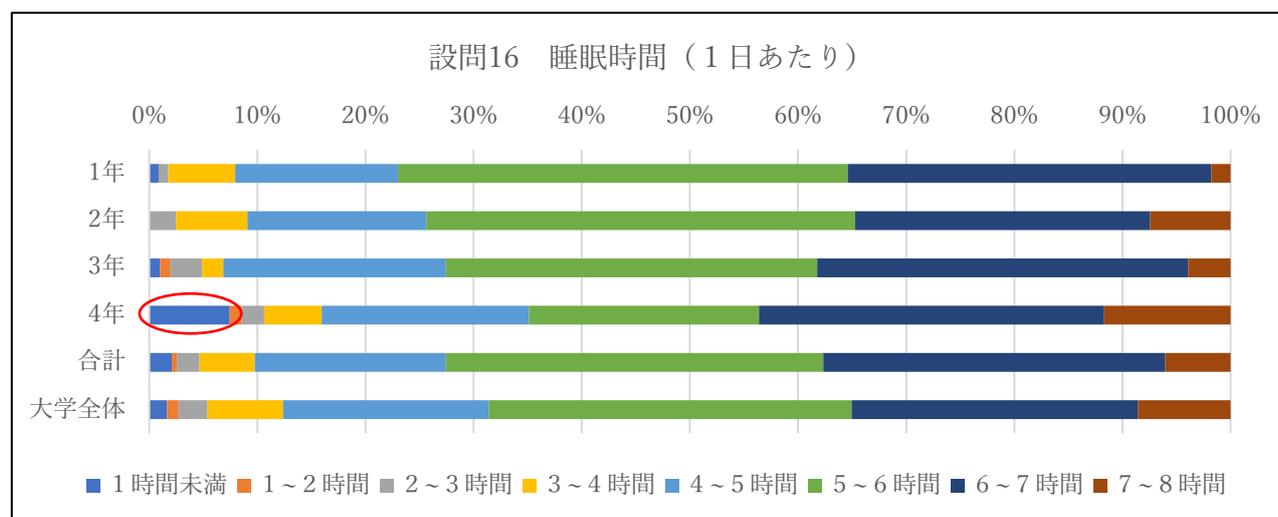
本項目については、コース全体と大学全体とを比較すると概ね同様の結果であった。

その中において、特に4年生に特徴が認められた、設問 16 及び設問 17 について考察した。

ア 設問 16 「睡眠時間（1日あたり）」について

本設問では、4年生の睡眠時間が短いことが認められる。睡眠時間が5時間未満は、4年生は32.6%であり、学生全体の29.6%を上回っており、特に1時間未満について、4年生は7.1%、学生全体は1.6%と大きな差が認められた。

国家試験や就職試験対策の学修のために睡眠時間が削られている可能性が否めない。極端な睡眠不足が続くと心身に障害をきたす可能性があるため、後で述べるリフレッシュ時間の確保と共に、定期的な生活指導もしていきたい。【グラフ 6】

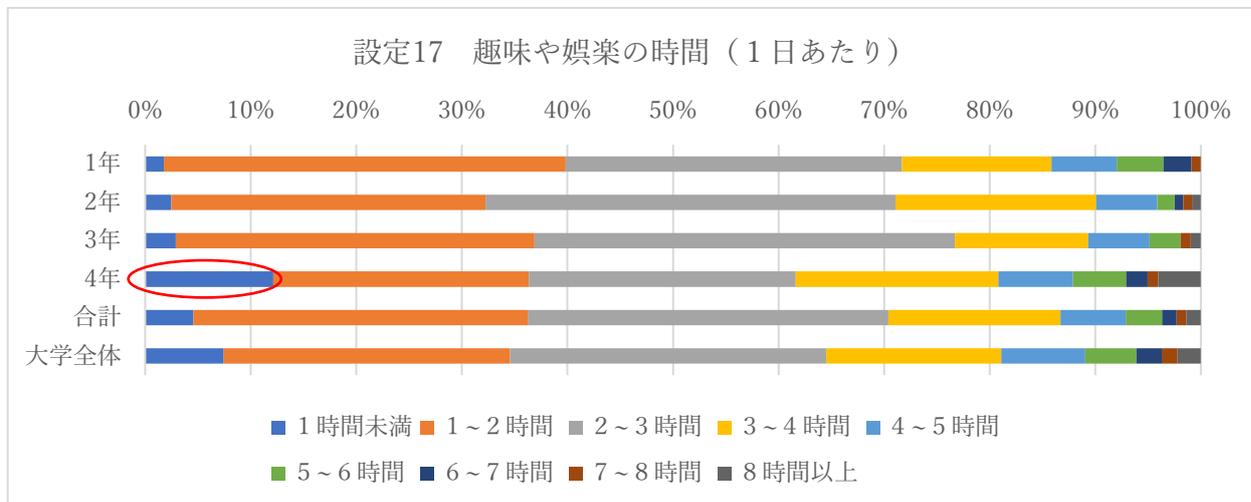


【グラフ6】

イ 設問 17「趣味や娯楽の時間（1日あたり）」について

本設問においても、4年生の時間が短いことが認められる、特に1時間未満が12.1%と学生全体の7.5%を大きく上回っている。

設問 16 同様、国家試験や就職試験対策の学修のために趣味や娯楽の時間が削られている可能性が否めない。【グラフ 7】



【グラフ7】

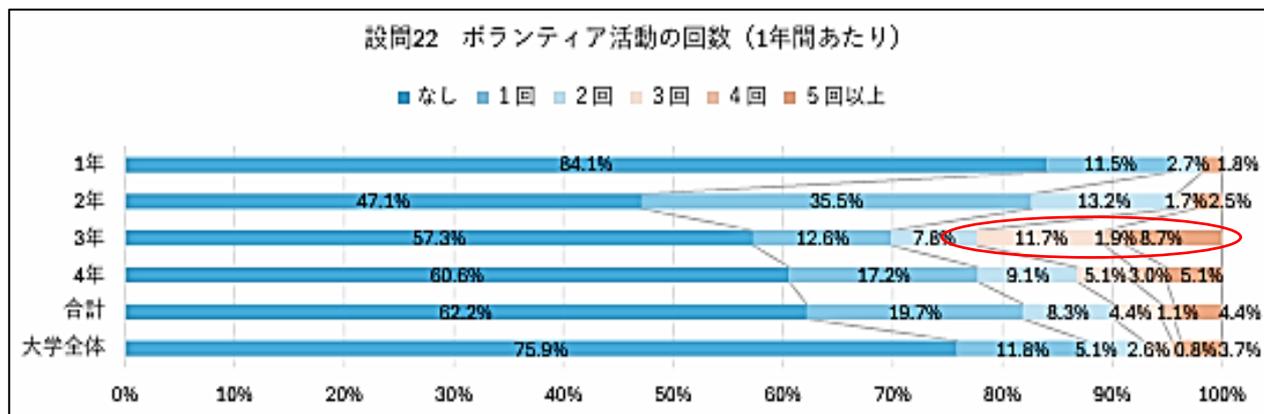
(4) 項目 4「2024 年度を平均して、授業期間中以下のことをした回数を答えて下さい。（設問 19~22）」

本項目では、特徴的であった設問 22 について考察した。

設問 22 では、救急救命士コースの合計と大学全体との数値に大きな差はないが、3年生については他の学年と比較し、回数を多く実施した回答率が高かった。

当コースの学生は、消防団に入団している学生が多く、またサークル活動であるプレホスピタル研究会の活動の一つとして東京マラソンなど大規模イベントにおける救護活動ボランティアを行っている。

消防団活動では実績が認められた3年生が技能確認のための大会に参加することが多く、また救護活動においても一定の知識・技術を習得している3年生の参加機会が多くなっているものと思われる。このようなボランティア活動などによる社会貢献/地域連携は継続していきたい。【グラフ 8】



【グラフ8】

- (5) 項目5「本学の教育内容や設備、学習支援にどの程度満足していますか。(設問 23～34)」

本項目では、コース全体と大学全体とを比較すると概ね同様の結果であり特筆すべきことはなかった。

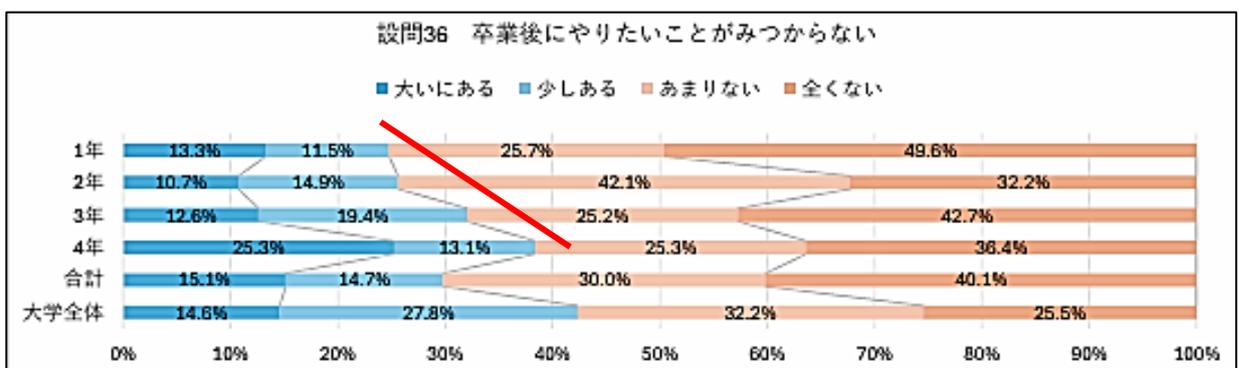
- (6) 項目6「いま次のような不安や悩みがありますか。(設問 35～43)」

本項目では、特徴的であった、設問 36、設問 37、について考察する。

ア 設問 36「卒業後にやりたいことが見つからない。」について

本設問では、ポジティブな回答率は救急救命士コース合計が大学全体に対し 12.6 ポイント高くなっているが、低学年ほど、ポジティブな回答率が低い傾向にある。

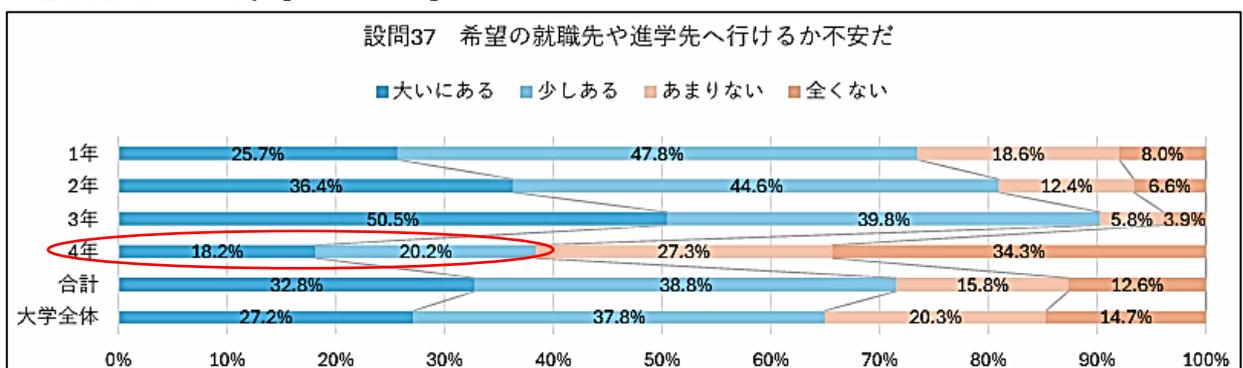
多くの学生が救急救命士の資格取得を目指していることから、その資格が最大限発揮することが出来る就職先などを低学年の時期から目標に掲げモチベーションを高める必要がある。【グラフ 9】



【グラフ9】

イ 設問 37「希望の就職先や進学先へ行けるか不安だ」について

本設問では、コース全体と大学全体とでは大きな差は認められなかったが、他の学年と比べ4年生のポジティブな回答率が大変低い状況になっている。本アンケートが実施された時期を考慮すると、多くの4年生は就職先が決まっている中でこの様な結果になったことは、その理由の精査が必要であるとともに、より寄り添った指導が必要と思われる。【グラフ 10】



【グラフ 10】

2 学科（救急救命士コース）独自項目の設問の分析

救急救命士独自項目の設問は37問であり、「大学入学時と比べ『能力』は身につきましたか」をテーマとしている。

37の設問をⅠ：一般教養、Ⅱ：医療職種における基礎教養、Ⅲ：救急救命士として必要な知識及び技術、Ⅳ：研究分野に関する教養、に分類し分析を行った。【表】

学科独自項目の設問（医療科学科 救急救命士コース）							
設問	質問項目	分類	履修学年	設問	質問項目	分類	履修学年
44	幅広い知識と教養	Ⅰ	1	71	傷病の重症度・緊急度を判断できる能力	Ⅲ	3
45	問題を見つけて解決する力	Ⅰ	2	72	臨床実習の場で適切な判断・処置など対応できる能力	Ⅲ	3
46	英語文章の読解力と英語でのコミュニケーションする力	Ⅰ	1	73	臨床実習の場で記録・報告、スタッフと協働できる能力	Ⅲ	3
47	救急救命士になる使命感・責任感	Ⅱ	2	74	救急活動の中で自分の健康や安全を管理する力	Ⅲ	2
48	傷病者に関する守秘義務の理解と秘密を守る態度	Ⅱ	2	75	物事を分析的・批判的に見る力	Ⅳ	1
49	傷病者の生命を尊重する態度	Ⅱ	2	76	救急医療研究への継続的な興味と関心	Ⅳ	1
50	傷病者の人権を尊重する態度	Ⅱ	2	77	救急医療を研究する意義の理解	Ⅳ	3
51	傷病者や家族に対する思いやりの心	Ⅱ	2	78	研究倫理への理解	Ⅳ	1
52	規則や約束を守る態度	Ⅰ	1	79	自分のキャリアについて考える力	Ⅳ	1
53	文章(レポート)を書く力	Ⅰ	1	80	専門的知識と技術水準を維持しようとする意思	Ⅳ	2
54	情報リテラシーを踏まえ自分の考えをまとめて発表する力	Ⅰ	1	※ 表中の「分類」は、教養分野別分類とし、次のように分類した。 Ⅰ：一般教養 Ⅱ：医療職種における基礎教養 Ⅲ：救急救命士として必要な知識及び技術 Ⅳ：研究・分析に関する教養  ※ 表中の「履修学年」は、カリキュラム上、履修する主な学年を示す。			
55	人とコミュニケーションする力	Ⅰ	1				
56	他の人と協働しながら物事を進める力	Ⅰ	1				
57	人の意見に耳を傾け共感する態度	Ⅰ	1				
58	他の救急救命士コースの学生と協働する能力	Ⅱ	2				
59	人体の構造に関する基本的知識	Ⅲ	1				
60	救急疾患に関する基礎知識	Ⅲ	2				
61	外傷に関する基礎知識	Ⅲ	2				
62	中毒に関する基礎知識	Ⅲ	3				
63	心肺蘇生に関する基礎知識	Ⅲ	2				
64	心肺蘇生以外の救急処置に関する基礎知識	Ⅲ	2				
65	医療制度・社会保障に関する基礎知識	Ⅲ	1				
66	傷病の重症度・緊急度を判断できる知識	Ⅲ	3				
67	傷病者の搬送時の留意点に関する知識	Ⅲ	2				
68	救急救命士が実施可能な手技に関する知識	Ⅲ	2				
69	救急救命士の役割に対する知識と理解	Ⅲ	1				
70	傷病者の状態を記録し報告をする能力	Ⅲ	3				

【表】

(1) 「Ⅰ：一般教養」について

設問44～46、設問52～57の9問を「一般教養」として分類した。

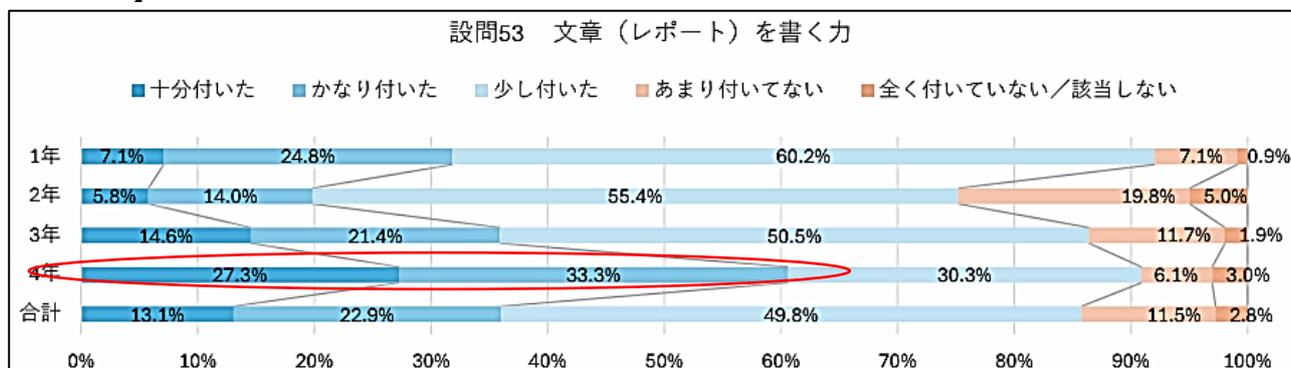
学年による回答結果に特徴的であった設問53及び設問54について考察した。

ア 設問53「文章（レポート）を書く力」について

本設問では、「十分付いた」、「かなり付いた」の回答が、4年生は他の学年と比較し

高かった。学年全体の 39.0%に対し 4 年生は 60.6%と 20 ポイント以上の差があった。

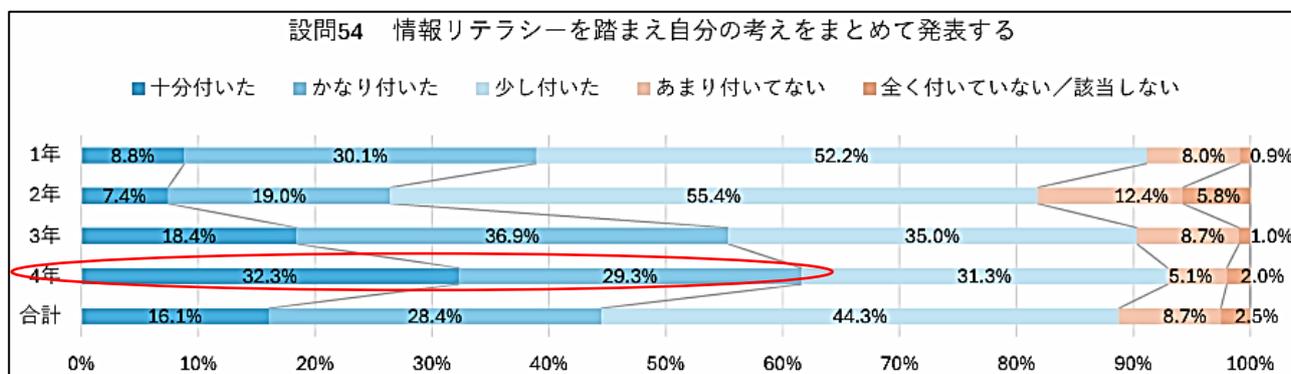
理由として、この設問に関する科目の履修は 1 年生であるが、3 年時の臨床実習後のレポート作成及び発表により実践的手法が身についたものと考えられる。【グラフ 11】



【グラフ 11】

イ 設問 54 「情報リテラシーを踏まえ自分の考えをまとめて発表する力。」について  
本設問では、「十分付いた」、「かなり付いた」の回答が、4 年生は他の学年と比較し高かった。学年全体の 34.5%に対し 4 年生は 61.6%と 27 ポイント以上の差があった。

理由として、設問 53 同様、この設問に関する科目の履修は 1 年生であるが、3 年時の臨床実習後のレポート作成及び発表により実践的手法が身についたものと考えられる。【グラフ 12】



【グラフ 12】

(2) 「Ⅱ：医療職種における基礎教養」について

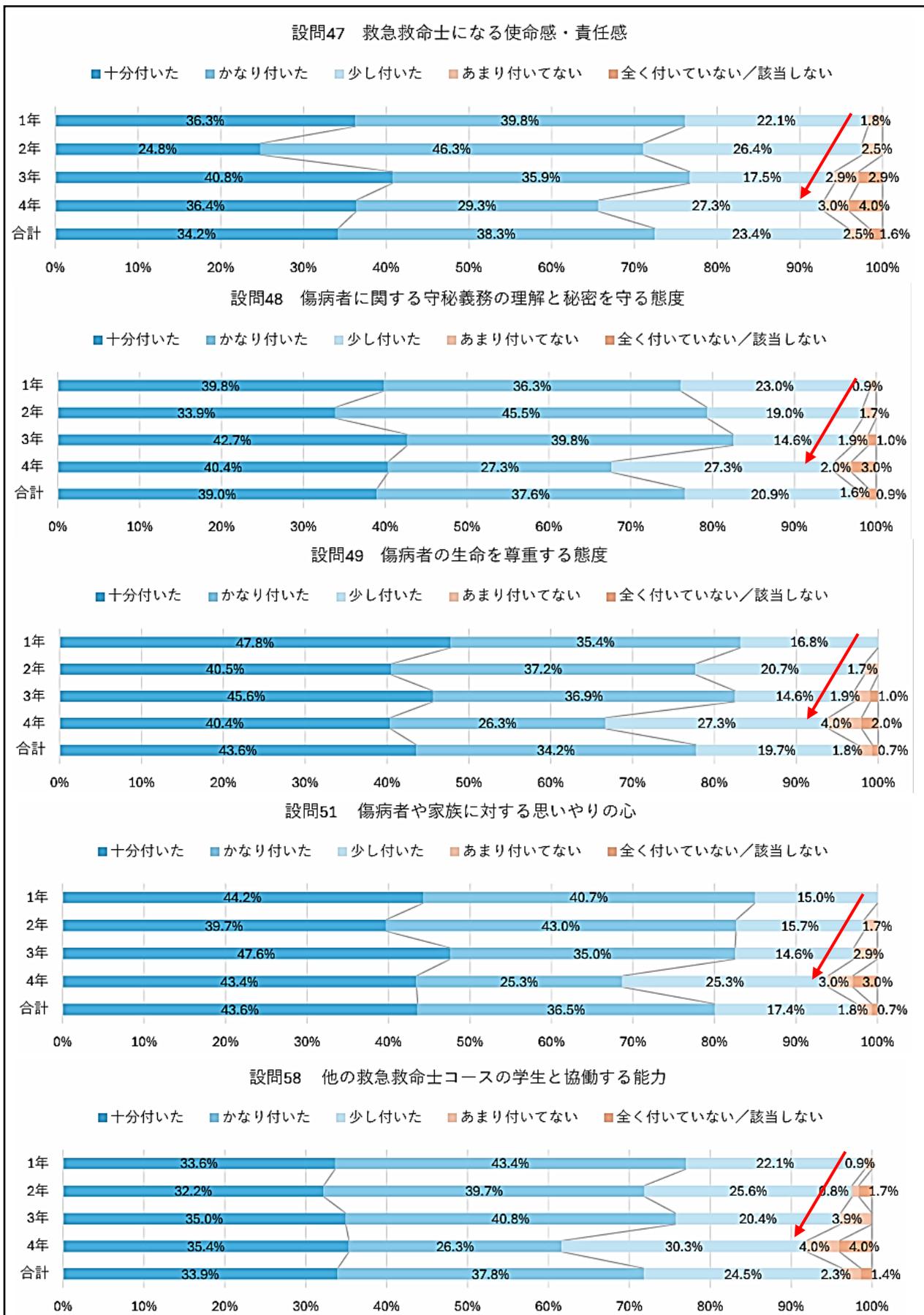
設問 47～51 及び設問 58 の 6 問を「医療職種における基礎教養」として分類した。

ア 設問 47 「救急救命士になる使命感・責任感」、設問 48 「傷病者に関する守秘義務の理解と秘密を守る態度」、設問 49 「傷病者の生命を尊重する態度」、設問 50 「傷病者の人権を尊重する態度」、設問 51 「傷病者や家族に対する思いやりの心」、設問 58 「他の救急救命士コースの学生と協働する能力」について

全ての設問において、「十分付いた」、「かなり付いた」、「少し付いた」の合計の回答率は 90%以上と良好な結果であった。一方、僅かならではあるが、学年が高学年になると比例し、その率が下がっていく傾向にある。

主に 2 年生で履修する内容であり、学年が高学年になるほどその理解度は高まるものとの予想に反していた。

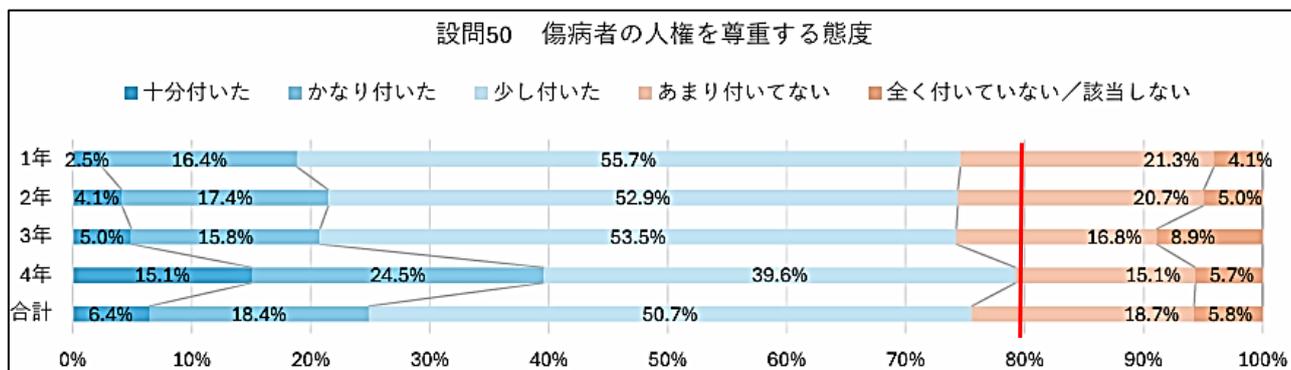
その理由として、3年生で臨床実習など、実際の現場を経験したことにより、その実践の難しさを認識した結果が現れたものとする。【グラフ13】



【グラフ13】

イ 設問 50 「傷病者の人権を尊重する態度」について

本設問は、「十分付いた」、「かなり付いた」、「少し付いた」の合計の回答率は80%を割り込んでいる。現代社会の多様性の許容の傾向をも踏まえ、更なる理解度の向上が必要と思われる。【グラフ 14】



【グラフ 14】

(3) 「Ⅲ：救急救命士として必要な知識及び技術」について

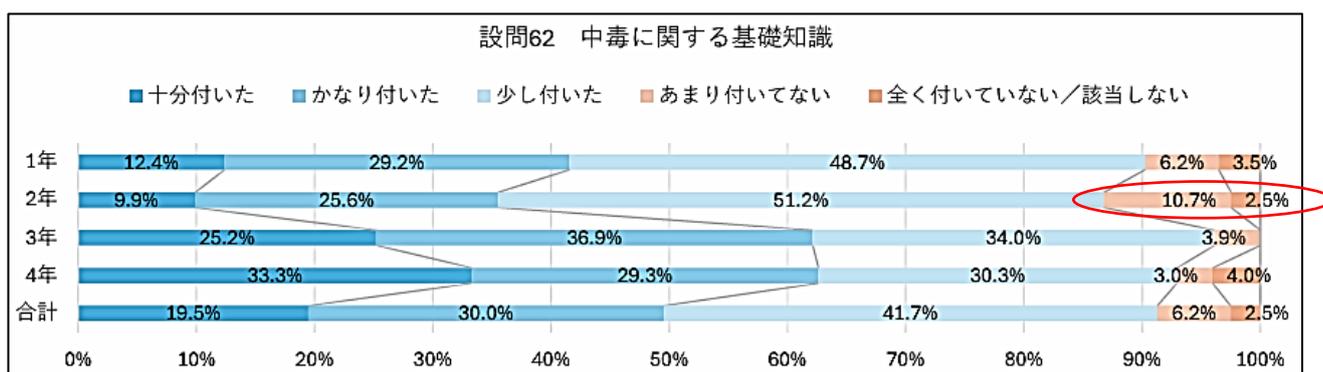
設問 59～74 の 16 問を「医療職種における基礎教養」として分類した。

「十分付いた」、「かなり付いた」、「少し付いた」の回答率が90%未満の設問について分析した。

ア 設問 62 「中毒に関する基礎知識」について

本設問では、上記回答率について、合計が91%に対し、2年生の回答が86.8%と90%を割り込んでいる。また1年生は90.3%と90%台をこらうじて保っている。3年生は96.1%、4年生は93%であった。

本科目は3年生で履修することからすると順当な結果と考えられる。【グラフ 15】



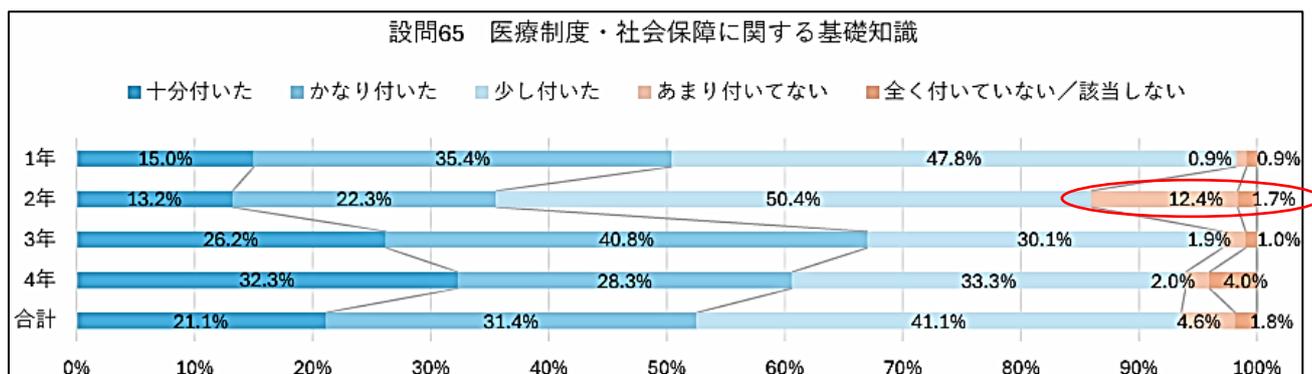
【グラフ 15】

イ 設問 65 「医療制度・社会保障に関する基礎知識」について

本設問では、「十分付いた」、「かなり付いた」、「少し付いた」の回答率は、1年生は98.2%、2年生は85.9%、3年生は97.1%、4年生は94.0%であり、2年生の低さが目立っている。

本科目は1年生で履修していることから、本来、2年生では身につけていなければな

らない知識であることから、一度履修した知識の蓄積に目を向ける必要がある。【グラフ 16】

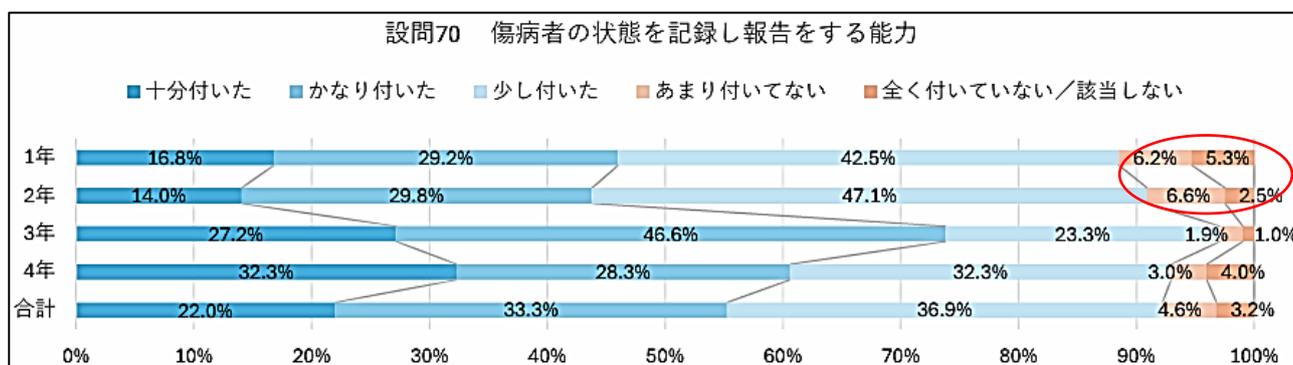


【グラフ 16】

ウ 設問 70「傷病者の状態を記録し報告をする能力」について

本設問では、「十分付いた」、「かなり付いた」、「少し付いた」の回答率は、1年生は88.5%、2年生は90.5%、3年生は97.1%、4年生は93.0%であり、1年生2年生の低さが目立っている。

本科目は、「救急救命実習Ⅳ」、「救急用自動車同乗実習」、「臨床実習」など、3年生が履修する実習科目の中で修得する内容である。このことからすると、1年生及び2年生の数値は順当な結果と考えられる。【グラフ 17】

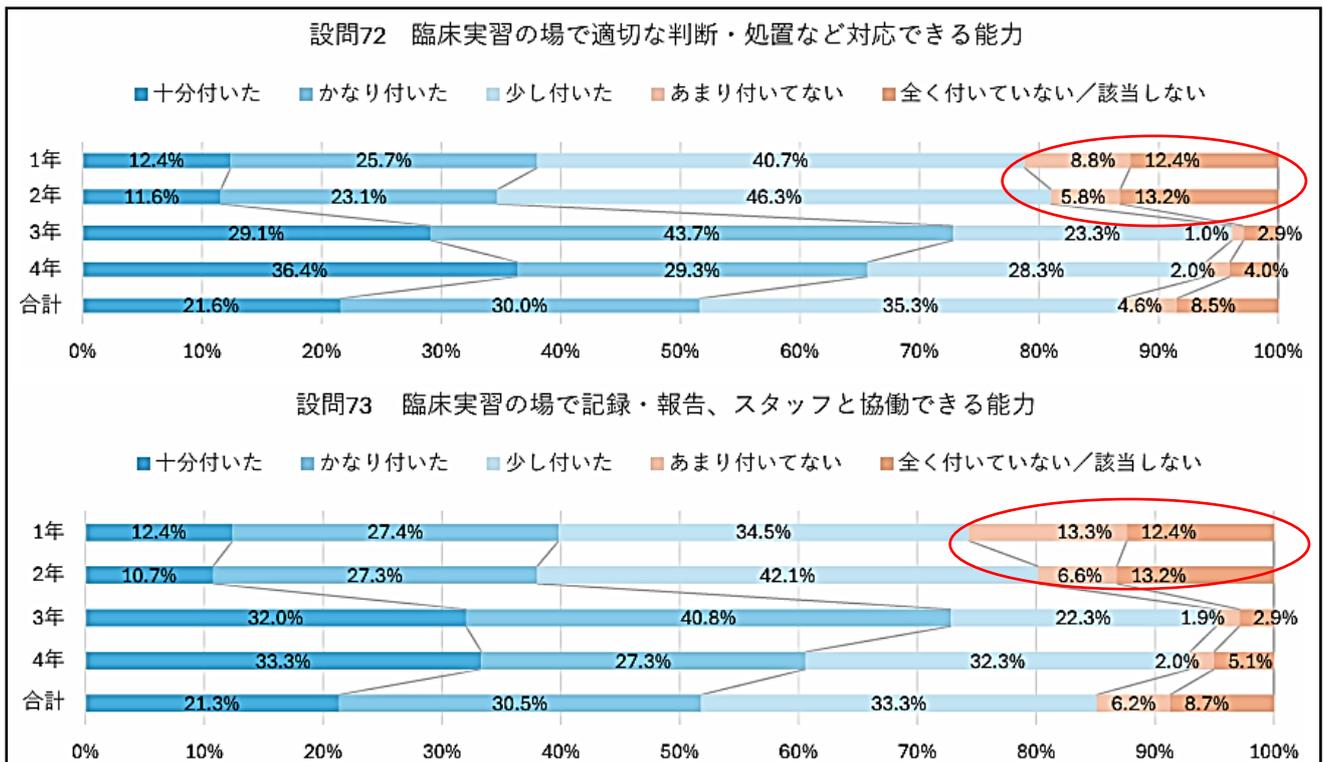


【グラフ 17】

エ 設問 72「臨床実習の場で適切な判断・処置など対応できる能力」及び設問 73「臨床実習の場で記録・報告、スタッフと協働できる能力」について

この2つの設問については、1年生と2年生は80%前後の回答率に対し、3年生と4年生は90%以上の回答となっている。

臨床実習の履修が3年生であることからすると順当な結果と考えられる。【グラフ 18】



【グラフ 18】

(4) 「IV：研究分野に関する教養」について

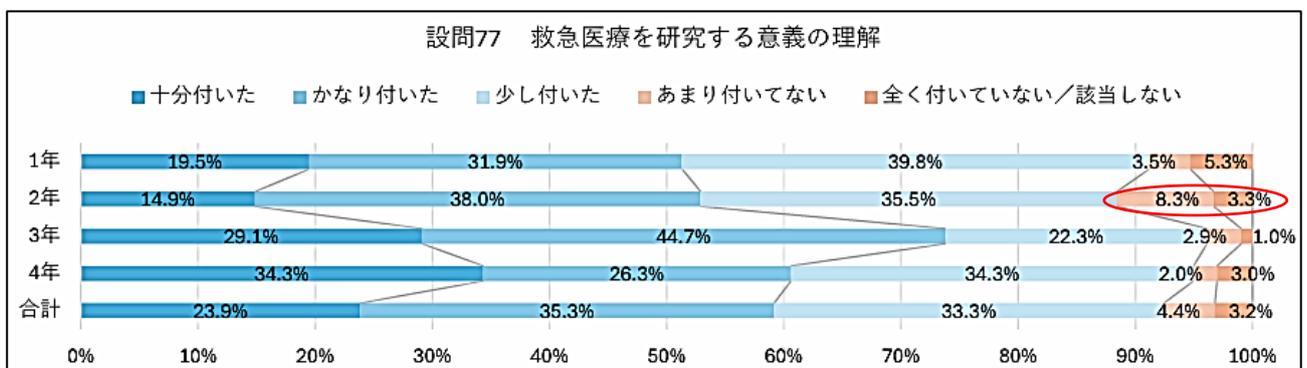
設問 75～80 の 6 問を「医療職種における基礎教養」として分類した。

「十分付いた」、「かなり付いた」、「少し付いた」の回答率が 90%未満の設問について分析した。

ア 設問 77「救急医療を研究する意義の理解」について

本設問については、2年生の回答率が 88.4%と 90%台を割り込んでいることにに対し、1年生、3年生、4年生については 90%以上の回答率であった。

研究に関する手法や、研究を実践するのが 3年生であることからすると順調な結果であると考える。【グラフ 19】



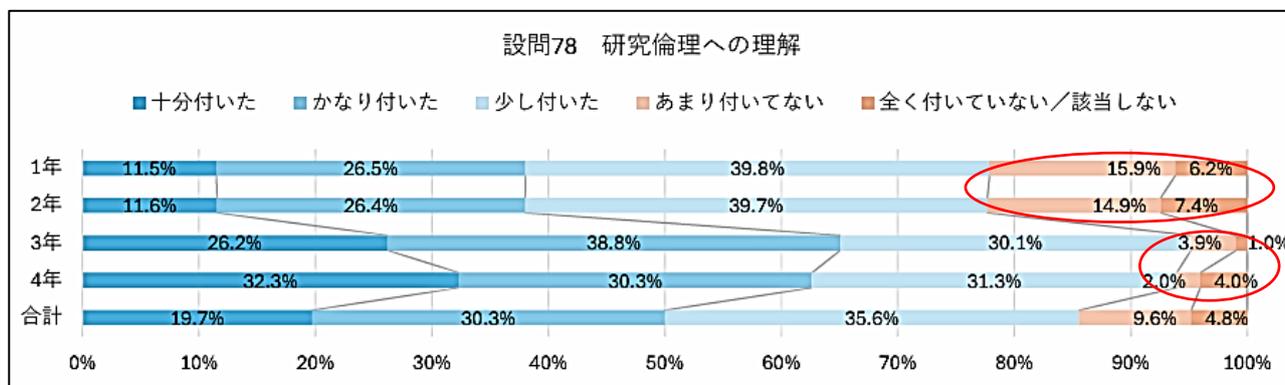
【グラフ 18】

イ 設問 78「研究倫理への理解」について

本設問については、1年生は 78.9%、2年生は 77.7%と 80%台を割り込んでいる。一

方、3年生は95.1%、4年生は94.0%1年生、3年生、4年生については90%以上の回答率であった。

研究に関する手法や、研究を実践するのが3年生であることからすると順調な結果であるとする。【グラフ19】



【グラフ19】

### 3 まとめ

2024年度学修行動と学修調査アンケート結果の分析を行った。

新型コロナウイルス感染症が五類感染症に指定され、各種制限が解除された中での1年間であった。しかし、本アンケート調査ではその影響を示唆するデータは認められなかった。

全体的には肯定的回答が否定的回答を上回っており、コース全体の数値が大学全体の数値をも上回っており、学生の満足度が高いことが表れていた。

一方、救急救命士コース独自の設問においては、昨年同様、学年による格差、教養種別による格差が認められた。

今後、この格差の縮小を図るとともに、良好な回答であった項目についても、より一層、学生の満足度を高めるよう全ての項目で改善を図っていきたい。

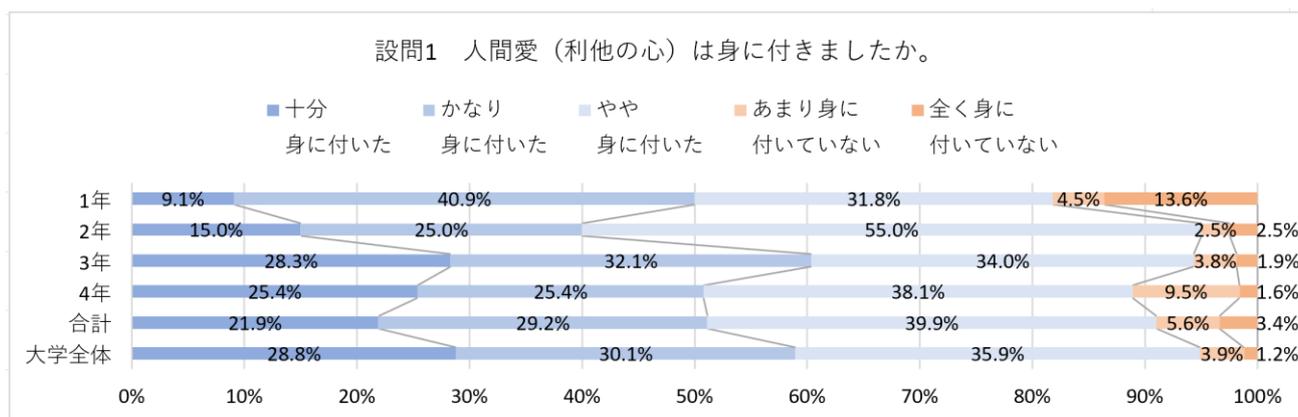
## 2024年度 健康メディカル学部 医療科学科 臨床工学コース

### 学修行動と学修成果の調査アンケートの解析

臨床工学コースでは、①生体の理解に必要な医学的知識と工学的知識の修得、②医療分野における医療機器を介し、医療技術を支援するための電気・電子工学的知識の修得、③医療において必要不可欠な医療機器が有するリスクを十分に理解し医療安全の構築に努める、④医療チームの一員として、他職種の業務に関しても十分な知識を有し、円滑な連携に努める、などのことが可能になるような教育を実施している。このような視点に沿って設問に関して分析を行った。

#### 項目1 本学の「目標とする力」がどの程度身に付いたか教えてください。(設問1~6)

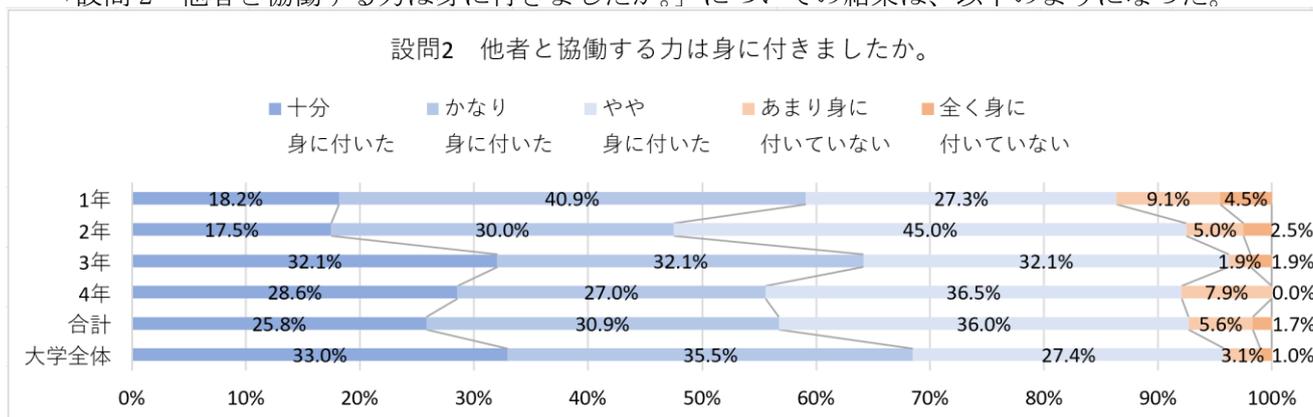
「設問1 人間愛(利他の心)は身に付きましたか。」についての結果は、以下のようになった。



学年ごとの傾向では、1年生は「十分身に付いた;9.1%」、「かなり身に付いた;40.9%」が、合計50.0%と半数となる。一方で、「やや身に付いた;31.8%」、「あまり身に付いていない;4.5%」「全く身に付いていない;13.6%」であり、これらを合わせると49.9%となる。これは入学直後でまだ発展途上であることを示唆している。2年生では、「やや身に付いた;55.0%」の割合が最も高く、「十分身についた;15.0%」や「かなり身についた;25.0%」の割合が1年生と比較して低めであった。これは、学びの過程で徐々に成長しているものの、確信を持つには至っていないことを示している可能性がある。3年生では、「十分身についた;28.3%」と「かなり身についた;32.1%」の合計が60%以上に達し、前向きな評価が増加している。4年生になると、「十分身についた;25.4%」と「かなり身についた;25.4%」の割合は3年生よりやや低下しているが、「やや身に付いた;38.1%」の割合が比較的高く、学びの集大成の段階にあると考えられる。

全体的な傾向として、全学年の合計では、「十分身についた;21.9%」と「かなり身についた;29.2%」の合計が約51.1%であり、過半数の学生が人間愛をある程度身に付けていると推察される。学年が上がるにつれて、「人間愛が身に付いた」と考える割合が増える傾向があるため、大学での学びや経験が利他の心の醸成に寄与している可能性がある。

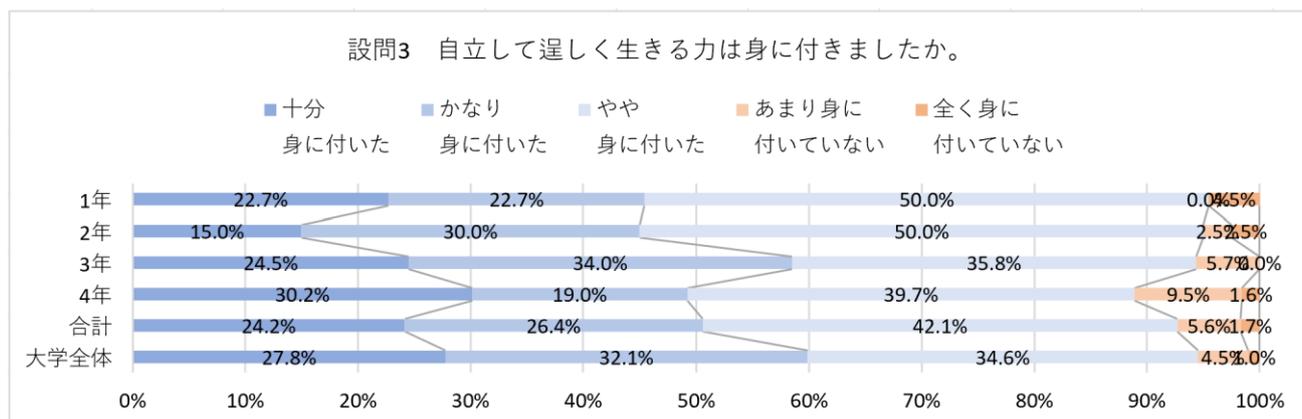
「設問2 他者と協働する力は身に付きましたか。」についての結果は、以下のようになった。



本コースの全体的な傾向は、「十分身に付いた」「かなり身に付いた」「やや身に付いた」と答えた学生の割合が学年ごとに異なり、全体合計では92.7%の学生が何らかの形で「協働する力が身に付いた」と感じている。「あまり身に付いていない」「全く身に付いていない」と感じている学生の合計は7.3%と、大学全体の4.1%と比べ若干高い値となった。

学年ごとでは、1年生や2年生は、まだ協働の経験が浅く、発展途上の段階にある可能性がある。2年生の「十分身に付いた」の割合が低いため、この時期により実践的な協働学修の機会を増やすことで、学修効果を高められる可能性がある。3年生で「十分身に付いた」と感じる割合が増加する点から、実習やグループワークが影響している可能性が高い。4年生では「十分身に付いた」がやや減少するが、「かなり身に付いた」と回答する割合がバランス良く分布しているため、より現実的な自己評価に移行していると考えられる。

「設問3 自立して逞しく生きる力は身に付きましたか。」についての結果は、以下のようになった。



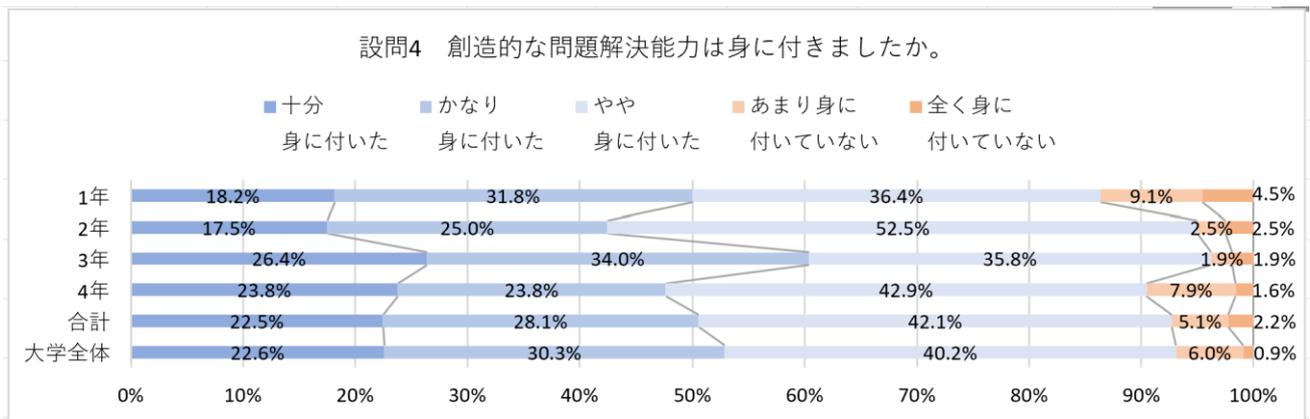
コース全体的な傾向は、「十分身に付いた」「かなり身に付いた」「やや身に付いた」と回答した学生の割合はコース全体で合計92.7%と高く、大多数の学生が「自立して逞しく生きる力」を身に付いたと感じている。一方、「あまり身に付いていない」「全く身に付いていない」と答えた学生の割合は合計7.3%と低い。学年によってバラつきが見られる。大学全体のデータと比較すると、「十分身に付いた：コース合計24.2%;大学全体27.8%」と、やや低めであった。

考察として、1年生・2年生の段階では「やや身に付いた」と回答する割合が多く、完全な自立にはまだ至っていない様子がうかがえる。3年生では「十分身に付いた」「かなり身に付いた」の割合が増加し、

自立度が向上したと考えられる。4年生では「十分身に付いた」が4学年の中で最も多いが、「あまり身に付いていない」の割合も3年生より増えており、卒業後の生活に対する不安が影響している可能性がある。

改善としては、1～2年生向けに、早い段階で生活スキルやキャリア支援を強化し、より高い自立意識を育むプログラムを導入することを検討する。具体的には、卒業生による臨床工学技士の業務内容を説明してもらうことなどが含まれる。4年生向けでは、卒業後のキャリアや生活設計に関する具体的な支援を提供し、不安を軽減する取り組みが有効と考える。

「設問4 創造的な問題解決能力は身に付きましたか。」についての結果は、以下のようになった。

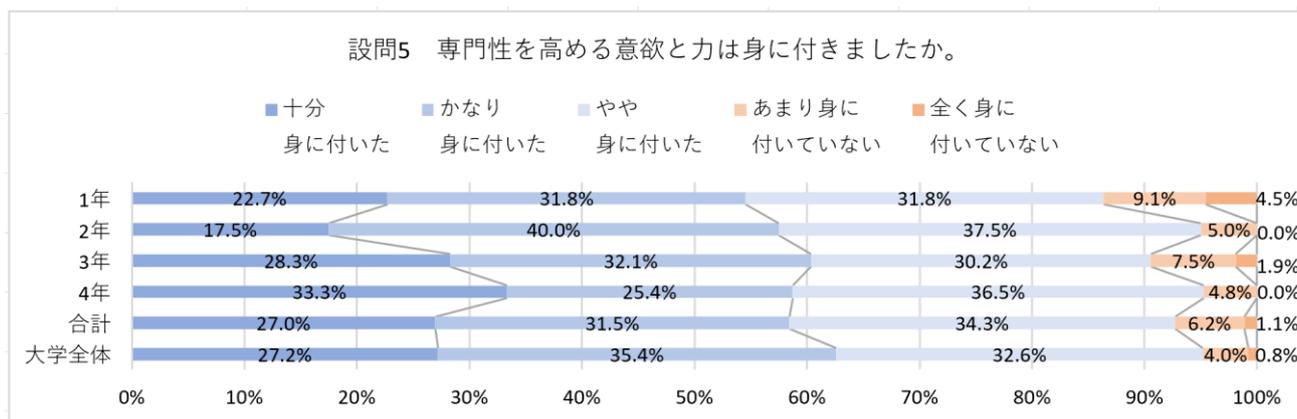


コースの全体的な傾向は、「十分身に付いた」「かなり身に付いた」「やや身に付いた」と回答した学生の割合は全体で92.7%と高く、ほとんどの学生が創造的な問題解決能力を、ある程度身に付けたと感じている。一方、「あまり身に付いていない」「全く身に付いていない」と答えた学生の割合は合計7.3%であり、少数ながら課題を感じている学生も存在する。

学年ごとの特徴では、1年生「やや身に付いた;31.8%」と4学年の中で最も多く、まだ発展途上であることが示唆される。「あまり身に付いていない」「全く身に付いていない」も合計13.6%と他学年と比較し高めであり、学修の初期段階であることを反映している。2年生「やや身に付いた;52.5%」と最も高く、この時点で問題解決能力の向上が進んでいることがわかる。一方で、「十分身に付いた;17.5%」と低めであり、まだ自信を持てる段階には至っていない可能性がある。3年生「十分身に付いた;26.4%」、「かなり身に付いた;34.0%」と向上傾向が見られる。学年が進むにつれて創造的な問題解決能力が高まっていると考えられる。4年生「十分身に付いた;23.8%」、「かなり身に付いた;23.8%」と高水準を維持しているものの、「やや身に付いた」は42.9%と依然として高い。「あまり身に付いていない」も7.9%と2,3年よりもやや増加し、卒業を前に自己評価が厳しくなっている可能性がある。

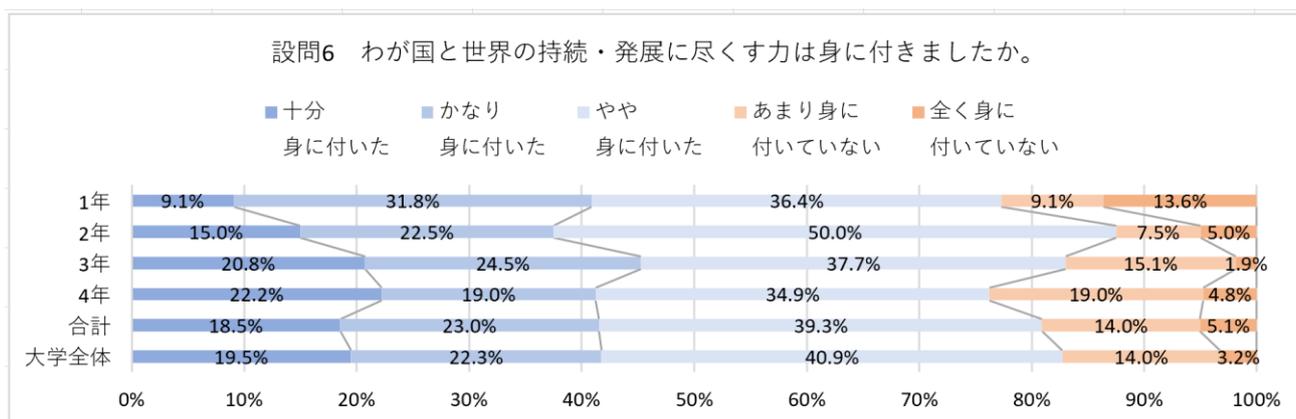
提案として、1～2年生向けには、初期段階で創造的思考を育成するために、セミナー等を活用し、実践的なプロジェクト（模擬患者を使用した臨床シミュレーションを通じて、医療機器の使用手法や医療チームとの連携を学ぶプロジェクトなど）やグループワークの機会を増やす。3～4年生向けは、より高度な問題解決の実践機会（インターンシップ、研究プロジェクト、ケーススタディなど）を増やし、実践経験を通じて自信を深める支援を強化していく。

「設問5 専門性を高める意欲と力は身に付きましたか。」についての結果は、以下のようになった。



学年ごとの傾向は、「十分身についた」の割合は、4年生が最も高かった（33.3%）。また、「十分身についた」と「かなり身についた」の割合は、1年生が最も低い（54.5%）結果であった。「あまり身についていない」と「全く身についていない」の割合は、4年生が最も低く（4.8%）、1年生が最も高かった（13.6%）。大学全体の結果と比較しても、傾向はほぼ一致しており、学年ごとのばらつきはあるものの、概ね一貫して、進級するにつれて専門性を高める意欲が強くなる傾向が見られる。

「設問6 わが国と世界の持続・発展に尽くす力は身に付きましたか。」の結果は、以下のようになった。



コースの傾向は「十分身についた」、「かなり身についた」の割合は、3年生が最も高く（45.3%）、2年生が最も低い（37.5%）。「あまり身についていない」、「全く身についていない」の割合は、4年生が最も高く（23.8%）、2年生が最も低い（12.5%）。大学全体の結果（「十分身についた;19.5%」、「かなり身についた;22.3%」）と比較すると、本コースのデータの合計値はやや低めとなる。

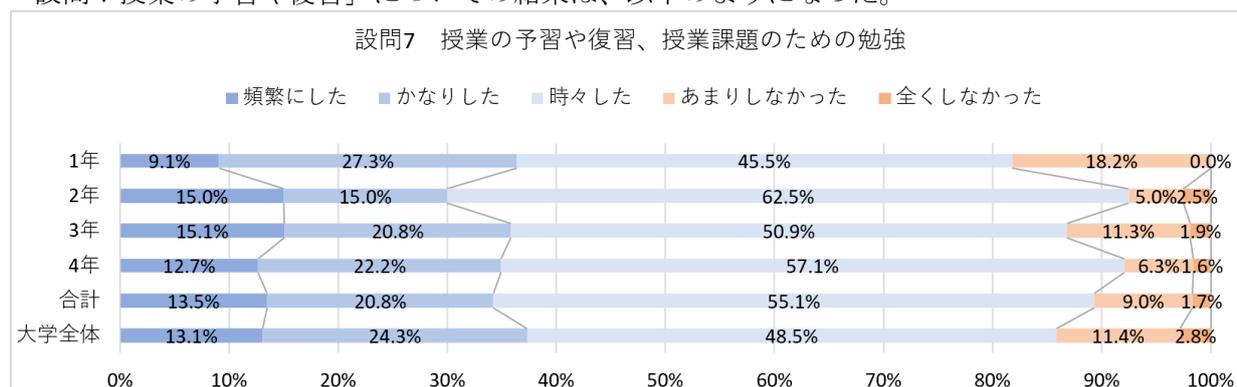
学年ごとの違いでは、1年生「十分身についた;9.1%」の割合が4学年の中で最も低く、「全く身についていない」の割合（13.6%）が4学年の中で最も高い。これは、持続可能な社会や世界的な発展に関する意識がまだ定着していないことを示唆している。1年生の段階で持続可能な社会について考える機会を増やすことが必要と考える。例えば、SDGs（持続可能な開発目標）に関する授業の受講を推奨するなどである。2年生は「やや身についた;50.0%」の割合が4学年の中で最も高い。まだ意識の段階であり、実際の行動に結びついている学生は少ない可能性がある。2年生の段階でより実践的な学修（学校や家庭でのエネルギー消費を調査し、エネルギー効率を改善するための提案を行うなど）を取り入れ、意識を深める工夫が求められる。3年生「十分身についた;20.8%」の割合が4年生に次いで高く、「あまり身について

いない;15.1%」の割合が4年生に次いで低い。研究やプロジェクト活動、学内実習等が増えることで、実践的な視点が身につけてきていると考えられる。4年生は、「十分身についた;22.2%」の割合が最も高いが、「あまり身につけていない;19.0%」の割合も最も高い。学生間で意識の差が大きい可能性がある。

全体的に、学年が上がるにつれて持続可能な社会や世界の発展に関する意識は高まる傾向が見られた。しかし、1年生・2年生の段階での意識向上が課題として挙げられる。より実践的な教育プログラムの導入が今後の鍵となる。

## 項目 2、2024 年度の授業に関連して、以下のことをどのくらいしましたか。(設問 7~13) (1~3 年生)

「設問 7 授業の予習や復習」についての結果は、以下のようになった。



上記グラフの「頻繁にした」「かなりした」「時々した」と回答した学生の平均は、Table1 のとおりであり、2024 年度 87.1%であり、2023 年度 81.4%と前年度より 5.7%増加となった。加えて、「全くしなかった」という学生は 2024 年度 1.5%であり、2023 年度より 3.1%減少した。

Table1 授業の予習や復習 (1~3 年生)

	2024 年度	2023 年度	2022 年度
「頻繁にした」「かなりした」「時々した」	87.1%	81.4%	79.2%
「全くしなかった」	1.5%	4.6%	5.9%

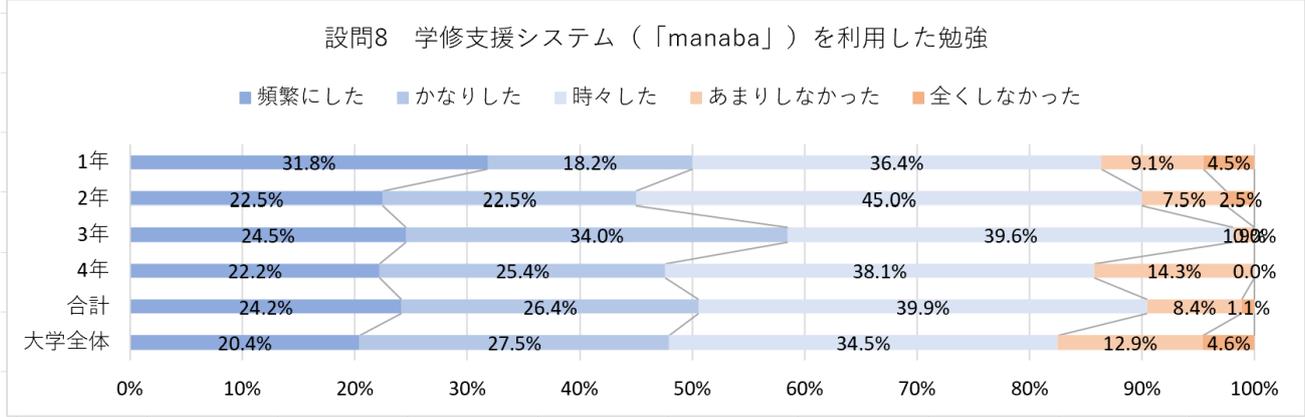
アンケート結果によると、2 年生が予習・復習を「頻繁にした」「かなりした」と回答する割合は、他の学年と比較して少なかった。この事実は、2 年次において学修習慣が十分に定着していない学生が多いことを示唆している。つまり、1 年次から 2 年次への移行期において、学生が学修方法や自己管理能力を確立する上で、何らかの障壁に直面している可能性が高い。

大学の 1 年次は教員からの指示が細かく、課題の提出期限なども明確な授業が多い。しかし、2 年次になると専門科目が本格的に始まり、学修内容の複雑性が増す。同時に、教員からの学修指示が減るため、学生自身が主体的に学修計画を立て、予習・復習を進める自己管理能力が強く求められるようになる。

こうした環境の変化により、2 年次で予習・復習不足に陥る学生が少なくない。この現象は、学生の怠慢といった単純な要因で片付けられるものではない。むしろ、学生が新たな学修環境や専門科目の特性に適應する過程において、具体的な困難を抱えていることを反映している。具体的には、指示待ちの学修から自律的な学修への切り替えがうまくいかない、専門分野特有の学修アプローチや内容の難解さに対応しきれていない、あるいは学修計画の立案や時間の管理、モチベーションの維持などに課題を抱えている状況が考えられる。これらの障壁が、2 年生における予習・復習の頻度低下、ひいては学修の定着を妨げていると考えられる。

この問題に対処するため、学生個々の予習・復習状況や理解度を早期に把握し、個別に介入する仕組みが不十分である可能性も考慮すべきである。問題が表面化する前に、躓きそうな学生を特定し、適切なサポートを提供する体制の構築が喫緊の課題となる。

「設問8 学修支援システム（「manaba」）を利用した勉強」についての結果は、以下のようになった。

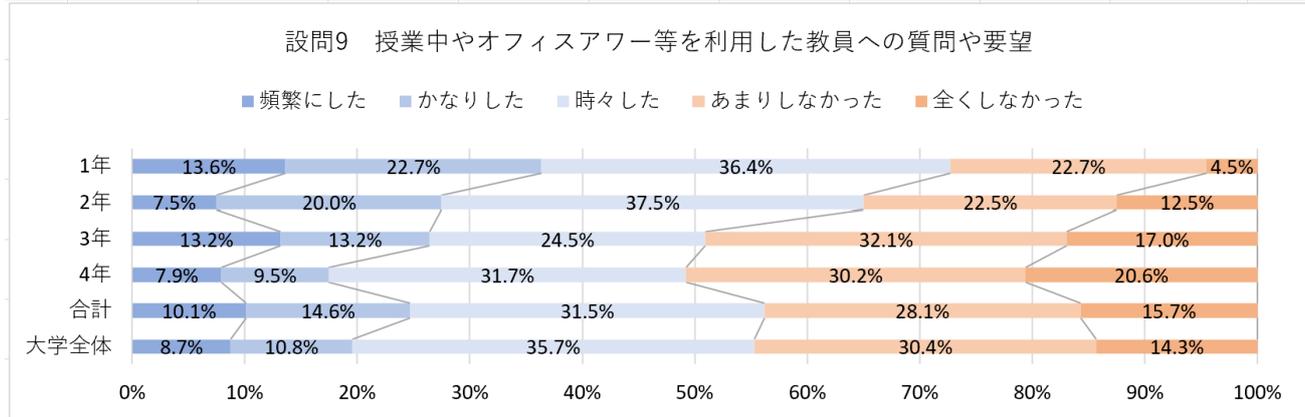


上記グラフの「頻繁にした」「かなりした」「時々した」と回答した学生の平均は、Table 2 のとおりであり、「頻繁にした」「かなりした」「時々した」を前年と比較すると、6.4%増加の結果となった。「全くしなかった」に関しては、前年度より 4.0%減少となり、活発な質問がなされたことが伺える。manaba は、課題の提出やアンケート機能など、様々な学修機能を提供している。今回の調査結果を受けて、manaba の更なる活用に向けた取り組みを進めていく。

Table 2 学修支援システム（manaba）を利用した勉強（1～3年生）

	2024 年度	2023 年度
「頻繁にした」「かなりした」「時々した」	91.5%	85.1%
「全くしなかった」	2.3%	6.3%

「設問9 授業中やオフィスアワーを利用した質問や要望」についての結果は、以下のようになった。



上記グラフの「頻繁にした」「かなりした」「時々した」と回答した学生の平均は、Table 3 のとおりである。「あまりしなかった」と「全くしなかった」を合わせると 37.1%であった。2023 年度に同様の回答をした学生の割合は、54.6%であり 17.5%減少した。この要因の1つとして、学修支援システム（manaba）を有効活用しているためと推察される。manaba などのシステムは、オンライン上でいつでもどこからで

もアクセス可能である。学生は、時間や場所にとらわれずに質問できるため、質問のハードルが下がる。従来の対面での質問に比べて、気軽に質問できる環境が整う。つまり、学生が質問しやすい環境が整うことで、質問数が増加すると考えられた。さらに、manabaなどのシステムは、教員と学生間のコミュニケーションを円滑にする機能を提供する。例えば、掲示板機能やスレッド機能などを通じて、学生は教員に質問しやすくなる。また、教員も学生からの質問に迅速に対応できるため、学生の質問意欲が高まる。つまり、教員とのコミュニケーションが促進されることで、学生は疑問を解消しやすくなり、質問数が増加すると考えられた。

Table 3 授業中やオフィスアワーを利用した質問や要望（1～3年生）

	2024年度	2023年度
「頻繁にした」「かなりした」「時々した」	62.9%	45.5%
「あまりしなかった」「全くしなかった」	37.1%	54.6%

「設問10 就職や資格取得に関わる勉強」についての結果は、以下のとおりである。

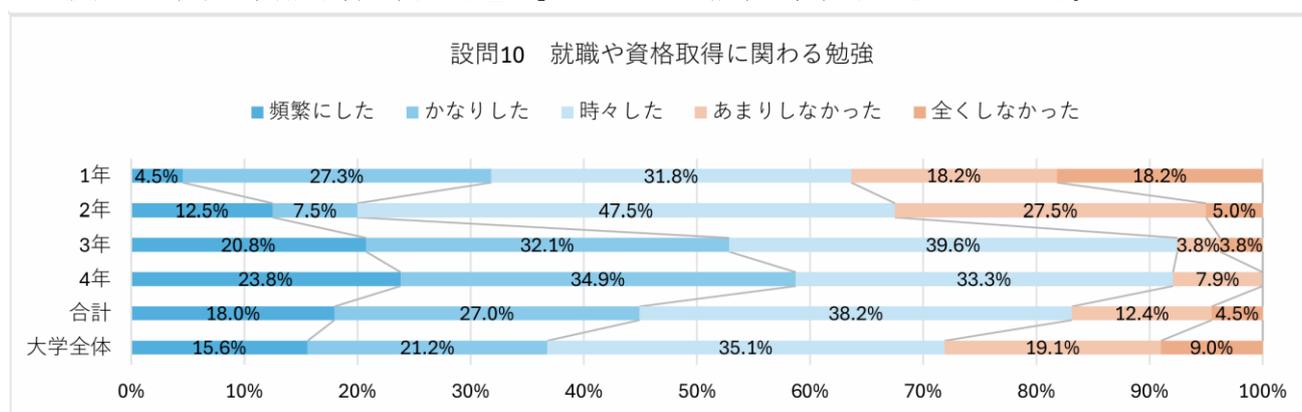


Table4 「Q4 就職や資格取得に関わる勉強」に関しては、「頻繁にした」「かなりした」「時々した」と回答した学生の割合は前年度より 20.3%も増加している。一方で、「あまりしなかった」「全くしなかった」と回答した学生の割合は前年度より 20.3%減少した。本コースの場合、学生の国家試験受験率は約 6 割であり、約 4 割の学生が一般就職を選択している。両者ともに就職支援室と連携して、就職活動に関するガイダンスの実施、企業との連携によるインターンシップの機会提供、個別相談などを行い、学生一人ひとりのキャリア形成を支援していく。

Table4 就職や資格取得に関わる勉強（1～3年生）

	2024年度	2023年度
「頻繁にした」「かなりした」「時々した」	74.5%	54.2%
「あまりしなかった」「全くしなかった」	25.6%	45.9%

「設問 11 友人と一緒に勉強」についての結果は、以下のようになった。

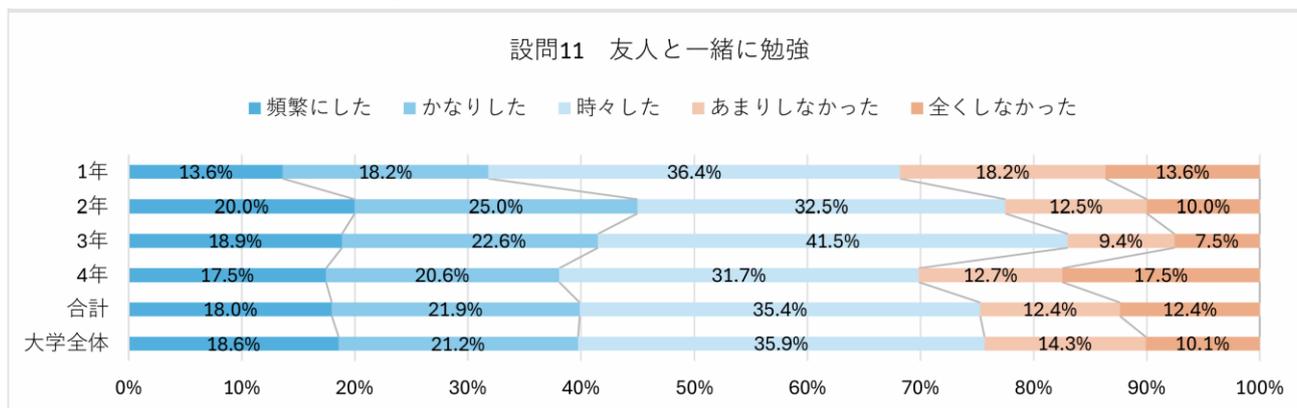


Table5 では「頻繁にした」「かなりした」「時々した」と回答した学生の割合は 2024 年度 76.2%であり、2023 年度の 68.2%より 8.0%増加した。一方で、「あまりしなかった」「全くしなかった」という学生は 8.3%減少した。これは、グループ学習の為のサークル活動等の取り組みがなされ、学生同士の協調性を育む、学修環境の整備が進められていると考える。

Table5 友人と一緒に勉強 (1~3 年生)

	2024 年度	2023 年度
「頻繁にした」「かなりした」「時々した」	76.2%	68.2%
「あまりしなかった」「全くしなかった」	23.7%	32.0%

「設問 12 メディアライブラリーセンター（図書館）を利用した勉強」の結果は、以下のようになった。

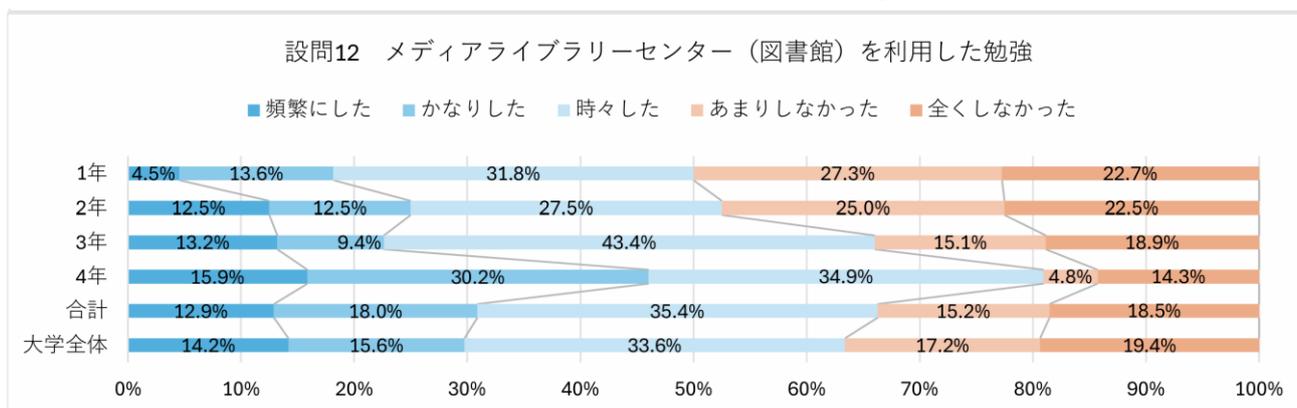


Table6 より「頻繁にした」「かなりした」「時々した」と回答した学生の割合は 2024 年度 56.1%であり、2023 年度の 59.3%より 3.2%減少となった。一方で「あまりしなかった」「全くしなかった」と回答した学生も 3.0%増加となっている。要因として以下 2 点が推察される。要因 1、飲食会話厳禁のメディアライブラリーセンターよりも、これらが可能な場（自習用教室等）へ学生が流れている。学生同士の交流やグループ学習など、より活発な学修スタイルを好む学生が増えている可能性がある。要因 2、学修習慣が身につけていない学生が一定数存在すると推察される。要因 3、読書習慣が形成されていない学生も多く、これらの要因が図書館利用の減少に繋がっている可能性がある。

Table6 メディアライブラリーセンター（図書館）を利用した勉強（1～3年生）

	2024年度	2023年度
「頻繁にした」「かなりした」「時々した」	56.1%	59.3%
「あまりしなかった」「全くしなかった」	43.8%	40.8%

「設問13 学内の自習用教室等を利用した勉強」についての結果は、以下のようになった。

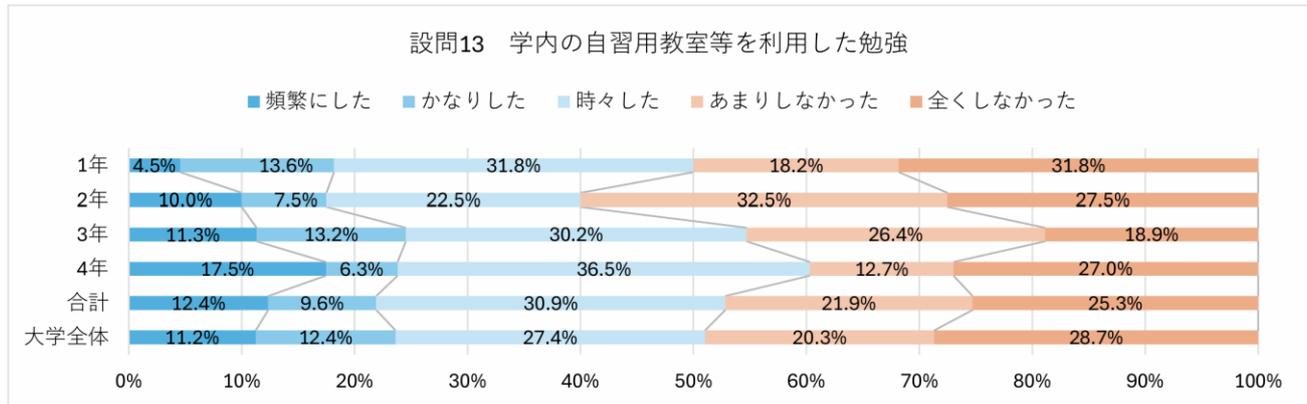


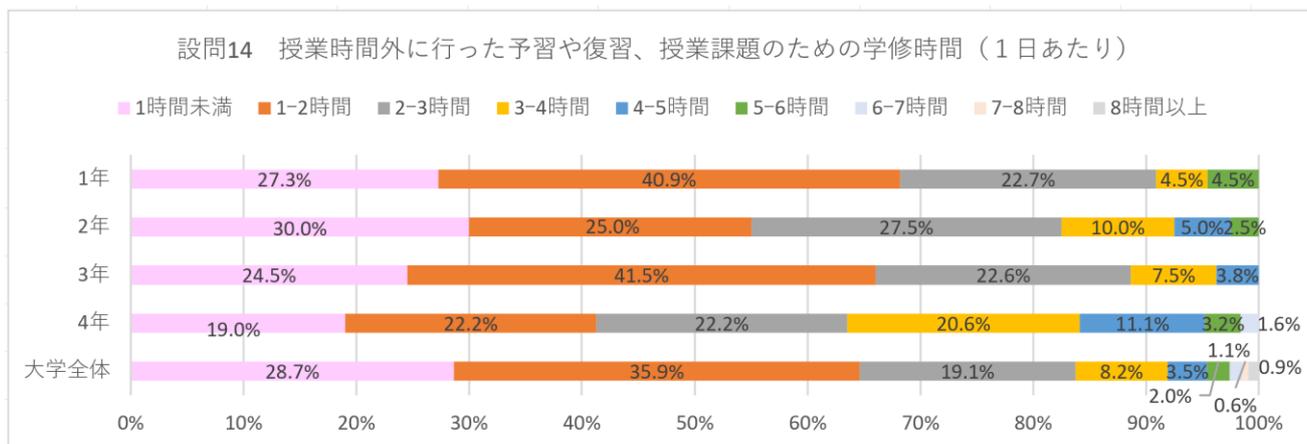
Table 7 より「頻繁にした」「かなりした」「時々した」と回答した学生の割合は2024年度48.2%、2023年度45.3%であり2.9%増加した。反対に「あまりしなかった」「全くしなかった」は2024年度51.8%、2023年度54.7%となり2.9%減少した。これらの結果から自習の場が、自習用教室の積極的な活用とメディアライブラリーセンター以外の所で行われていると推察される。

Table7 学内の自習用教室等を利用した勉強（1～3年生）

	2024年度	2023年度
「頻繁にした」「かなりした」「時々した」	48.2%	45.3%
「あまりしなかった」「全くしなかった」	51.8%	54.7%

項目3、2024年度を平均して、授業期間中一日あたり以下のことにかけた時間を教えてください。（設問14～18）

「設問14 授業時間外に行った予習や復習、授業課題のための学修時間（1日あたり）」についての結果は、以下のようになった。

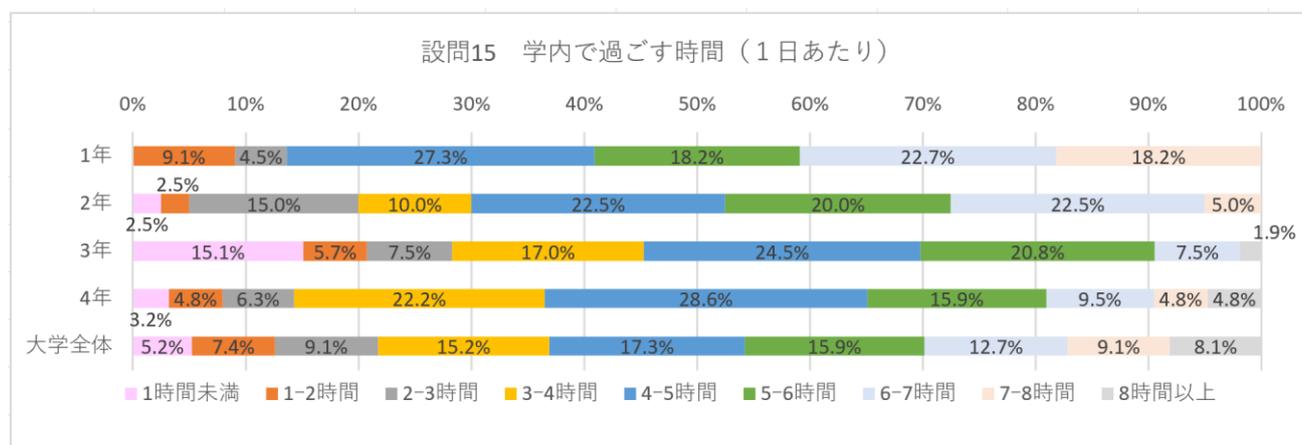


学修時間の傾向として、1年生と2年生は、「1時間未満」の割合がそれぞれ27.3%と30.0%であり、他学年と比較して最も高い。一方、4年生ではこの割合が19.0%と最も低くなっている。これは、学年が上がるにつれて学習時間が増加する傾向を示している可能性がある。

また、「1～2時間」の割合は3年生が41.5%と最も高く、大学全体の平均（35.9%）よりも多いことがわかる。これは、3年生が授業内容の難易度の上昇や、専門的な課題に取り組む時間が増えるためと考えられる。

一方、「3～4時間」「4～5時間」の学習時間を確保している割合が高いのは4年生であり、特に「3～4時間」が20.6%、「4～5時間」が11.1%と高い。これは、卒業研究や資格試験対策の影響が大きいと推測される。

「設問15 学内で過ごす時間（1日あたり）」についての結果は、以下のようになった。



学内で過ごす時間（1日あたり）について、全体として学年が上がるにつれて滞在時間が長くなる傾向が見られる。特に4年生では、「4～5時間」滞在する学生が28.6%、「3～4時間」滞在する学生が22.2%と、比較的高い割合を示している。

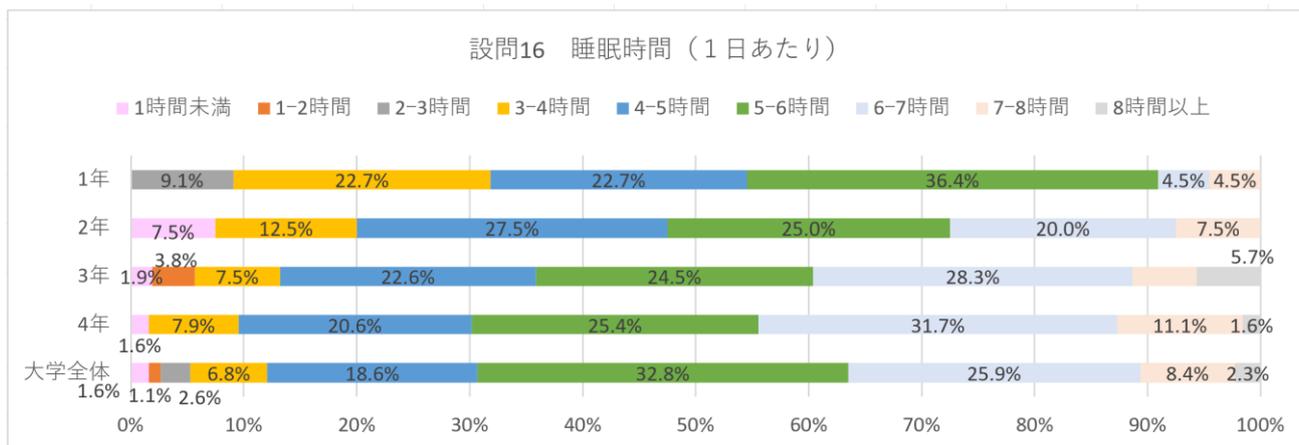
学年別の特徴として、1年生は「4-5時間;27.3%」が最も多く、短時間の滞在が多い傾向にある。22.7%の学生が「6-7時間」滞在しており、一部の学生は長時間学内で活動していることが分かる。

2年生では「4-5時間;22.5%」、「6-7時間;22.5%」と比較的長時間学内にいる学生が増加している、一方で、「2-3時間;15.0%」の割合も高く、短時間滞在する学生も一定数いる。

3年生になると「4-5時間;24.5%」、「5-6時間;20.8%」の割合が増加し、学内滞在時間が長くなる傾向が明確に表れる。

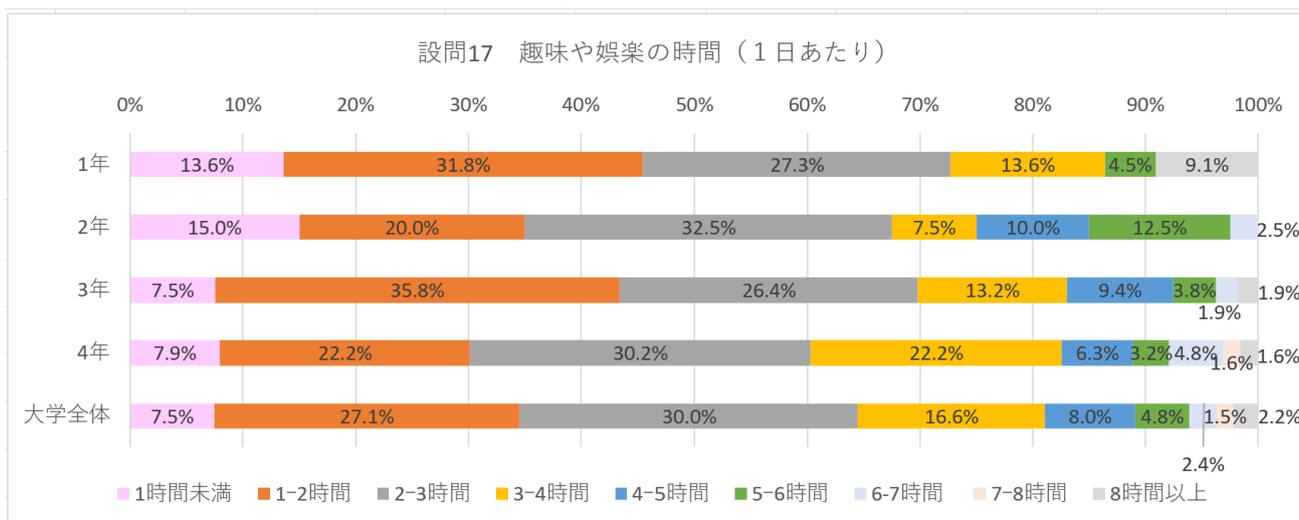
4年生は「4-5時間;28.6%」が最も多く、次いで「3-4時間;22.2%」となり、これは4年時の講義数が少ない事が要因と推察される。

「設問 16 睡眠時間（1日あたり）」についての結果は、以下のようになった。



大学全体の傾向として、「5-6時間」の睡眠時間が最も多く、大学全体で32.8%の学生がこの範囲に該当する。次いで「6-7時間」睡眠の割合も25.9%と比較的高く、合計すると約60%の学生が5-7時間の睡眠を取っている。

「設問 17 趣味や娯楽の時間（1日あたり）」についての結果は、以下のようになった。



1年生は「1-2時間;31.8%」、「2-3時間;27.3%」の割合が比較的高く、娯楽に費やす時間が短い学生が多いことが分かる。一方、「8時間以上」の割合も9.1%と比較的高く、一部の学生は長時間娯楽や娯楽に没頭し、自由な時間の使い方が学修に影響している可能性がある。

2年生では「1-2時間;20.0%」「2-3時間;32.5%」の層が厚く、3時間未満の割合が過半数を占めている。他の学年よりも比較的バランスの取れた分布となっている。

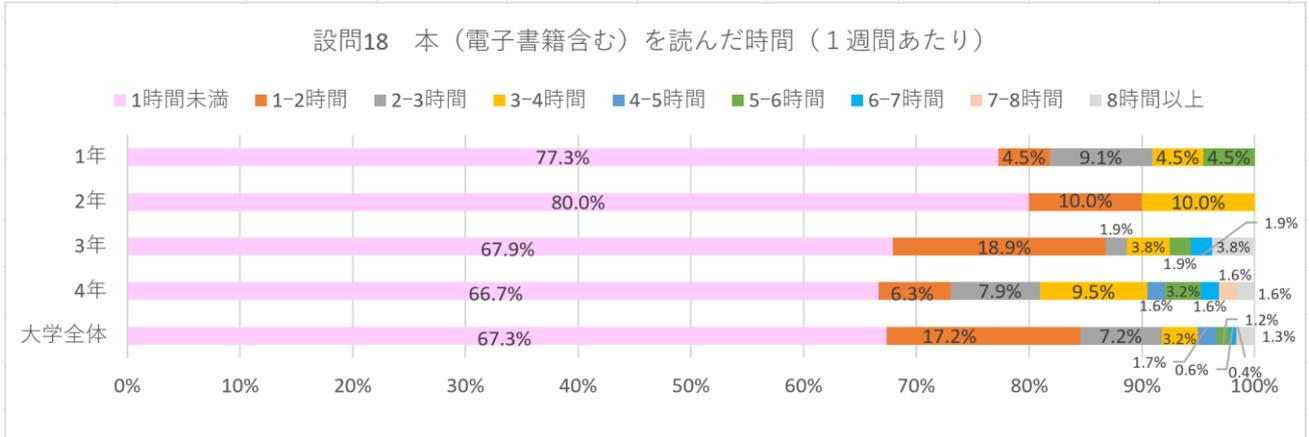
3年生は「1~2時間;35.8%」の割合が最も高く、短時間の娯楽が主流であることが示唆される。これは、就職活動等が影響している可能性が考えられる。

4年生は「2~3時間;30.2%」「3~4時間;22.2%」の割合が高く、長時間娯楽に費やす学生が増加傾向といえる。

「3時間未満」までの割合が全体の大半を占めており、多くの学生は短時間の趣味・娯楽にとどめている。一方で、「4時間以上」娯楽を楽しむ学生も一定数おり、「8時間以上」の割合は大学全体で2.2%

少ないながらも存在する。学年が上がるにつれ、趣味や娯楽に費やす時間がやや増える傾向が見られる。特に3～4時間以上の割合が増加しており、授業の負担が減ることが影響している可能性がある。

「設問18 本（電子書籍含む）を読んだ時間（1週間あたり）」の結果は、以下のようになった。

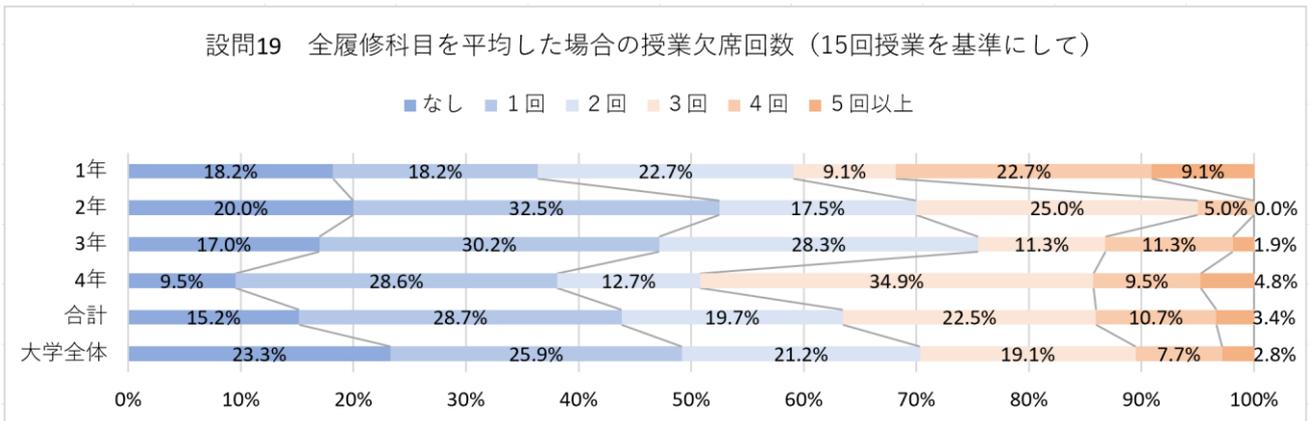


学年ごとの違いでは、1年生と2年生の「1時間未満」の割合がそれぞれ77.3%、80.0%と非常に高く、低学年ほど高学年と比べ、読書時間が短い傾向がある。1年生では「1時間未満」が最多であるが、2年生になると「1～2時間」「3～4時間」の割合がやや増加しており、学年が上がるにつれて読書時間が増えている。3年生と4年生では「1時間未満」の割合が67.9%（3年生）、66.7%（4年生）と低学年に比べてやや減少している。特に3年生では「1～2時間;18.9%」、4年生では「3～4時間;9.5%」の割合が多く占めており、学年が上がるにつれ読書時間が長くなる傾向が見られる。注目すべき点は「3時間以上」読書する学生の割合が非常に少なく、長時間の読書を習慣にしている学生はごくわずかである。しかしながら、3年生・4年生では「2～3時間」「3～4時間」「5～6時間」などの層が増加していることから、学年が上がるにつれ専門書や論文を読む機会が増える可能性を示唆している。

結論として、このデータから、大学生の大多数が読書時間を1時間未満にとどめており、学年が上がるにつれて徐々に読書時間が増える傾向があることがわかる。ただし、長時間読書する学生は依然として少数派であり、読書習慣の定着にはさらなる工夫が必要だと考えられる。

**項目4 2024年度を平均して、授業期間中以下のことをした回数を教えてください。（設問19～22）**

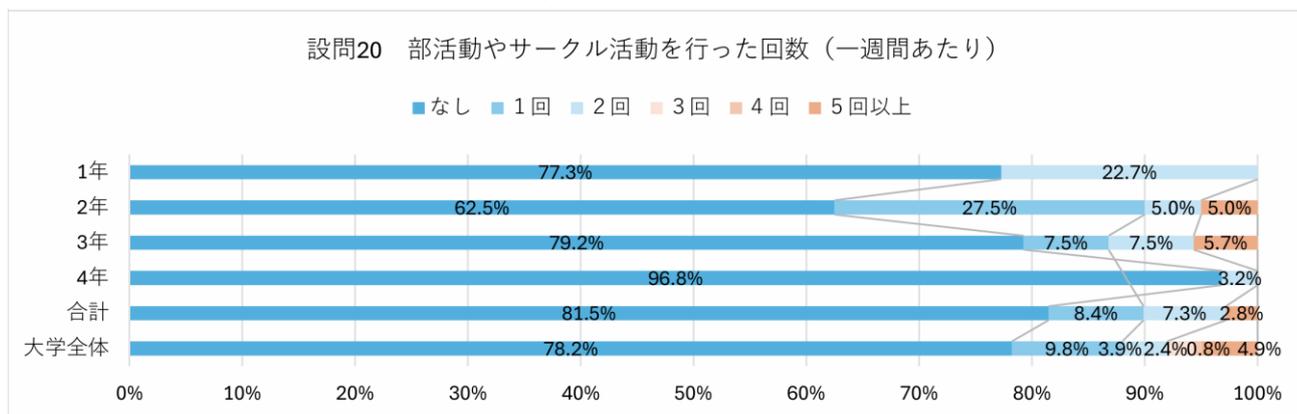
「設問全履修科目を平均した場合の授業欠席回数（15回授業を基準にして）」について結果は以下の通りである。



「欠席なし」の割合は、コース合計：15.2%、大学全体：23.3%の結果となり、大学全体と比べてやや低値であった。次に「1回-3回欠席」をコース合計と大学全体を比べると、「1回-3回欠席；コース合計70.9%」、大学全体（66.2%）と本コースは高値を得た。同様に「4回-5回以上欠席：コース合計14.1%」、大学全体（10.5%）とこちらも高い値を得た。

本コースのデータは、大学全体のデータと比べて「欠席なし」の割合が低く、「1回欠席」、「3回以上欠席」の割合がやや高い。これらの対応として1・2年生へは、セミナーや面談を活用し、生活習慣や出席習慣の定着を図る。また、本コースは3年生より一般企業就職希望者と臨床工学技士国家試験受験希望と別れる。前者を希望した3年生は、就職活動やインターンシップ等にて、出席率が低い値になったと考える。4年生に於いては「4回-5回以上欠席；コース合計14.3%」、大学全体（10.5%）と比べ、高値となった理由は、卒業研究や医療施設への就職活動、臨床実習の影響が大きいと考えられる。

「設問20 部活動やサークル活動を行った回数（一週間あたり）」に関しては、「なし」がコース合計において24年度81.5%、昨年度87.7%となり6.2%の減少となった。本コースでは、部活動・サークル活動への参加が積極的ではない現状がある。



「設問21 アルバイトの回数（1週間あたり）」に関しては、以下の通りとなり、コース平均と大学全体を比較したTable8を示す。

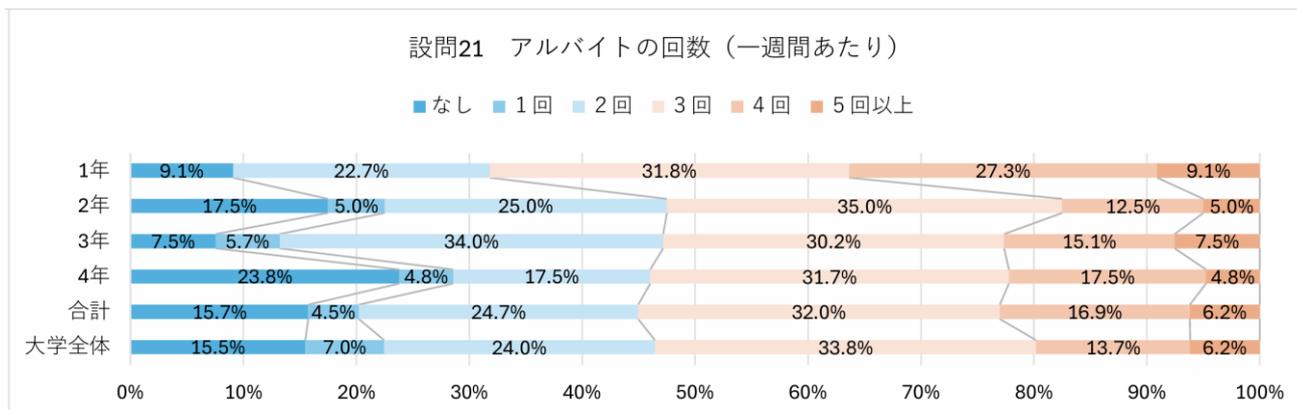


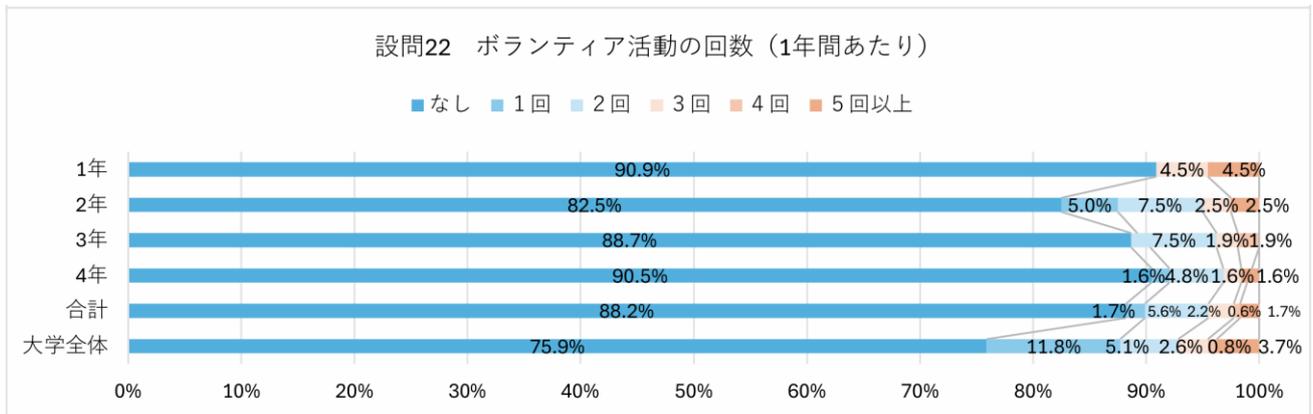
Table8 アルバイトの回数（一週間あたり）

	なし	1回	2回	3回	4回	5回以上
コース合計%（1-4年生）	15.7	4.5	24.7	32.0	16.9	6.2
大学全体%	15.5	7.0	24.0	33.8	13.7	6.2

Table8 より、コースにおけるアルバイト回数の調査結果によると、1週間あたり3回の回答が32.0%と最も多く、これは大学全体ともほぼ同値の結果である。次いで2回の回答が24.7%であり、これも大学全体との特徴と一致する。

本コースにおいて1週間あたり3回アルバイトをしている学生の割合が多く、このアルバイト回数の多さの理由としては、以下のようなことが考えられる。「アルバイトをして学費を工面する学生が多い」「将来のキャリア形成のために、アルバイトを通じて実務経験を積んでいる学生が多い」などが考えられる。今後もアルバイト回数の状況を調査し、必要に応じて学生への支援策などを検討していく必要がある。

「設問22 ボランティア活動の回数（1年間あたり）」に関しては、以下の通りとなった。

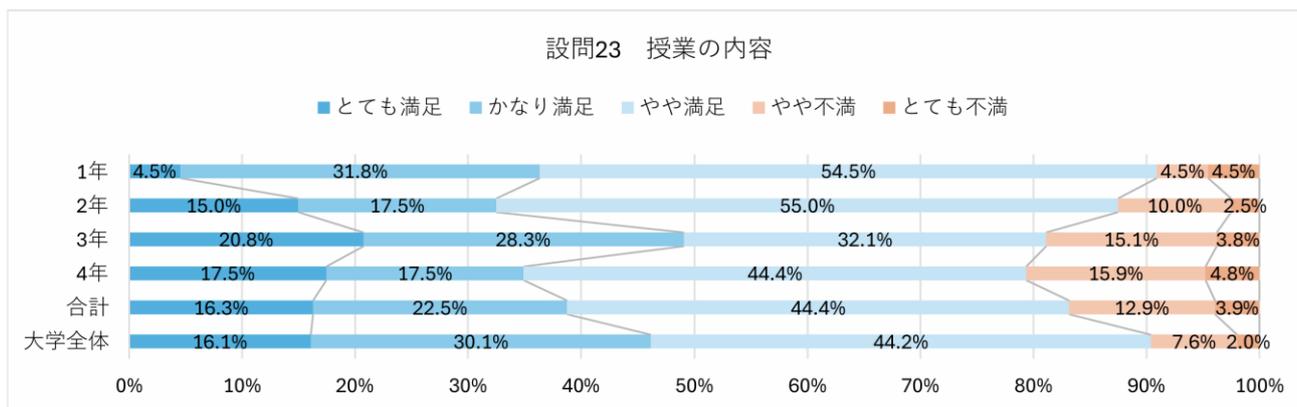


コース全体の傾向は、「なし」と回答した学生の割合が88.2%と高く、多くの学生がボランティア活動をしていないことが分かる。一方で、ボランティア活動を1回以上行った学生は11.8%にとどまっている。大学全体のデータと比較すると、大学全体では75.9%が「なし」となり、本コースの学生は88.2%と、ボランティア活動への参加率がやや低い。

このデータから、以下のような結論が導き出せる。まず、大学生全体と比べて、コースの学生はボランティア活動の参加率が低い。次に、1年生と4年生は特に参加率が低く、2年生が最も積極的である。最後に、継続的にボランティア活動を行う学生はごくわずかであり、1回だけ参加する層が多い。この結果を踏まえ、大学やコース側がボランティア活動の機会を増やしたり、継続的な活動の支援を強化することで、学生の参加率を向上させる施策が考えられる。

項目5 本学の教育内容や設備、学修支援にどの程度満足していますか。(設問 23～34)

「設問 23 授業の内容」の結果は以下の通りである。



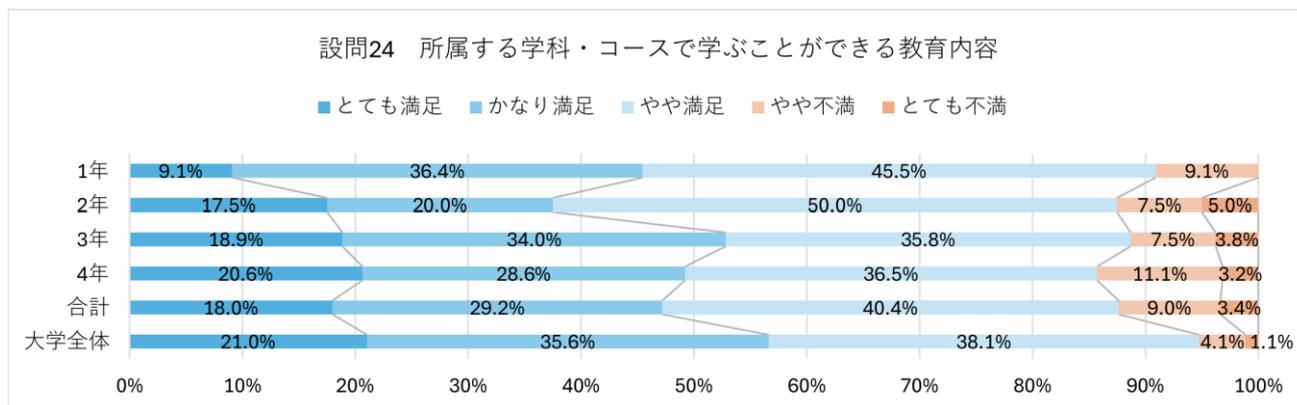
上記グラフをコース平均にまとめた結果を Table9 に示す。

Table9 設問 15 授業の内容

	とても満足	かなり満足	やや満足	やや不満	とても不満
コース平均% (2023 年度)	4.9	19.4	52.0	19.9	1.9
コース平均% (2024 年度)	16.3	22.5	44.4	12.9	3.9

「とても満足」「かなり満足」「やや不満」と回答した割合は、前年度よりも大幅に改善された。しかし「とても不満」が 2.0%増加したため次年度の課題としたい。また、アンケート結果だけでなく、学生からの意見を積極的に収集する。

「設問 24 所属する学科・コースで学ぶことができる教育内容」の結果は以下の通りである。

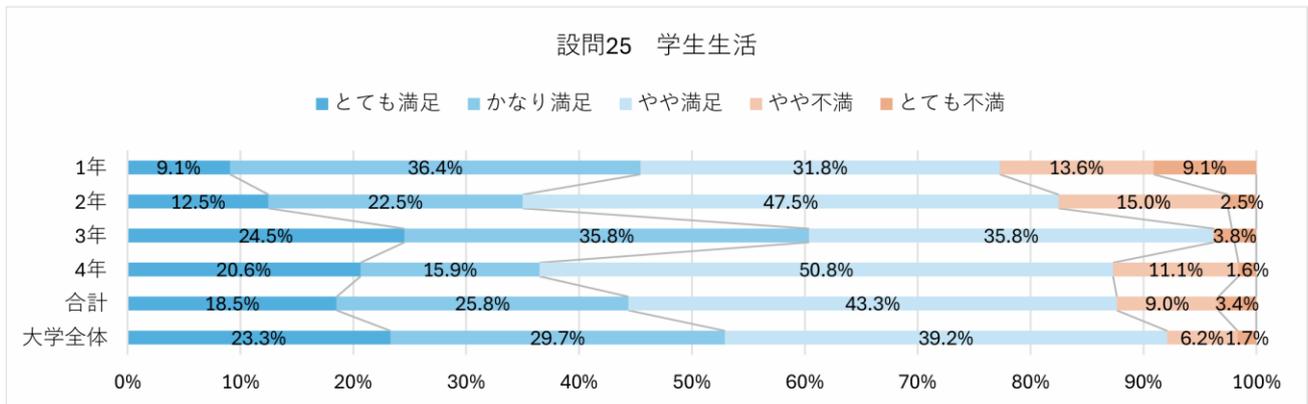


上記グラフをコース平均にまとめた結果を Table10 に示す。結果は昨年度と比較し、「とても満足」「かなり満足」が増加した。更に、「やや不満」が 2023 年度より減少した値となり、前年度の課題を一定数改善できたと考える。しかしながら「とても不満」は前年度比で数値が増加し、今後の課題となり更なる改善を行う。

Table10 設問 16 所属する学科・コースで学ぶことができる教育内容

	とても満足	かなり満足	やや満足	やや不満	とても不満
コース平均% (2023 年度)	8.4	24.4	54.0	11.5	1.9
コース平均% (2024 年度)	18.0	29.2	40.4	9.0	3.4

「設問 25 学生生活」の結果は以下の通りである。

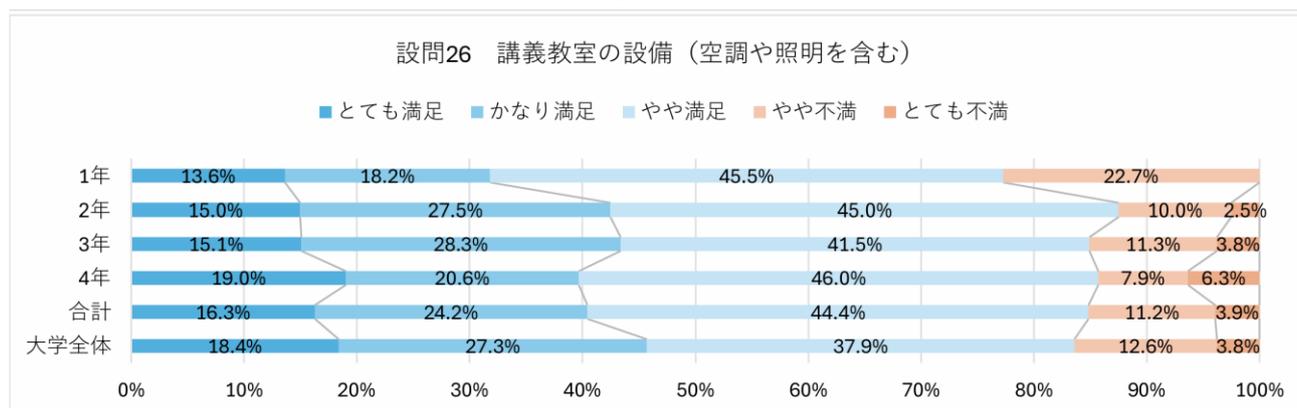


コースの全体的な満足度の傾向は、「とても満足」「かなり満足」「やや満足」を合わせた満足層は合計 87.6%に達し、多くの学生が学生生活に一定の満足を感じていることが分かる。一方で、「やや不満」「とても不満」の不満層は 12.4%にとどまり、比較的少数派である。

学年別の特徴は、3年生・4年生の満足度が「やや満足」以上で、3年生:合計 96.1% が満足、4年生:合計 87.3% が満足している。特に3年生は「とても満足」の割合が 24.5%と他学年よりも高く、学業や生活に慣れ、充実感を得ている学生が多いと考えられる。1年生・2年生は満足度が、他学年より低く、1年生:合計 77.3% が満足、2年生:合計 82.5% が満足となる。1年生は大学生生活に適応する過程にあり、不安やストレスを抱えやすい時期と考えられる。2年生は「やや満足」の割合が高く (47.5%)、ある程度適応しつつも、学業や人間関係でまだ課題を抱えている可能性がある。

以上より、「学年が上がるにつれて満足度が高まる傾向がある (特に3年生の満足度が高い)」、「1年生・2年生は不満の割合が比較的高く、サポートが必要」、「大学全体と比較すると満足度はやや低めで、「とても満足」の割合が少ない」といえる。全体として不満を持つ学生は少数派だが、1年生の「とても不満」の割合がやや高い点に留意する必要がある。この結果を受けて、1年生・2年生向けのサポート体制 (メンター制度や相談窓口の充実、セミナーの活用) を強化し、学生生活の満足度を向上させる取り組みが求められる。

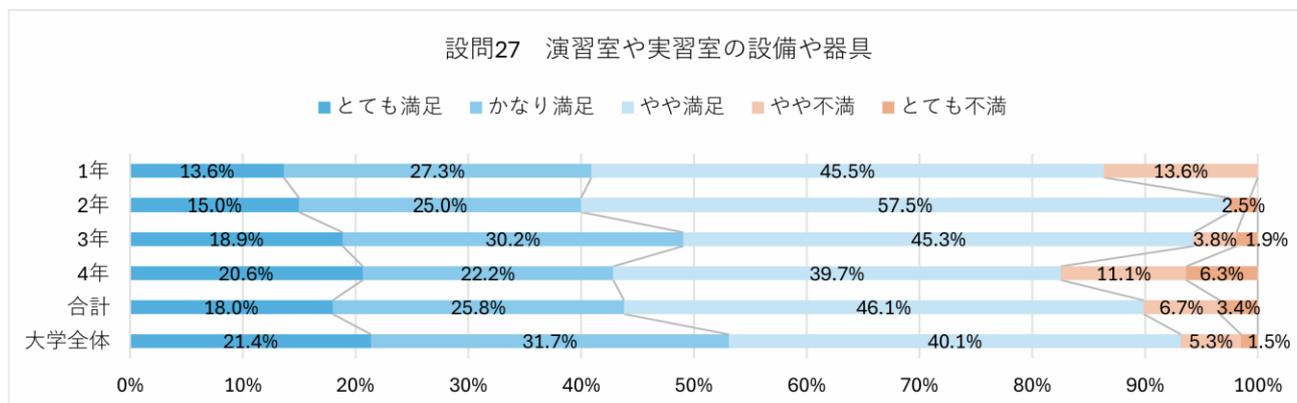
「設問 26 講義教室の設備（空調や照明を含む）」の結果は以下の通りである。



コースの全体的な満足度の傾向は「とても満足」「かなり満足」「やや満足」を合わせた満足層は84.9%で、概ね多くの学生が講義教室の設備に満足していることが分かる。一方で、「やや不満」「とても不満」の不満層は15.1%と一定数の学生が不満を感じていることも確認できる。

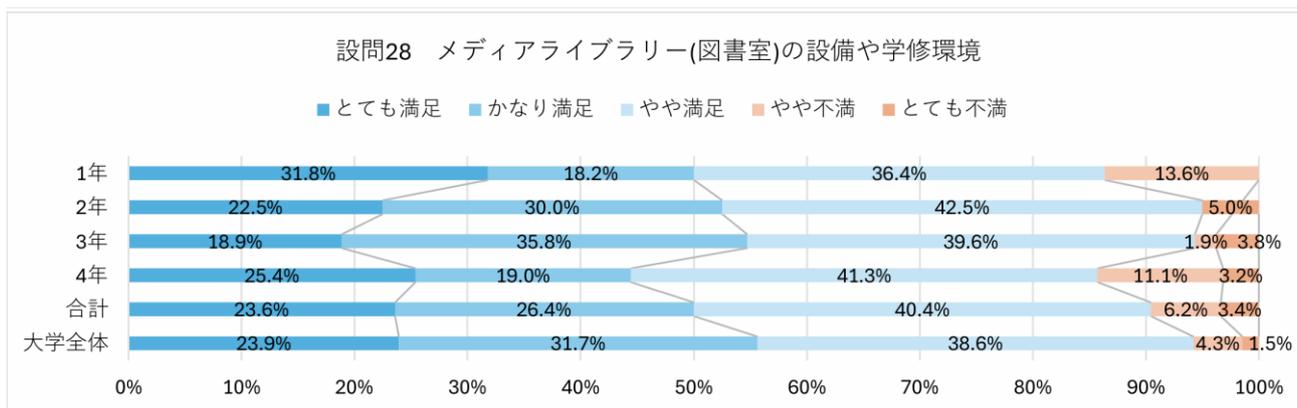
まとめとして、「全体的に満足度は高いが、1年生の不満が最も大きい（特に「やや不満が多い」）」、「2年生～4年生は比較的満足度が高いが、一部の学生は強い不満を抱えている」、「大学全体と比べると本コースの満足度はやや高いが、「とても満足」の割合は低め」、「1年生向けの教室環境を改善し、不満層を減らす施策が求められる（例えば空調や照明の調整、座席の快適性向上など）」などが考えられる。

「設問 27 演習室や実習室の設備や器具」の結果は以下の通りである。



コース合計の満足度の傾向の傾向は、「とても満足」「かなり満足」「やや満足」の割合が高く（合計89.9%）、ポジティブな評価が大半を占めている。特に2・3年生の「やや満足」（2年57.5%、3年45.3%）の割合が選択肢の中で最も高く、設備に対する満足度が比較的高いことがわかる。逆に、4年生の「やや満足」（39.7%）は、4学年の中で最も低く、不満の割合がやや高い傾向にある。これは4年生の「やや不満」「とても不満」の値が高くなっていることから明らかである。この理由として、4年生は学内での実習が修了し、残すは臨床実習と少数の講義のみとなり、実習施設との設備差などが要因として考えられる。

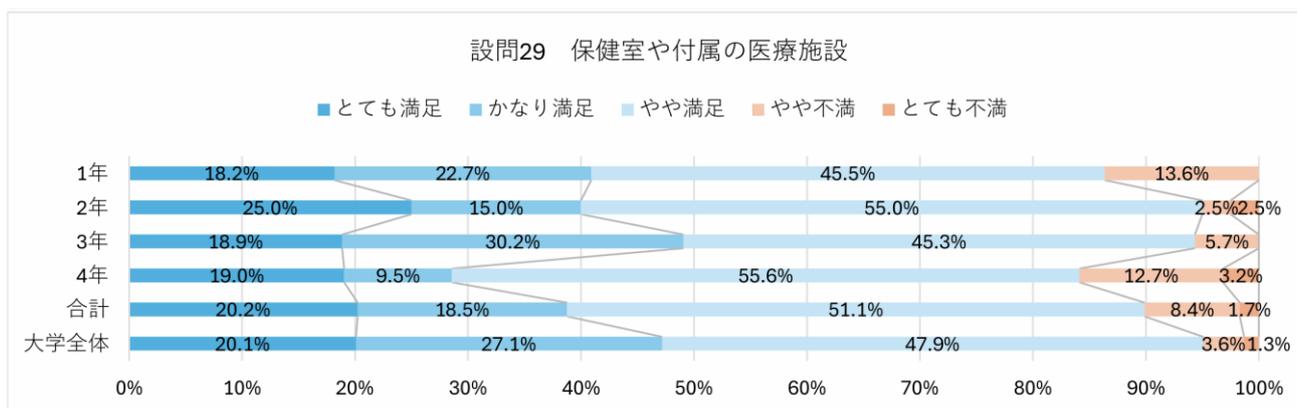
「設問 28 メディアライブラリー(図書室)の設備や学修環境」の結果は以下の通りである。



「とても満足」と「かなり満足」の合計を見ると、1年生（50.0%）、2年生（52.5%）、3年生（54.7%）、4年生（44.4%）となっている。1年生において「とても満足」（31.8%）の割合が最も高く、学修環境への満足度が比較的高いことがわかる。一方で、3年生の「とても満足」の割合は他学年と比較して低く（18.9%）、学年が進むにつれて満足度がやや低下している傾向がある。

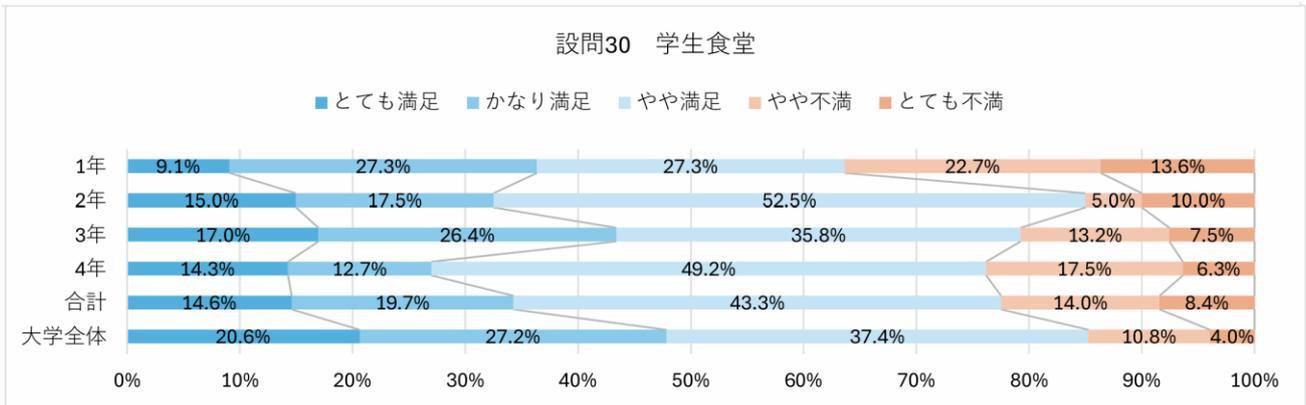
3・4年生は卒業研究や国家試験に向けた専門的な学修が増えるため、メディアライブラリーの設備や環境に対する要求が高まっている可能性がある為、改善点として、上級生向けのメディアライブラリーの学修環境（静かなスペース、資料の充実、座席数の確保など）や国家試験のための自習用教室の更なる充実（複数教室など）が求められる。1年生や2年生の満足度は高いため、現状の環境は下級生向けの学修には適していると考えられる。

「設問 29 保健室や付属の医療施設」の結果は以下の通りである。



「とても満足」と「かなり満足」の合計を見ると、1年生（40.9%）、2年生（40.0%）、3年生（49.1%）、4年生（28.5%）となった。3年生の満足度が最も高く、4年生の満足度が最も低いことがわかる。「やや満足」の割合がどの学年でも40%以上を占めており、大多数の学生がある程度の満足を感じていることが推察される。

「設問 30 学生食堂」の結果は以下の通りである。



コースの全体的な傾向は、満足度が「やや満足;43.3%」と回答した学生が最も多く、次いで「かなり満足;19.7%」「とても満足;14.6%」と続き、合計 77.6%と過半数以上の学生が満足していることがわかる。次に不満度が「やや不満;14.0%」「とても不満;8.4%」と回答した学生は合計 22.4%と少数派であるが、無視できない割合で存在している。

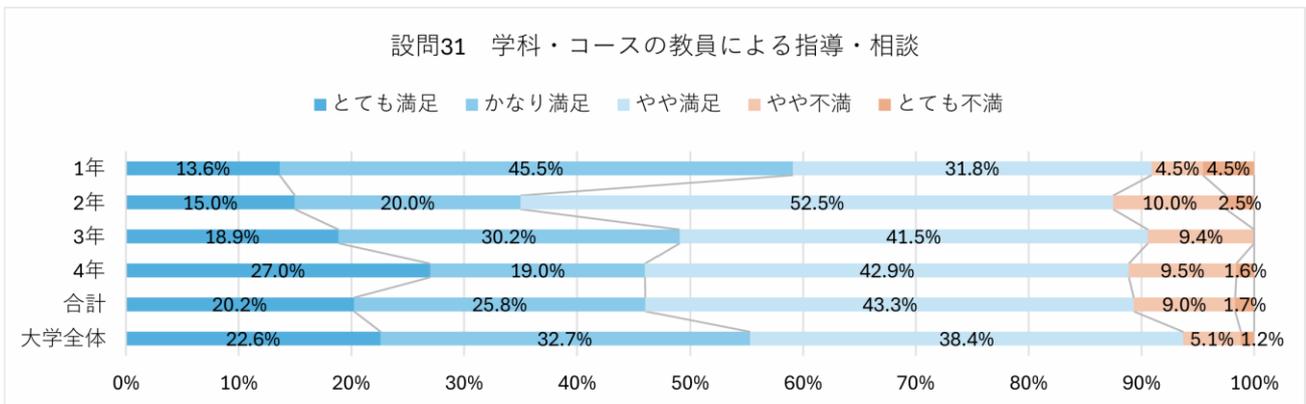
学年別の特徴の特徴は以下の通りである。

- 1年生: 「かなり満足」と「やや不満」の割合が高く、意見が分かれている。
- 2年生: 「やや満足」と回答した学生が非常に多く、安定した満足度を示している。
- 3年生: 「やや満足」が最も多いものの、「とても満足」と回答した学生も一定数存在している。
- 4年生: 2年生と同様に「やや満足」と回答した学生が多いが、「やや不満」と回答した学生の割合もやや高くなっている。

大学全体と比較すると、コース全体の満足度はやや低い傾向にある。特に「とても満足」と回答した学生の割合が低く（大学全体 20.6%、コース合計 14.6%）、学生食堂に対する改善の余地がある。その改善として、下記が考えられる。

- ・アンケート結果の詳細な分析を行い、不満の具体的な原因を特定する。
- ・学生からの意見を積極的に収集し、メニューやサービス内容の改善に繋げる。
- ・学生食堂の混雑状況を把握し、待ち時間の短縮や座席数の増加などの対策を検討する。

「設問 31 学科・コースの教員による指導・相談」の結果は以下の通りである。

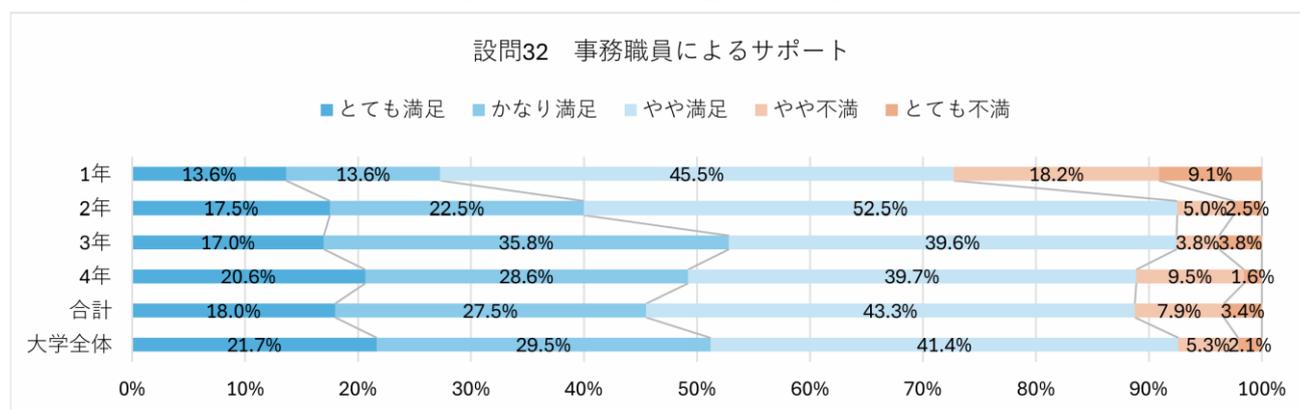


コース全体の傾向は、「やや満足;43.3%」が最も多く、次いで「かなり満足;25.8%」「とても満足;20.2%」と続き、満足している学生が過半数以上(89.3%)と多いことがわかる。また、不満度においては、「やや不満;9.0%」「とても不満;1.7%」の割合は比較的少なく、特に「とても不満」はどの学年でも低い割合となっている。これから学年が上がるにつれて、「とても満足」の割合が増加する傾向にある。特に4年生では「とても満足」が27.0%と4学年の中で最も高くなっている。

大学全体とコースとの比較で、満足度においては「とても満足;大学全体 22.6%、コース 20.2%」とやや低く、「やや満足;大学全体;38.4%、コース 43.3%」の割合が高い傾向がある。不満度においては大学全体とほぼ同程度である。

以上より、学年が上がるにつれて満足度が高まるのは、教員との関係性が深まり、指導・相談の質が向上している可能性が考えられる。1年生の「とても不満」がやや高いのは、大学生活にまだ慣れていないことなどが原因として挙げられる。

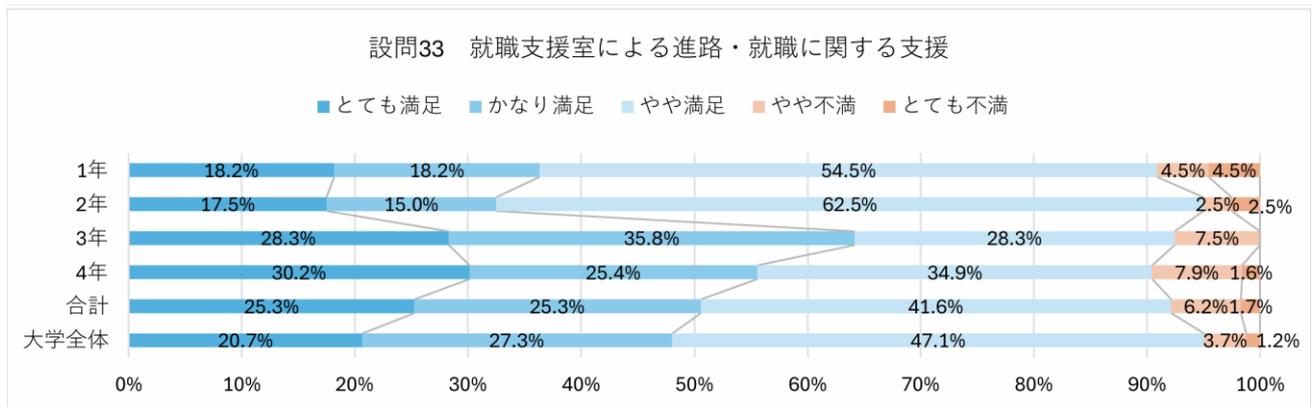
「設問 32 事務職員によるサポート」の結果は以下の通りである。



コースの全体的な傾向としては、満足度に関して「やや満足;43.3%」が最も多く、次いで「かなり満足;27.5%」「とても満足;18.0%」と続き、満足している学生が多いことがわかる。不満度に関しては「やや不満;7.9%」「とても不満;3.4%」と割合は比較的少なく、特に「とても不満」はどの学年でも低い割合となっている。

学年による違いでは、学年による満足度の大きな違いは見られないが、4年生は「やや満足」が最も高く、1年生は不満の割合がやや高い傾向がある。1年生の不満度がやや高いのは、大学生活にまだ慣れていないことや、事務職員とのコミュニケーションが不足していることが原因かもしれない。4年生の「とても満足」が高いのは、就職活動や卒業準備など、事務職員のサポートが必要な場面が増えることが影響している可能性がある。

「設問 33 就職支援室による進路・就職に関する支援」の結果は以下の通りである。

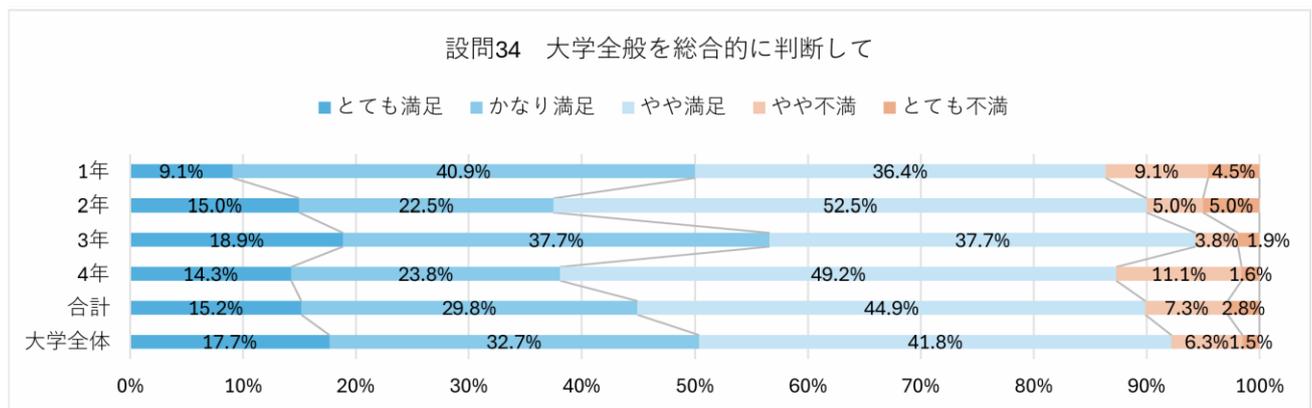


コース合計で「とても満足;25.3%」「かなり満足;25.3%」「やや満足;41.6%」の割合は、92.2%を占めており、支援に対する評価は概ね良好と考える。特に3年生と4年生は「やや満足以上」の割合が高く(3年合計 92.4%、4年生合計 90.5%)、就職活動が本格化する学年で支援の効果を実感している可能性がある。以上のデータより、ポジティブな傾向が高いと推察される。

しかし不満層を見ると、3・4年生に「やや不満」の割合が一定数存在している。「やや不満;3年生(7.5%)4年生(7.9%)」は、他の学年に比べ「やや不満」の割合が高めであり、これは大学全体よりも高い数値となっている。

この結果から、就職支援室の支援は概ね評価されているものの、3・4年生向けの個別相談の充実や、具体的な就活対策(模擬面接やエントリーシート指導など)の強化が有効と考える。

「設問 34 大学全般を総合的に判断して」の結果は以下の通りである。



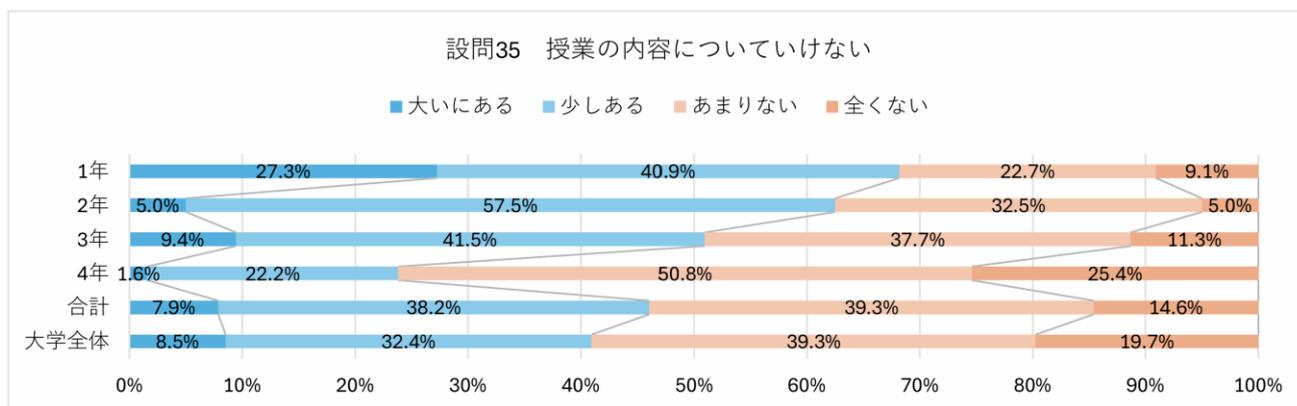
本コースでは、各学年の「とても満足」「かなり満足」「やや満足」の合計割合は89.9%で、大学全体;92.2%と比較しても、概ね良好な評価を得ているといえる。特に3年生(やや満足以上:94.3%)が高評価を示していた。

課題となる点は、学年ごとのばらつきがある点である。1年生では、「とても満足;9.1%」と他学年より低い。そして「やや不満」「とても不満」の割合が13.6%と他学年に比べて高めである。これは、入学直後で大学のサービスや環境に慣れていないことが影響している可能性が考えられる。次に4年生の「やや不満」「とても不満」の割合が合計12.7%とやや高い。この理由として、就職活動や卒業研究、臨床実習、国家試験などの影響で不安が増えている可能性がある。

まとめとして、「大学全体の評価と比べて、本コースの満足度はほぼ同水準」「3年生の満足度が比較的高く、1年生と4年生に課題がある」「低学年向けの大学生活支援、高学年向けの就職・卒業支援の充実」この結果をもとに、学年ごとのサポート体制の見直しを検討する事により、さらに満足度を高めることを促す。

### 項目6 いま次のような不安や悩みがありますか。(設問 35~43)

「設問 35 授業の内容についていけない」の結果は以下の通りである。



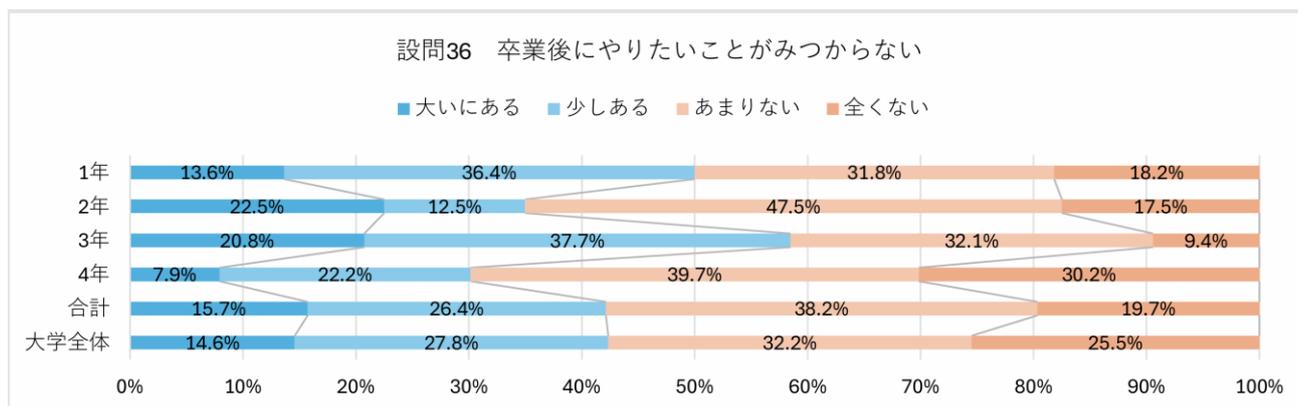
学年ごとの傾向では、1年生では「大いにある;27.3%」と高く、「少しある」と合わせると68.2%に達しており、授業についていけないと感じる学生が多い。2年生になると「大いにある;5.0%」と急減し、「少しある;57.5%」の割合が最も多いが、「あまりない」の割合も1年次と比較して増えている。3年生では「大いにある;9.4%」に再び上昇し、「少しある;41.5%」が減少している。「あまりない」「全くない」の割合が増え、ある程度授業に適応している学生が増えていると考えられる。4年生では「大いにある;1.6%」と最低値だが、「少しある;22.2%」にとどまり、「あまりない;50.8%」と「全くない;25.4%」の割合が4学年の中で最も高い。これは、4年生が卒業研究などで授業が減ることや、専門知識の定着が進んでいるためと考えられる。

全体的な傾向として、1年生が最も授業についていけないと感じる割合が高く、学年が上がるにつれて改善する傾向がある。

以上の対応として、1年生は高校から大学の学修環境への適応が課題となるため、セミナー等を活用したサポートが必要と考える。2年生以降は講義に慣れ、理解度が向上するが、3年生で再び困難を感じる学生が一定数いる。4年生では講義に関する負担が少なくなり、学修の自信がついていることが示唆される。

結論として、1年生の学修支援が重要であり、特に大学入学直後のフォローアップ施策（補習や学修相談）が有効と考えられる。

「設問 36 卒業後にやりたいことがみつからない」の結果は以下の通りである。



学年ごとの傾向は、下記の通りである。

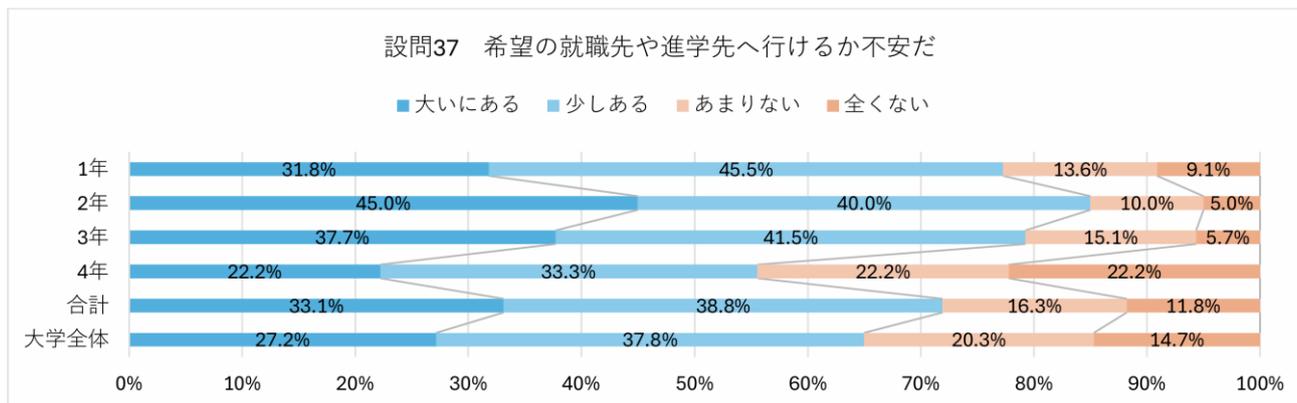
- ・1年生では「大いにある;13.6%」と比較的低いものの、「少しある;36.4%」を含めると約半数が「やりたいことが見つからない」と感じていることがわかる。
- ・2年生では「大いにある;22.5%」と1年次より増加する一方、「少しある;12.5%」と減少し、合計で35%程度となり、1年生よりも「やりたいことが見つからない」割合がやや低下している。
- ・3年生では「大いにある;20.8%」と2年次と同程度で、「少しある;37.7%」と大幅に増加していることが特徴である。
- ・4年生では「大いにある;7.9%」が4学年内で最も低く、「少しある;22.2%」は減少しており、「やりたいことが見つからない」と感じる割合は学年が上がるにつれて減少傾向である。

「やりたいことが見つからない」学生の増加については下記の通りである。

- ・「あまりない」や「全くない」の割合を見ると、学年が上がるにつれて増加している。
- ・1年生では「全くない」が18.2%だが、4年生では30.2%となっており、明らかに増加傾向が見られる。これは、学年が進むにつれて学生が自身の進路や興味を明確にできていることを示唆している。

総合的な評価として、1・2年生では「やりたいことが見つからない」と感じる割合が比較的高く、3年生で一時的に増加した後、4年生では大幅に減少する。これは、学年が上がるにつれて進路選択の機会が増え、具体的な目標を持つ学生が増えることを示唆している。ただし、4年生でも30%以上の学生が「やりたいことが見つからない」と感じていることから、キャリア支援や進路相談のさらなる充実が求められる。このデータを活用することで、特に1・2年生の段階でのキャリア教育の強化や、3年生での進路決定のサポートを重点的に行うべきだと考えられる。

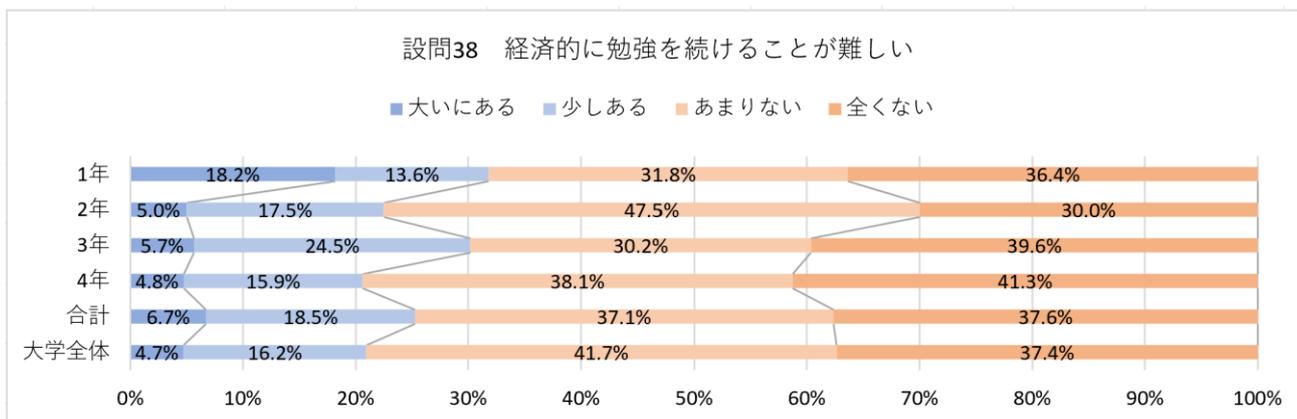
「設問 37 希望の就職先や進学先へ行けるか不安だ」の結果は以下の通りである。



学年ごとの傾向は、1年生と2年生では「大いにある」「少しある」の合計がそれぞれ 77.3%、85.0%と高く、低学年ほど不安を感じる傾向があることが表れている。特に2年生は「大いにある」が45.0%で、4学年の中で最も高い値を示している。3年生になると、「大いにある;37.7%」「少しある;41.5%」の割合が若干減少するが、それでも約8割の学生が不安を感じている。4年生では「大いにある;22.2%」と大幅に減少し、「あまりない;22.2%」が3年次より増加している。就職・進学の見通しが立ち始めることで、不安が和らぐと考えられる。

以上より、低学年ほど不安を感じる傾向が顕著であり、4年生になると不安が軽減する傾向が強い。1～3年生の不安が高いことを踏まえると、キャリア相談、インターンシップ、進路ガイダンスなどのサポートを低学年のうちから充実させることが有効と考えられる。

「設問 38 経済的に勉強を続けることが難しい」の結果は以下の通りである。



学年ごとの傾向は、1年生では、「大いにある;18.2%」が4学年の中で最も高く、経済的な困難を強く感じている学生が多いことが表れている。2年生では「大いにある;5.0%」の割合が1年次より減少した。その一方で、「あまりない;47.5%」の割合が4学年の中で最も高く、経済的な不安を感じている学生の割合は他学年と比べて少なめとなっている。3年生・4年生では「大いにある」の割合はそれぞれ5.7%、4.8%と低いものの、「少しある」(24.5%、15.9%)は1年生と比べてやや高めの数値が出ている。これは学年が上がるにつれ、学費や生活費の負担をより実感すると推察される。

コース全体傾向を見ると、「大いにある;6.7%」、「少しある;18.5%」の合計は25.2%で、全体の約1/4の学生が経済的な不安を感じている。一方で、「あまりない;37.1%」、「全くない;37.6%」が約75%

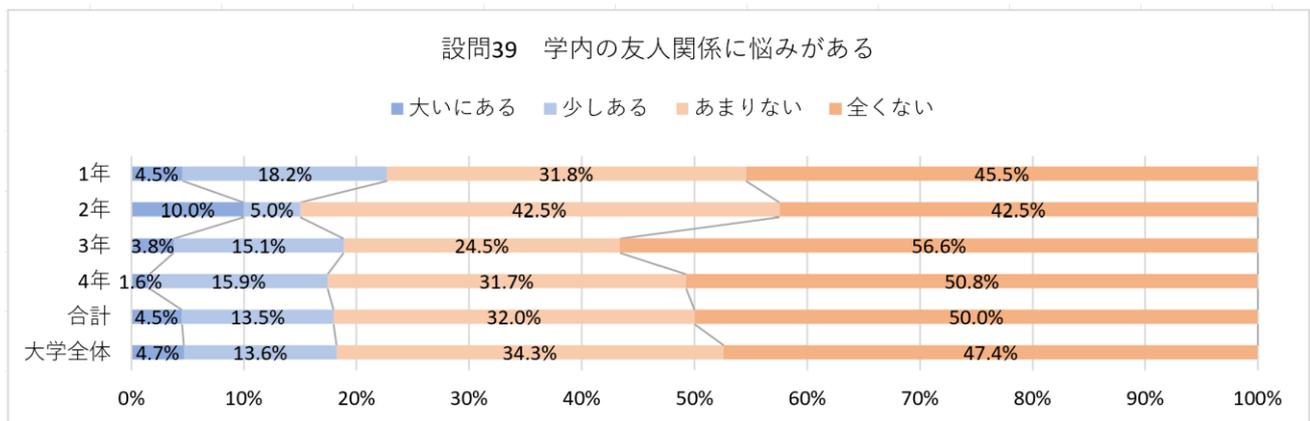
を占めており、多くの学生は経済的に学業を続けることにそれほど大きな支障を感じていないことが分かる。

考察として、1年生の経済的な不安が最も高い。これは、1年生は入学直後のため、学費や生活費に対する負担を強く意識しやすいと考えられる。また、奨学金の手続きやアルバイトの確保など、経済的な計画がまだ整っていない可能性が考えられる。2年生での不安の低下は、「大いにある」の割合が大きく減少しており、1年生の間に奨学金やアルバイト、家計の調整が進んだ結果、経済的な不安が軽減したと考えられる。3年生になると「少しある」の割合が増加しているのは、実習費を含む学費の負担や就職活動による出費の増加が影響している可能性が考えられる。また、卒業後の経済状況について考え始める時期であるため、将来の経済的不安を感じる学生もいるかもしれない。

支援としては、特に1年生を対象とした経済的な支援策や奨学金情報の提供が重要であると考えられる。また、卒業が近づく3・4年生向けには、学費や就職活動費用の負担軽減に向けた支援策を充実させることも有効と考える。

結論として、このデータから、1年生が最も経済的な不安を感じていることが表れているが、2年生以降はやや落ち着く傾向がある。しかし、3・4年生になると再び不安を感じる割合が増加していることから、低学年向けの経済支援と、卒業前の学費・生活費負担を軽減する対策の両方が求められる。

「設問39 学内の友人関係に悩みがある」の結果は以下の通りである。

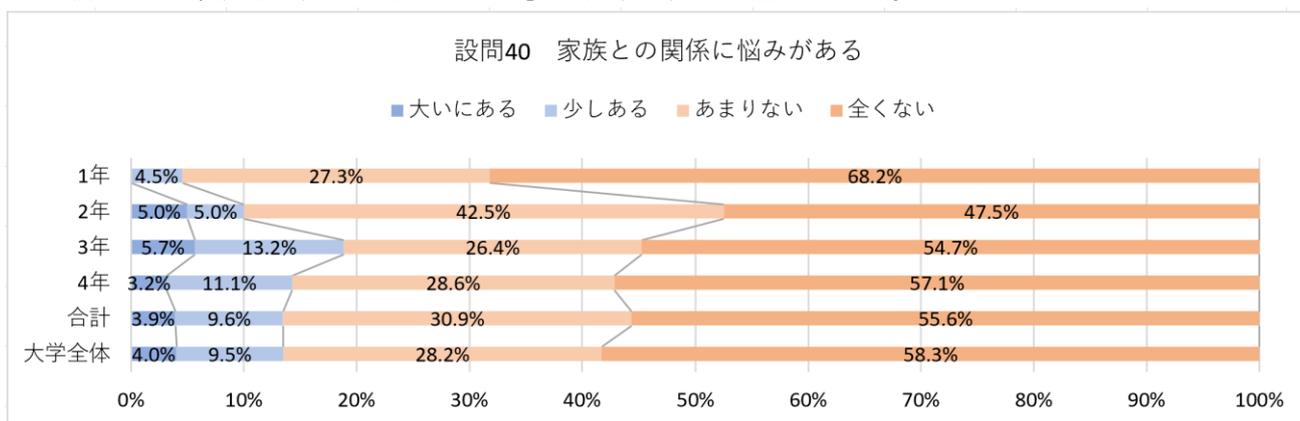


コースの全体的な傾向は、「あまりない;32.0%」「全くない;50.0%」と回答した学生が合わせて80%以上であり、友人関係に悩みを抱えていない学生が多数派であることが表れている。その一方で、悩みを抱える学生も一定数存在し、「大いにある;4.5%」「少しある;13.5%」と合計18.0%おり、一定数の学生が友人関係に悩みを抱えていることがわかる。

学年別の傾向では、2年生は「大いにある;10.0%」と回答した割合が4学年の中で最も高く、友人関係に悩みを抱える学生が多い傾向が見られる。3年生は「全くない;56.6%」と回答した割合が高く、他学年と比較し友人関係に悩みを抱える学生が少ない傾向が見られる。1年生と4年生はほぼ同様の傾向であった。

考察として、2年生の悩みが多い要因は、専門科目の増加や一般就職や病院就職希望の進路に悩むなど環境変化が多い時期であり、友人関係に影響を及ぼしやすいと考える。3年生の悩みが少ない要因は、ある程度大学生活に慣れ、更に進路も一般企業への就職か病院への就職かが明確となり、友人関係も安定してくる時期である事が要因として考えられる。

「設問 40 家族との関係に悩みがある」の結果は以下の通りである。



コース全体合計として、「全くない」と回答した学生が最も多く、55.6%を占めている。一方、「大いにある」「少しある」と回答した学生は合わせて13.5%であり、一定数の学生が家族関係に悩みを抱えていることがわかる。

学年別の傾向は、下記の通りである。

- ・1年生は「全くない」と回答した割合が最も高く、68.2%
- ・2年生は「あまりない」と回答した割合が他の学年より高く、42.5%
- ・3年生は「大いにある」と回答した割合が他の学年より高く、5.7%
- ・4年生は「大いにある」と回答した割合が他の学年より低く、3.2%

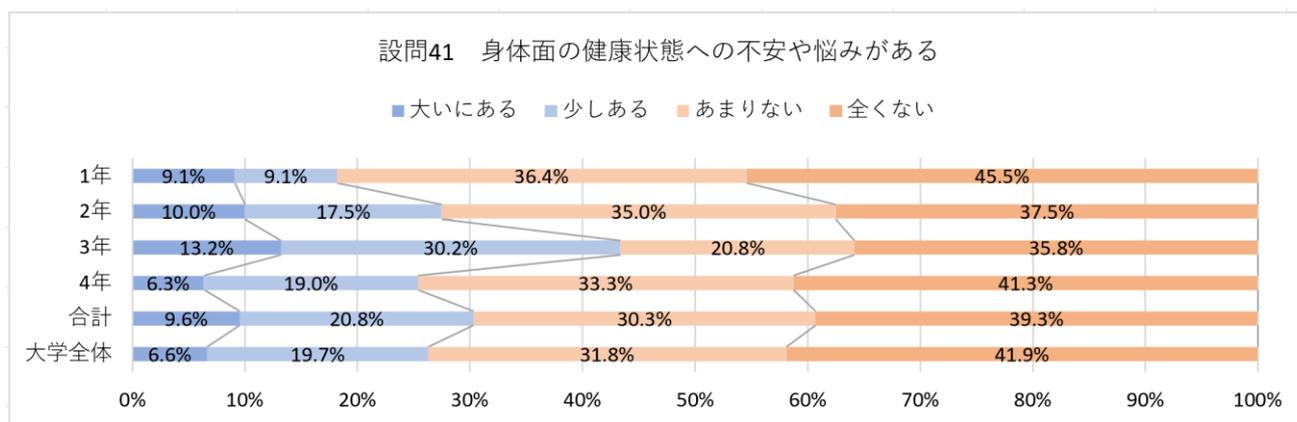
大学全体の傾向は、各学年の傾向とほぼ同様であった。

考察として以下の4点が考えられる。

- ・1年生は入学したばかりで、まだ家族とのつながりが強いことが、「全くない」の割合が高い要因として考えられる。
- ・2年生は大学生活に慣れ始め、家族との関わり方が変化する時期であるため、「あまりない」の割合が高くなったと推察される。
- ・3年生は就職活動や専門性の高い講義など、将来について考えることが増える時期であり、家族との関係に悩みを抱えやすいと考察される。
- ・4年生は卒業後の進路が決まり始め、家族との関係が安定してくるため、「大いにある」の割合がなくなったと考える。

学年によって悩みの程度や内容が異なることが示唆されており、学生支援や家族支援の参考になると考える。

「設問41 身体面の健康状態への不安や悩みがある」の結果は以下の通りである。



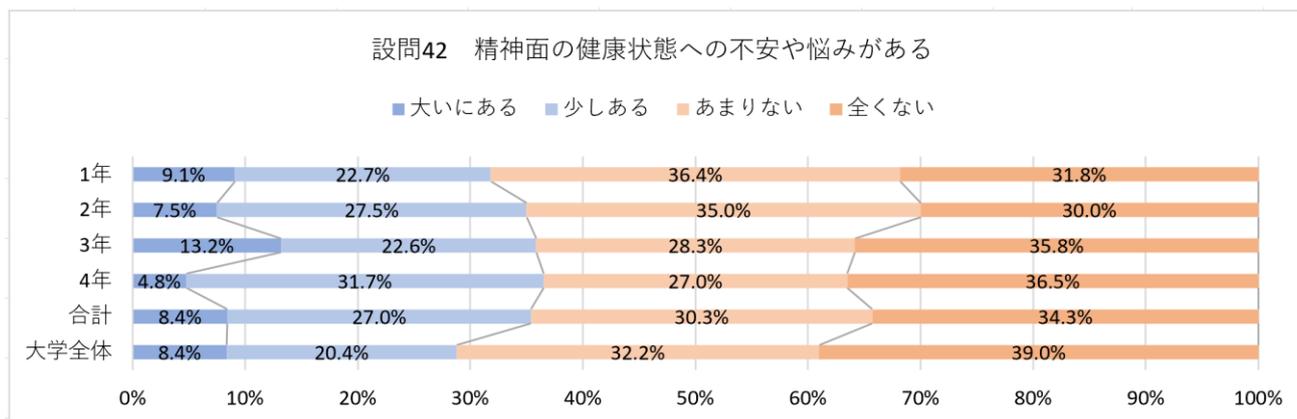
学年ごとの特徴は、以下となった。

- ・1年生は「全くない;45.5%」と回答した割合が最も高く、比較的健康的な不安が少ないことが伺える。
- ・2年生も1年生と同様に「全くない;37.5%」と回答した割合が高く、こちらも健康的な不安が少ないと考える。
- ・3年生は「大いにある;13.2%」、「少しある;30.2%」の割合が最も高く、他の学年よりも健康的な不安を抱える学生が多いことがこのデータから表れている。この理由として、進路や学内実習、多くの専門科目などが影響している可能性がある。
- ・4年生は「大いにある;6.3%」の割合が最も低く、また「あまりない;33.3%」と「全くない;41.3%」が高めであり、健康的な不安が比較的落ち着いていると考えられる。

考察としては、下記の通りである。

- ・1年生は比較的健康的な状態に不安が少ないが、これは環境の変化に適応する時期であり、まだ学業や進路のストレスが本格化していないためと考察される。不安が少ないとはいえ、生活習慣の変化が大きい時期のため、予防的な健康教育を実施する等考えられる。
  - ・2年生になると専門科目が増え、学業の負担が大きくなることが多い。これにより、ストレスが増加し、身体的な健康状態に影響を与えることがある。また、大学生活に慣れてくると、食生活や睡眠習慣が乱れることがある。特に、夜更かしや不規則な食事が身体的な健康に悪影響を及ぼす。その結果、1年次より「少しある」と回答した学生が増えたと推測される。
- ・3年生で健康的な不安が最も高い点は特に注目すべきであり、学業の負担や将来への不安が影響している可能性が高い。この時期に特化したストレス管理や健康相談の機会を増やすことで、健康的な不安の軽減につながる可能性がある。
- ・4年生になると、卒業や進路が決定しつつあること、また国家試験に向けて自信がついてくることなどから、不安が軽減し精神的に安定する傾向が見られる。

「設問 42 精神面の健康状態への不安や悩みがある」の結果は以下の通りである。



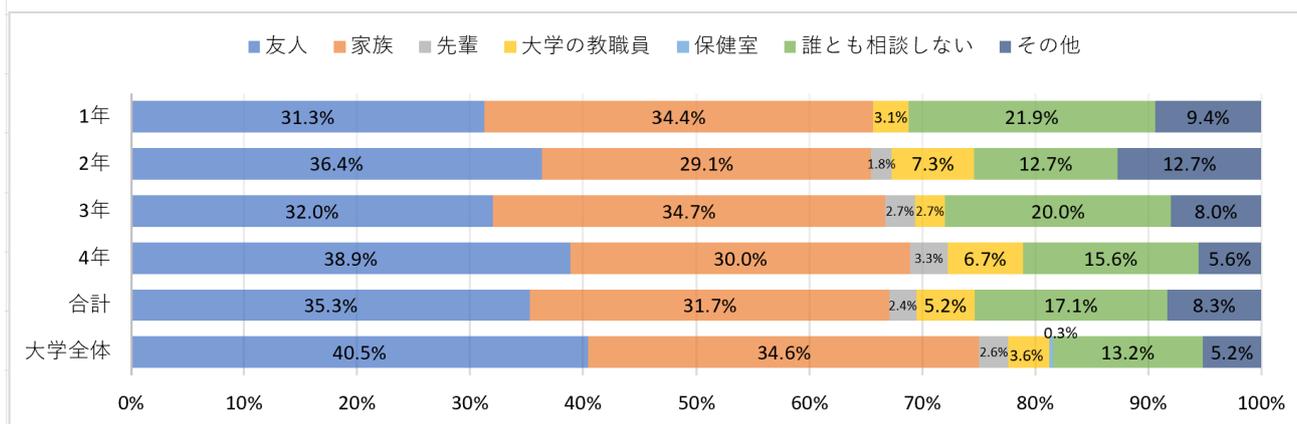
「不安や悩みがある」と答えた学生について、「大いにある」と「少しある」を合わせた割合を見ると、1年生(31.8%)よりも4年生(36.5%)の方が高く、学年が上がるにつれて増加傾向が見られる。これは、進級するにつれて学業、就職活動、卒業研究、国家試験などのプレッシャーが増すことが影響している可能性がある。

次に「不安や悩みがない」と答えた学生について、「あまりない」「全くない」を合わせた割合は、1年生(68.2%)が最も高く、4年生(63.5%)が最も低い。1年生に於いては、入学年次で希望に満ちている事が関係していると推察される。4年生に於いては、上記のプレッシャーがよい方向へ作用した結果と推察される。

コース全体としては、学年が上がるにつれて不安が増す傾向が見られるため、本コースでは高学年の学生向けのメンタルヘルス支援を強化することが必要と考える。

「設問 43 Q35～Q42の不安や悩みについて誰に相談しましたか。または相談しようと思っていますか。

**設問43 Q35～Q42の不安や悩みについて誰に相談しましたか。または相談しようと思っていますか。**  
**主な相談相手を選んでください。(2つまで)**



グラフより最も相談相手として選ばれたのは、全学年を通して「友人;35.3%」と「家族;31.7%」が主な相談相手となっている。「友人」については、特に4年生では「友人;38.9%」と他の学年よりも高く、学年が上がるほど友人を頼る傾向が見られる。次に「家族」の割合は1年生(34.4%)が比較的高く、4年生(30.0%)が最も低い。これは、大学生活に慣れるにつれ、家族よりも友人に相談するようになる傾向を示している。

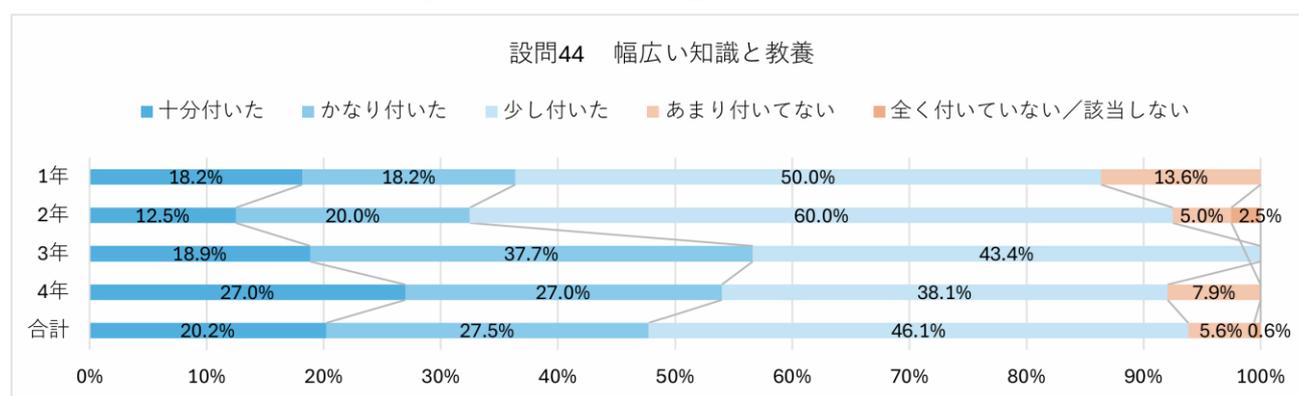
「誰とも相談しない」と回答した割合は、1年生（21.9%）、2年生（12.7%）、3年生（20.0%）、4年生（15.6%）となっている。1年生と3年生で特に高く、新生活への適応や進級に伴うプレッシャーに対し、相談できる相手がいないと感じる学生が一定数いることが示唆される。これは大学全体でも13.2%が「誰とも相談しない」と回答しており、心理的な孤立が一定程度存在することがわかる。

「大学の教職員」への相談は全体的に少なく、最も多い2年生でも7.3%にとどまっている。「保健室」も全体的に低い。これは、大学の専門的な支援機関（保健室・教職員）を利用する学生が少ないことを示しており、利用促進の必要性を示唆している。

「その他」の割合は全体的に低く、特に4年生では5.6%と最低値を記録している。これは、趣味のサークルやオンラインコミュニティの仲間などが推測されるが、多くの学生が相談相手を限定された選択肢の中から見つけていると考える。

## 項目7 大学入学時と比べて、以下に挙げる「能力」は身に付きましたか。（設問44～78）

「設問44 幅広い知識と教養」については以下の通りである。



上記グラフより「十分付いた」「かなり付いた」と回答した学生の割合は以下の通りである。

- ・1年生：36.4%（18.2%+18.2%）
- ・2年生：32.5%（12.5%+20.0%）
- ・3年生：56.6%（18.9%+37.7%）
- ・4年生：54.0%（27.0%+27.0%）

学年が上がるにつれて知識と教養が身についていると感じる学生の割合が増加していることが分かる。全体の平均では47.7%（20.2%+27.5%）と、およそ半数の学生が「十分」または「かなり」身に付いたと感じている。

「少し付いた」と回答した学生の割合は、全体で46.1%となっており、最も多い選択肢となっている。特に2年生では60.0%、1年生では50.0%と高く、低学年では「少しは身につけているが、十分ではない」と感じる学生が多い。

「あまり付いていない」の割合は、1年生13.6%、2年生5.0%、3年生0.0%、4年生7.9%となっており、学年が上がるにつれて減少傾向である。

「全く付いていない/該当しない」は全体で0.6%と極めて少なく、ほとんどの学生が何らかの形で知識や教養を得ていると感じている。

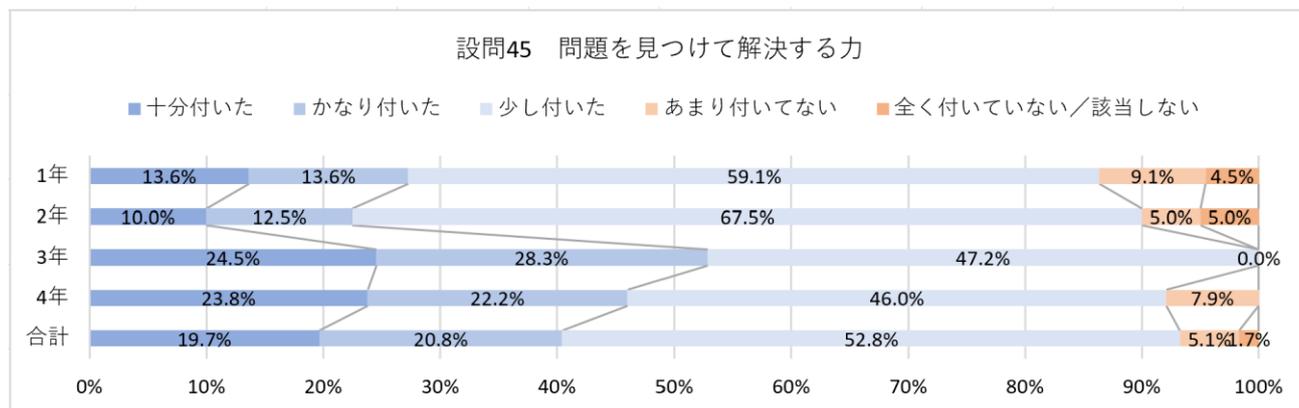
考察として、学年が上がるほど「十分付いた」「かなり付いた」と感じる学生が増加する。1・2年生では「少し付いた」とする学生が過半数を占めるが、3・4年生になると「十分付いた」「かなり付いた」と評価する割合が増えている事からも、学年が上がるほど知識が付いている事が明らかである。これは、

大学での学修が進むにつれて、知識や教養が体系的に蓄積されていくことを反映していると考えられる。

しかし低学年の学修実感が弱い可能性があり、1・2年生の段階では、「少し付いた」とする割合が特に高いことから、知識の定着を実感しにくい時期である可能性がある。専門科目よりも一般教養科目が多いことや、学びの基礎固めの時期であることが影響している可能性がある。

「あまり付いていない」「全く付いていない」と答えた学生は少なく、大学教育が一定の成果を上げていることを示唆している。

「設問 45 問題を見つけて解決する力」については以下の通りである。

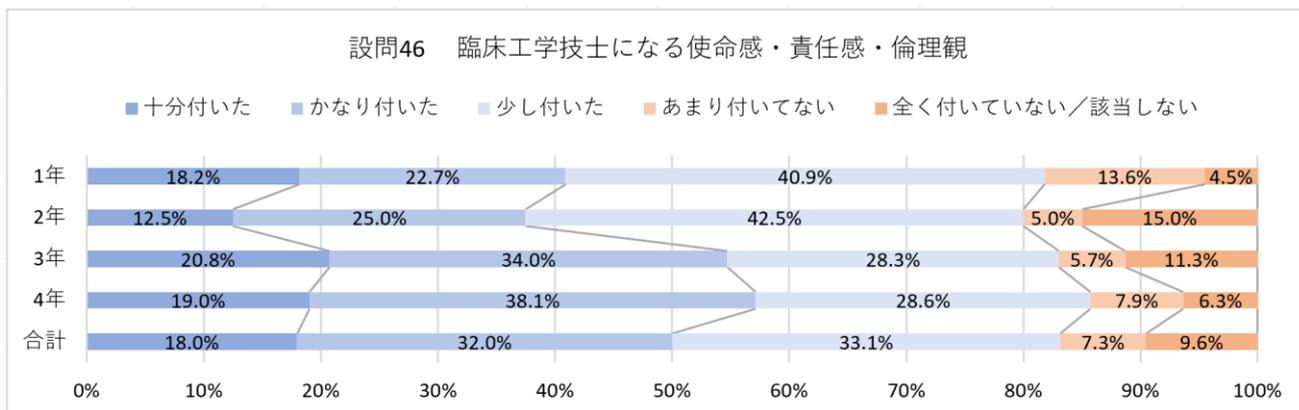


上記グラフより学年が上がるにつれて成長傾向がある。それは「十分付いた」「かなり付いた」の割合が、1年生 27.2% (13.6%+13.6%) に比べ、3年生 52.8% (24.5%+28.3%) や4年生 46.0% (23.8%+22.2%) で高くなっており、学年が上がるにつれて問題解決力が向上していることがわかる。

「少し付いた」の割合について、各学年で約50%を占めており、全体的にある程度の問題解決力は身につけているが、自信を持てるレベルには至っていないことが示唆される。

「全く付いていない」の割合について、1年生では「全く付いていない」が4.5%と比較的高いが、3年生では0%になっており、学修の進行とともに問題解決力の向上が見られる。ただし、4年生では「全く付いていない」が0.0%、「あまり付いていない」が7.9%となっており、個人差が生じていることが示唆される。「全く付いていない」「あまり付いていない」と感じる学生に対して、個別のサポートや追加学修の更なる機会を提供する。

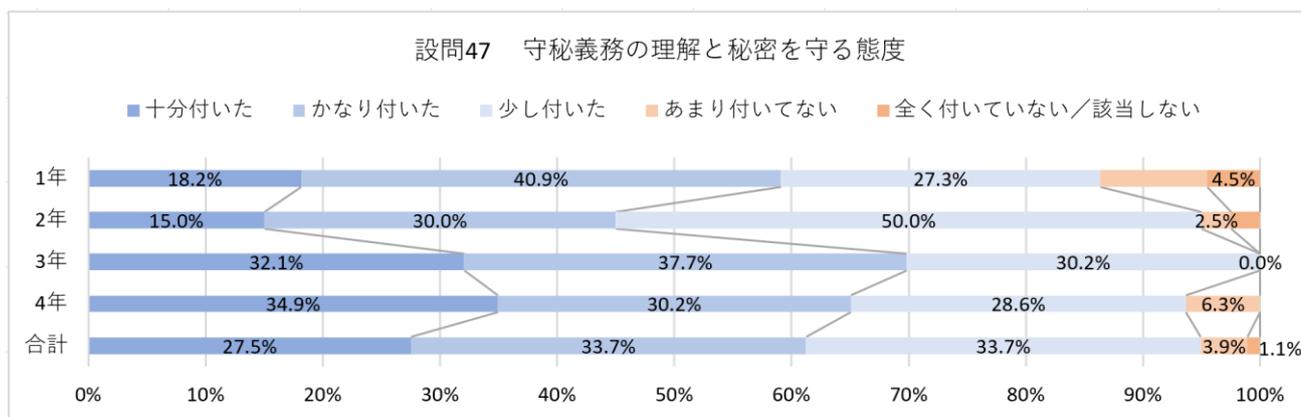
「設問 46 臨床工学技士になる使命感・責任感・倫理観」については以下の通りである。



全体的に学年が上がるにつれて使命感・責任感・倫理観が強まる傾向がある。その理由は、「十分付いた」「かなり付いた」の割合を見ると、1年生 40.9% (18.2%+22.7%) に対し、4年生 57.1% (19.0%+38.1%) となっており、学年が上がるにつれて臨床工学技士としての意識が強まる傾向が見られる。特に3年生、4年生で「かなり付いた」の割合が増加している点が特徴的である。この理由として、学内実習、臨床実習、国家試験、就職活動などがあり、知識と職業意識が高められていく為と考える。

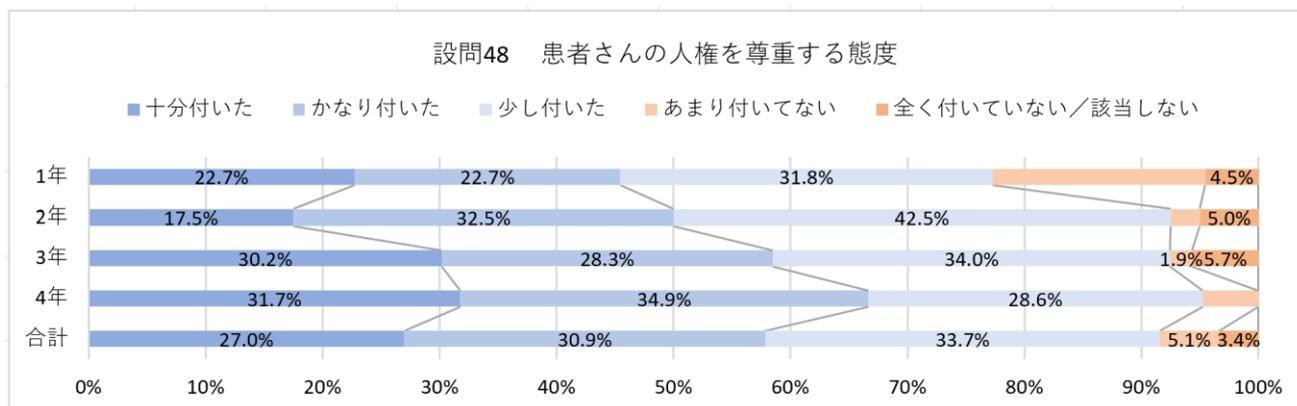
次に「あまり付いていない」「全く付いていない/該当しない」の割合は、1年生では「全く付いていない;4.5%」、「あまり付いていない;13.6%」であり、約18%の学生が使命感や倫理観をほとんど意識できていない。この理由として、1年生は基礎科目、教養科目が多いことがあげられ、臨床との接点が少ない事があげられる。2年生では「全く付いていない/該当しない」が15.0%と最も高い。これは進路を一般企業への就職か病院への就職かと悩む時期となっており、その悩みが高い値として表れている。3年生、4年生ではこの割合が低下しており、教育や実習を通じて意識が高まっていることが示唆される。

「設問47 守秘義務の理解と秘密を守る態度」については以下の通りである。



上記グラフより、学年が上がるにつれて守秘義務の理解が強まる傾向がある。「十分付いた」「かなり付いた」の割合を見ると、1年生 59.1% (18.2%+40.9%) に対し、4年生 65.1% (34.9%+30.2%) となっており、学年が上がるにつれて守秘義務への理解が深まる傾向が見られる。特に3年生、4年生では「十分付いた」の割合が大幅に増加しており、より強い意識を持つようになっていることがわかる。

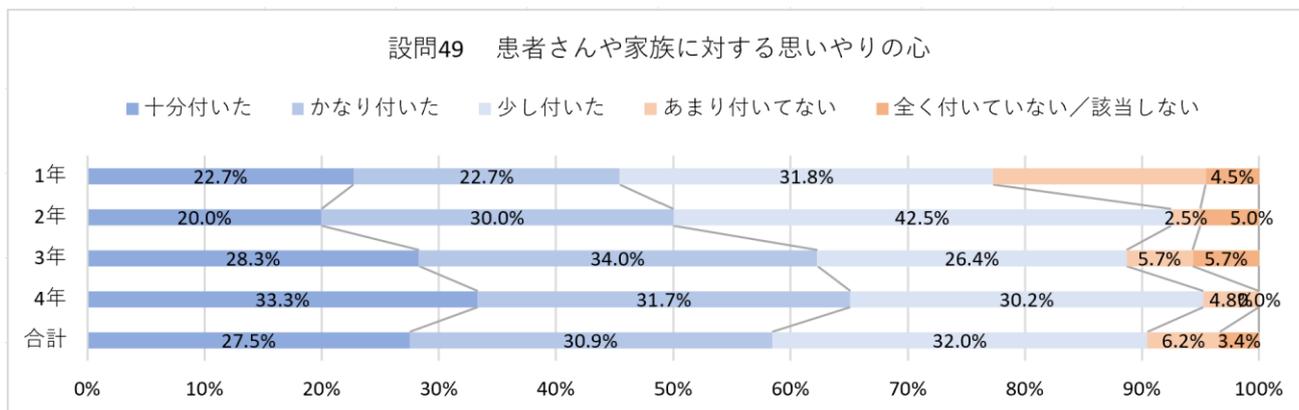
「設問48 患者さんの人権を尊重する態度」については以下の通りである。



全体傾向としては、「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」を合わせると90%以上となり、学年が進むにつれて、患者さんの人権尊重に対する意識は高いと言える。

更なる向上の為に、具体的な事例を用いた研修（セミナー等）を用い、実践的なスキル向上を目指す。そして、学生同士や教員との意見交換の場を設け、人権尊重に関する理解を深める。

「設問 49 患者さんや家族に対する思いやりの心」については以下の通りである。



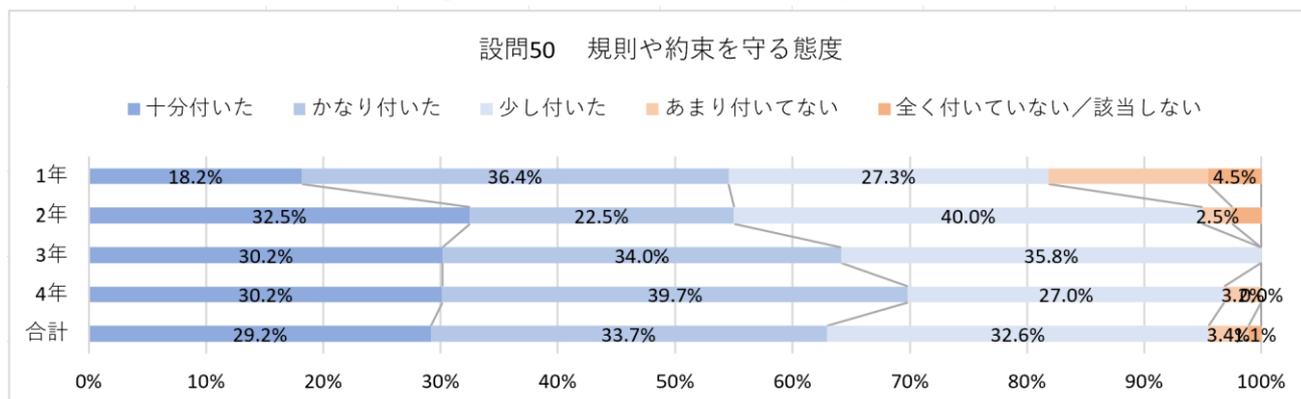
上記グラフの合計から、全体傾向は、下記の通りである。

- ・ 肯定的評価が非常に高く、「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」を合わせると90%以上となり、患者さんや家族に対する思いやりを持っていると感じている人が非常に多い。
- ・ 「少し付いた」が最多で、次いで「かなり付いた」「十分付いた」となっている。これは、多くの人が思いやりの重要性を理解しつつも、実践にはまだ課題を感じていることを示唆している。
  - ・ 否定的な回答は少なく、「あまり付いていない」「全く付いていない/該当しない」という回答は少数である。

下記に今後のアクションとしての提案を示す。

- ・ 具体的な事例を用いた研修: 思いやりに関する具体的な事例を用いた研修を実施し、実践的なスキル向上を目指す。
- ・ 意見交換の場の設定: 学生同士や教員との意見交換の場を設け、思いやりに関する理解を深める。
- ・ ロールプレイ: 患者さんや家族とのコミュニケーションを想定したロールプレイを取り入れることで、実践的なスキルを磨く。

「設問 50 規則や約束を守る態度」については以下の通りである。



コース合計より全体傾向は、下記の通りである。

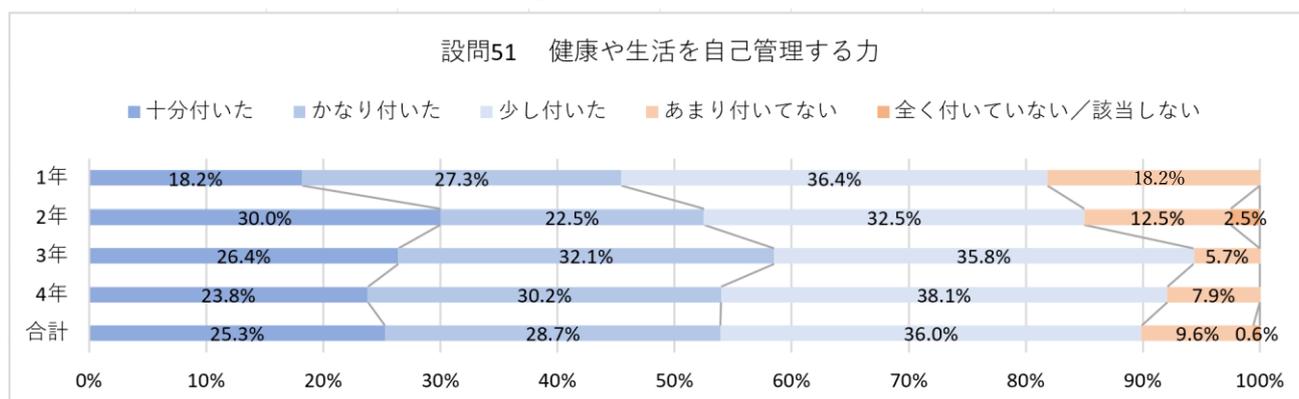
- ・ 肯定的評価が比較的高く、全体的に「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」を合わせると 90%以上となり、規則や約束を守る態度を持っている学生が多い。
- ・ 全体では「少し付いた」「かなり付いた」「十分付いた」がほぼ同程度の割合となっている。これは、多くの人が規則や約束を守ることの重要性を理解しつつも、実際には個人差があることを示唆している。
- ・ 否定的な回答は少ない。「あまり付いていない」「全く付いていない/該当しない」という回答は少数であった。

学年別傾向は、下記の通りである。

- ・ 1年生:「かなり付いた」が最も多く、次いで「少し付いた」となっている。他の学年と比べて、「十分付いた」の割合が低いのが特徴であった。
- ・ 2年生:「少し付いた」が最も多く、次いで「十分付いた」となっている。1年生と比べて、「十分付いた」の割合が高いのが特徴であった。
- ・ 3年生:「少し付いた」が最も多く、次いで「かなり付いた」となっている。「あまり付いていない」「全く付いていない」と回答した学生がほとんどいないのが特徴である。
- ・ 4年生:「かなり付いた」が最も多く、次いで「十分付いた」となっている。他の学年と比べて、「かなり付いた」の割合が最も高いのが特徴である。

考察として、学年によって回答分布に差が見られ、学年による意識差がある。これは、学年ごとの学修内容や経験の違いが影響している可能性がある。全体的に「少し付いた」が多いことから、具体的な事例を通して規則や約束を守ることについて学ぶ機会を増やすことが重要かもしれない。否定的な回答をした人に対して、セミナー等を活用した個別のフォローアップや研修を行うなど、具体的な対策を検討する必要があるかもしれない。

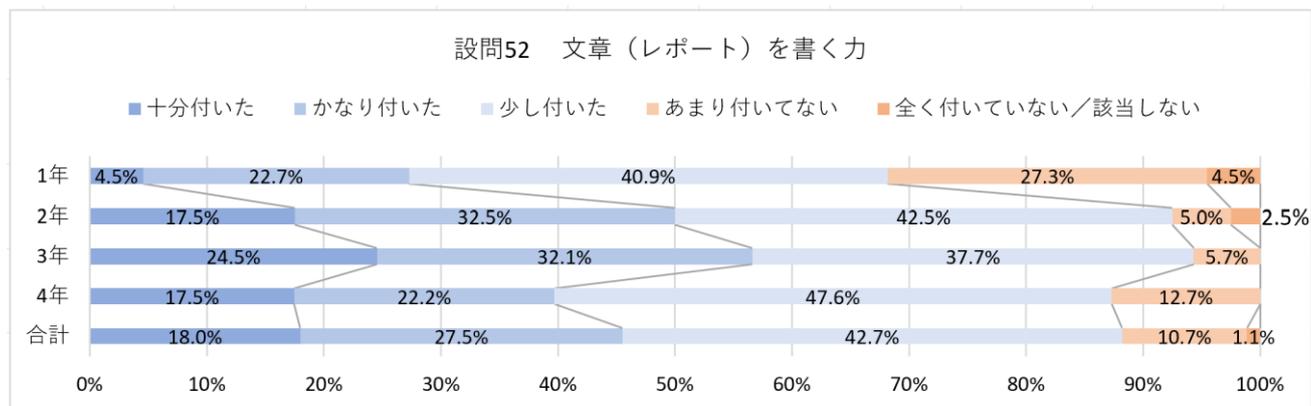
「設問 51 健康や生活を自己管理する力」については以下の通りである。



コース合計の全体傾向は、肯定的評価が比較的高い。これは「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」を合わせると 90%以上となる事からも明らかである。健康や生活を自己管理する力を持っていると感じている人が多い。次にコース合計の特徴は、「少し付いた;36.0%」が最も多く、次いで「かなり付いた;28.7%」「十分付いた;25.3%」となっている。これは、多くの人が自己管理の重要性を理解しつつも、実践にはまだ課題を感じていることを示唆している。更に否定的な回答も一定数存在し、「あまり付いて

いない;9.6%」「全く付いていない/該当しない;0.6%」という回答も一定数存在する。特に1年生では「あまり付いていない;18.2%」と高い値だが、これは入学後という環境の変化などが要因と考える。

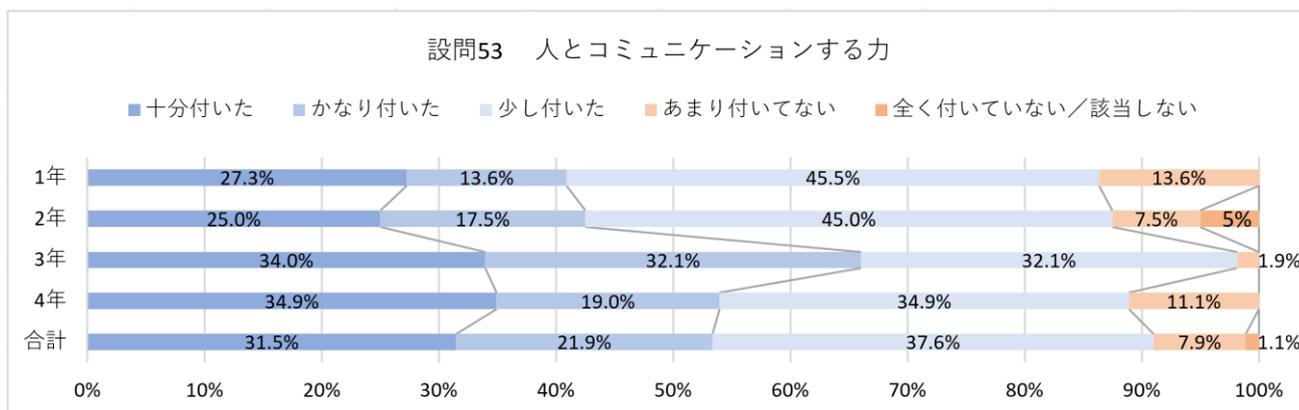
「設問 52 文章（レポート）を書く力」については以下の通りである。



上記グラフのコース合計より、「十分付いた;18.0%」「かなり付いた;27.5%」「少し付いた;42.7%」を合わせると約88%となり、文章（レポート）を書く力に自信を持っている学生は半数以上であることがわかる。「少し付いた;42.7%」が最多で、次いで「かなり付いた;27.5%」「十分付いた;18.0%」となっている。これは、多くの学生が文章（レポート）を書くことの重要性を理解しつつも、自信を持って取り組めていないことを示唆している。次に否定的な回答では、「あまり付いていない;10.7%」「全く付いていない/該当しない;1.1%」という結果になった。

学年別の傾向では、1年生が「少し付いた;40.9%」が最も多く、次いで「あまり付いていない;27.3%」「かなり付いた;22.7%」となっている。他の学年と比べて、「あまり付いていない」の割合が最も高いのが特徴で、これは実習等のレポート課題が発生する講義・演習が少ない事が要因として考えられる。2年生では、「少し付いた;42.5%」が最も多く、次いで「かなり付いた;32.5%」「十分付いた;17.5%」となっている。1年生と比べて、「十分付いた」の割合が増加しているのは、レポート課題が発生する実習等が本格的に開始されていることが要因である。3年生になると、「少し付いた;37.7%」が最も多く、次いで「かなり付いた;32.1%」「十分付いた;24.5%」となっている。4学年の中で「十分付いた」の割合が最も高いのが特徴である。学内実習が本格化してきていることが要因だと考えられる。4年生では、「少し付いた;47.6%」が最も多く、次いで「かなり付いた;22.2%」となっている。一方で、2・3年生と比べて、「あまり付いていない」の割合が高いのが特徴である。これは臨床実習でのレポートや履歴書の執筆など、考えて書く機会が増えていることが要因と推察される。おそらく、臨床実習などを通じて、学生はより高度な知識やスキルが求められる現場を経験する。そのため、自己評価の基準が上がり、「以前はできていたと思っていたことが、実は不十分だった」と気づくことがあり、成長したからこそ、自身の未熟さを痛感した結果であると推察する。

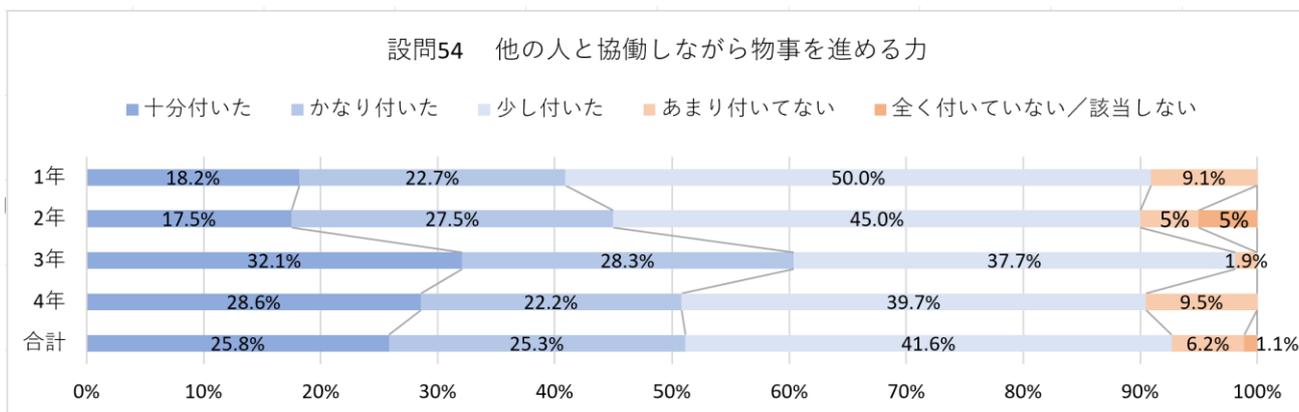
「設問 53 人とコミュニケーションする力」については以下の通りである。



グラフのコース合計より、「十分付いた;31.5%」「かなり付いた;21.9%」「少し付いた;37.6%」を合わせると約91%となり、人とコミュニケーションする力に自信を持っている学生が多い事がわかる。しかし、この中で「少し付いた;37.6%」が最も多く、これは、多くの学生がコミュニケーションの重要性を理解しつつも、自信がないことを示唆している。

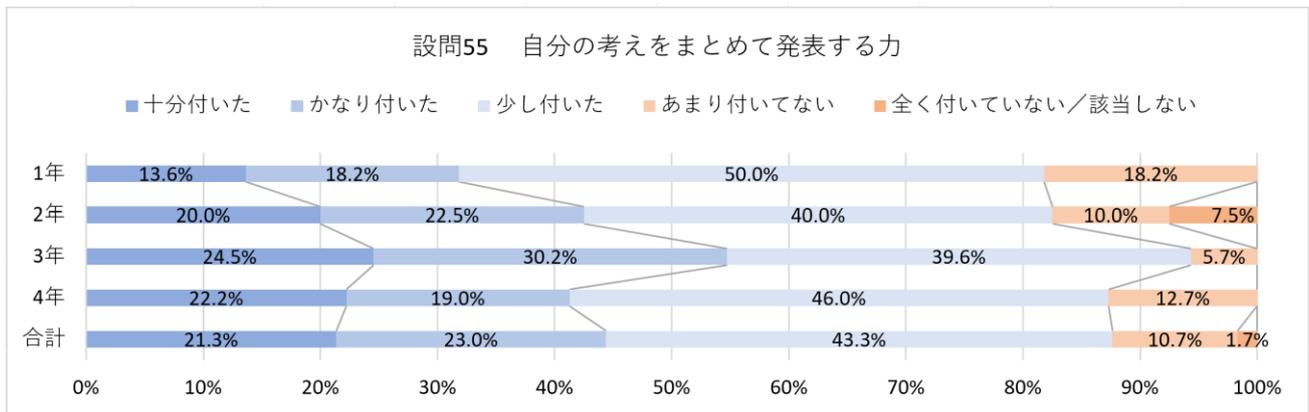
よって以下の施策を検討する。1. コミュニケーションの基本、傾聴、質問、フィードバックなど、具体的なスキルを学ぶ研修を実施する。2. 様々な場面を想定したロールプレイを取り入れることで、実践的なスキルを磨く。3. グループワークを通して、学生同士のコミュニケーションを促進する。

「設問 54 他の人と協働しながら物事を進める力」については以下の通りである。



グラフのコース合計より全体の傾向として、「十分付いた;25.8%」「かなり付いた;25.3%」「少し付いた;41.6%」を合わせて約93%となり、他の人と協働しながら物事を進める力に自信を持っている学生が多いことがわかる。「少し付いた」が最も多く、次いで「十分付いた」「かなり付いた」となっている。これは、多くの学生が協働の重要性を理解しつつも、自信を持って取り組めていないことを示唆している可能性がある。この対応として、チームワーク、リーダーシップ、役割分担など、具体的なスキルを学ぶ研修の施策や複数人で協力して課題に取り組むプロジェクト学修の導入などを検討する。

「設問 55 自分の考えをまとめて発表する力」については以下の通りである。

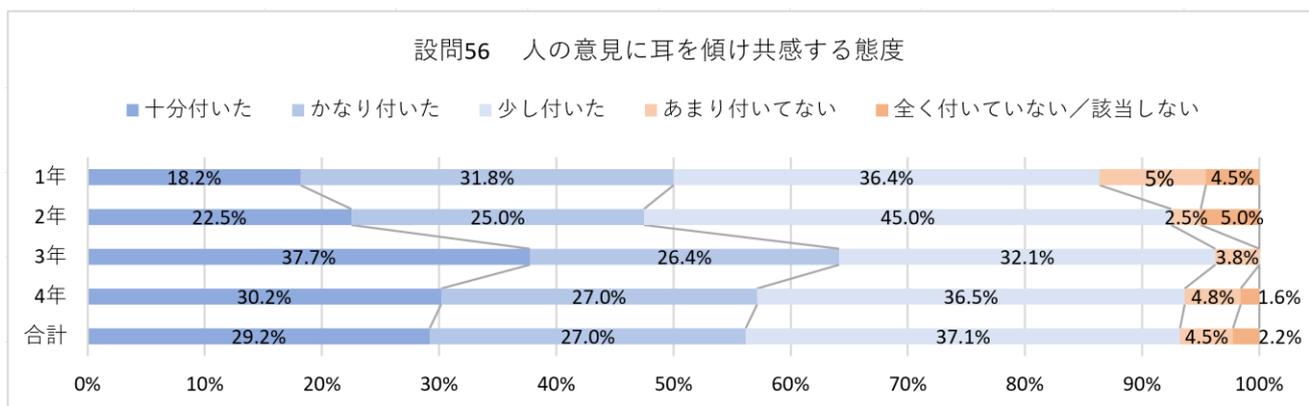


コース合計より傾向は「十分付いた;21.3%」「かなり付いた;23.0%」「少し付いた;43.3%」を合わせても87.6%となり、自分の考えをまとめて発表する力に自信を持っている学生は約9割程度であることがわかる。このうち「少し付いた;43.3%」と最多であり、次いで「かなり付いた;23.0%」「十分付いた;21.3%」となっている。これは、多くの学生が発表の重要性を理解しつつも、自信を持って取り組めていない可能性がある。

また、否定的な回答も一定数存在しており、「あまり付いていない;10.7%」「全く付いていない/該当しない;1.7%」という回答も一定数存在している。対応として否定的な回答をした学生に対し、個別のフォローアップや発表練習など、具体的な対策を検討する必要があると考える。特に1年生と4年生の「あまり付いていない;1年生18.2%、4年生12.7%」の割合が高い要因は、下記の施策にて対応を検討する。

- ・プレゼンテーションの構成、資料作成、話し方など、具体的なスキルを学ぶ研修を実施する。
- ・発表の機会を増やし、学生が発表に慣れるような環境を構築する。

「設問 56 人の意見に耳を傾け共感する態度」については以下の通りである。



上記グラフのコース合計より、全体的な傾向は以下の通りである。

- ・肯定的評価が多い: 「十分付いた;29.2%」「かなり付いた;27.0%」「少し付いた;37.1%」を合わせると、全体の約90%が肯定的な評価をしている。
- ・否定的評価は少ない: 「あまり付いていない;4.5%」「全く付いていない/該当しない;2.2%」を合わせると、全体の約7%であり、否定的な評価は少数派であった。

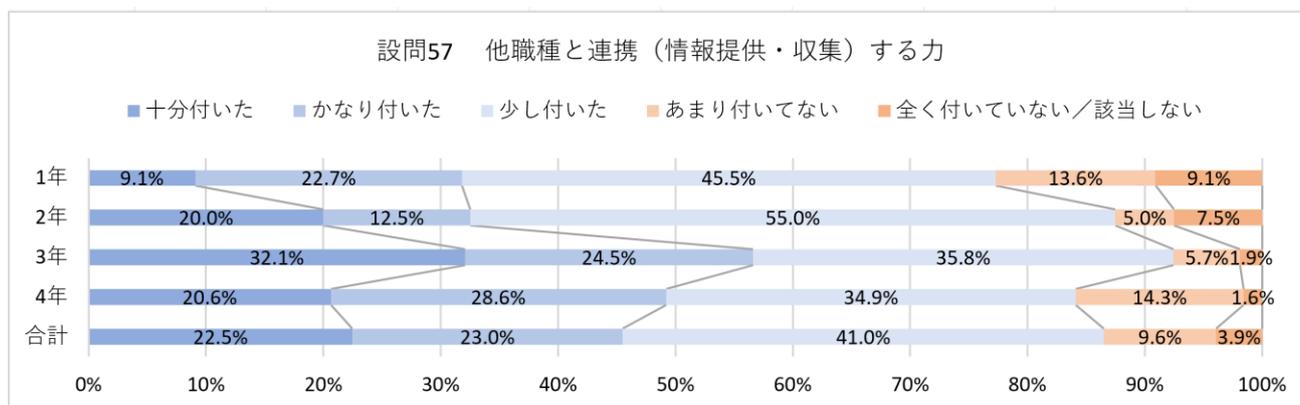
考察は以下の通りである。

- ・全体的に見ると、多くの学生が「人の意見に耳を傾け共感する態度」が身につけている。
- ・学年によって評価に差が見られるのは、発達段階や経験の違いが影響している可能性がある。
- ・1年生の評価のばらつきは、入学したばかりでまだ自己評価が定まっていないことが考えられる。

対応施策としては以下の通りである。

- ・1年生に対しては、自己評価の基準を明確にするための指導や、具体的な目標設定を促すことが効果的である。
- ・2年生に対しては、自信を持って「十分付いた」と言えるように、具体的な事例を通して自己肯定感を高める指導が必要と考える。
- ・否定的な評価をした生徒に対しては、個別のフォローアップを行い、課題解決に向けたサポートが必要と考える。

「設問 57 他職種と連携（情報提供・収集）する力」については以下の通りである。



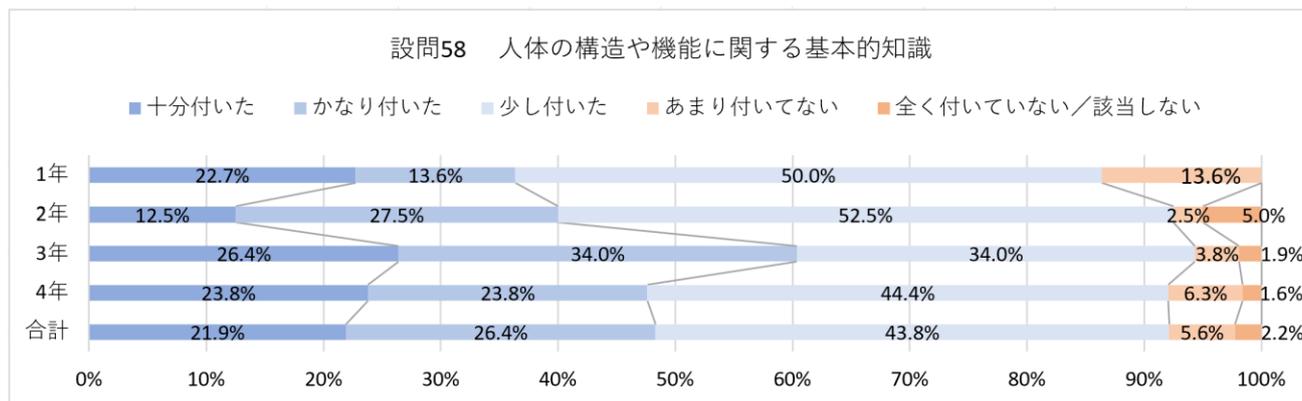
上記グラフのコース合計より、全体的な傾向は、下記と推察される。「十分付いた;22.5%」「かなり付いた;23.0%」「少し付いた;41.0%」を合わせると、全体の約90%が肯定的な評価をしている。「あまり付いていない;9.6%」「全く付いていない/該当しない;3.9%」を合わせると、13.5%であり、否定的な評価は少数派である。

学年別の傾向では、下記の特徴がある。1年生はばらつきが大きい：1年生は「十分付いた;9.1%」と「全く付いていない/該当しない;9.1%」の両極端な回答があり、個人差が大きいことが伺える。2年生は「少し付いた」が多い：2年生は「少し付いた;55.0%」の割合が他の学年よりも高く、肯定的な評価はあるものの、自信を持って「十分付いた;20.0%」と言えない層が多い可能性がある。3年生は肯定的な評価が多い：3年生は「十分付いた 32.1%」の割合が最も高く、肯定的な評価が全体的に高い傾向にある。4年生は「かなり付いた」の割合が他の学年よりも高い：「少し付いた」と回答した学生が最も多く、34.9%を占めている。これは、多くの学生が連携の必要性を理解し、ある程度の経験も積んでいるものの、まだ自信を持って実践できるレベルには至っていないことを示唆している。また、「十分付いた」と回答した学生は20.6%にとどまっており、高度な他職種連携能力を自覚している学生は比較的少ないことがわかる。しかし、「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」を合わせると、84.1%の学生が何らかの形で能力が身についたと感じている。このことから、多くの学生が他職種連携の重要性を認識し、一定の能力を獲得していると考えられる。また、「あまり付いていない」「まったく付いていない」と回答した学生が計15.9%存在する。これは、一部の学生が連携能力の習得に苦労しているか、重要性を十分に理解で

きていない可能性を示唆している。この層に対する支援が必要となる。

考察として、全体的に見ると、多くの学生が「人の意見に耳を傾け共感する態度」が身についていると感じている。しかし、学年によって評価に差が見られるのは、発達段階や経験の違いが影響している可能性があり、特に1年生の評価のばらつきは、入学したばかりでまだ自己評価が定まっていないことが考えられる。よって、1年生に対しては、自己評価の基準を明確にするための指導や、具体的な目標設定を促すことが効果的と考える。

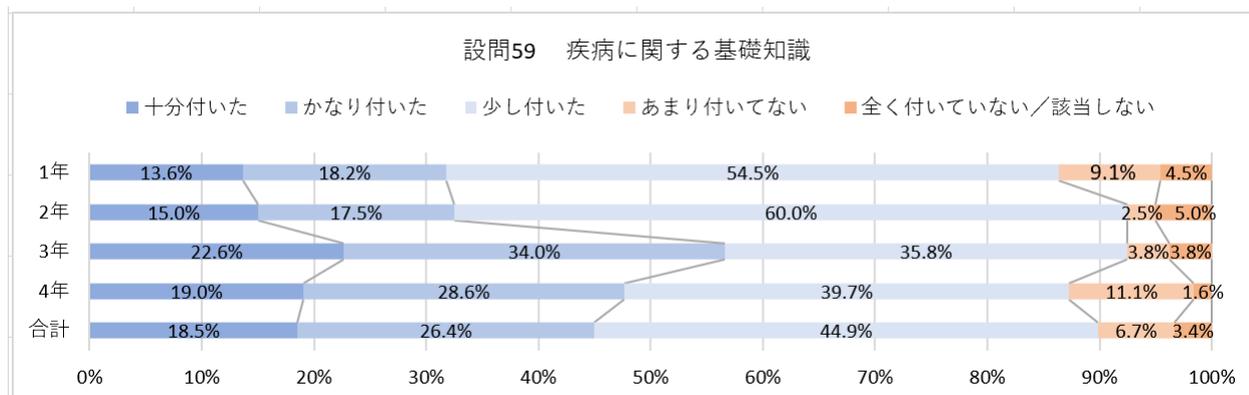
「設問 58 人体の構造や機能に関する基本的知識」については以下の通りである。



人体の構造や機能は、本コースでは1年時に設定されている科目である。全体的な傾向は、コース合計では、「十分付いた;21.9%」「かなり付いた;26.4%」「少し付いた;43.8%」を合わせると、全体の約92%が肯定的な評価をしている。反対に「あまり付いていない;5.6%」「全く付いていない/該当しない;2.2%」を合わせると、全体の約8%であり、否定的な評価は非常に少ない結果である。

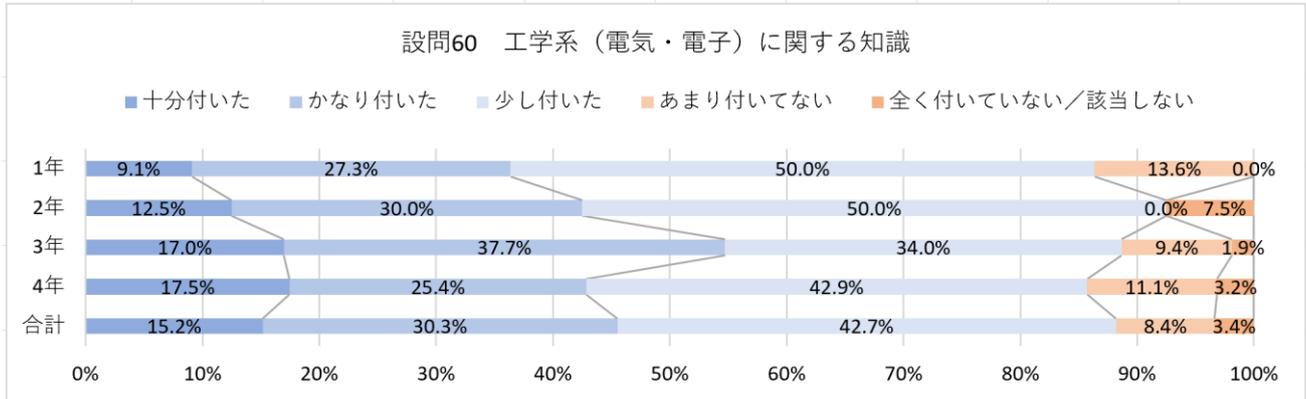
学年別の「あまり付いていない」「全く付いていない/該当しない」の傾向では、1年生が13.6%と最も多いものの、進級するにつれて数値が減少している。これは、定期試験、レポート、実技試験、プレゼンテーションなどの学修内容の定着度を確認する機会が、進級するにつれて多く求められるためだと考えられる。これらの機会を通じて、学生は自分の理解度や習熟度を客観的に把握することができる。また、教員からのフィードバックや評価を受けることで、自分の課題や改善点を知ることができる。これにより、自分の能力を客観的に評価する機会が増え、自己評価の精度も高まっていくと考えられる。そのため、2年生以降は減少に転じていると推察する。

「設問 59 疾病に関する基礎知識」については以下の通りである。



上記グラフより全体的な傾向は、「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」の合計（肯定的評価）は、学年が上がるにつれて増加している。「十分付いた」「かなり付いた」の割合を見ると、1年生の31.8%に対し、3年生（56.6%）や4年生（47.6%）で大きく上昇しており、より深い理解を得る学生が増えていることが分かる。

「設問 60 工学系（電気・電子）に関する知識」については以下の通りである。



上記グラフより、学年ごとの「十分付いた」「かなり付いた」の割合は、以下の通りである。

- ・1年生では 36.4% (9.1%+27.3%)
- ・2年生では 42.5% (12.5%+30.0%)
- ・3年生では 54.7% (17.0%+37.7%)
- ・4年生では 42.9% (17.5%+25.4%)

以上より、「十分付いた」「かなり付いた」の割合は、3年生でピークを迎えた後、4年生でやや減少傾向である。

次に「少し付いた」の割合は、以下の通りである。

- ・1年生と2年生では 50.0% と同じ割合。
- ・3年生で 34.0% に減少し、より高い理解レベル（「十分付いた」「かなり付いた」）へ移行。
- ・4年生では 42.9% へやや増加。

「あまり付いていない」「全く付いていない/該当しない」の割合は以下の通りである。

- ・1年生では 13.6%（あまり付いていない）と、一定数の学生が不安を抱えている。
- ・2年生では「あまり付いていない」が 0.0% になり、学修の効果が現れている。
- ・3年生（9.4%）、4年生（11.1%）では再び「あまり付いていない」の割合が増加している。

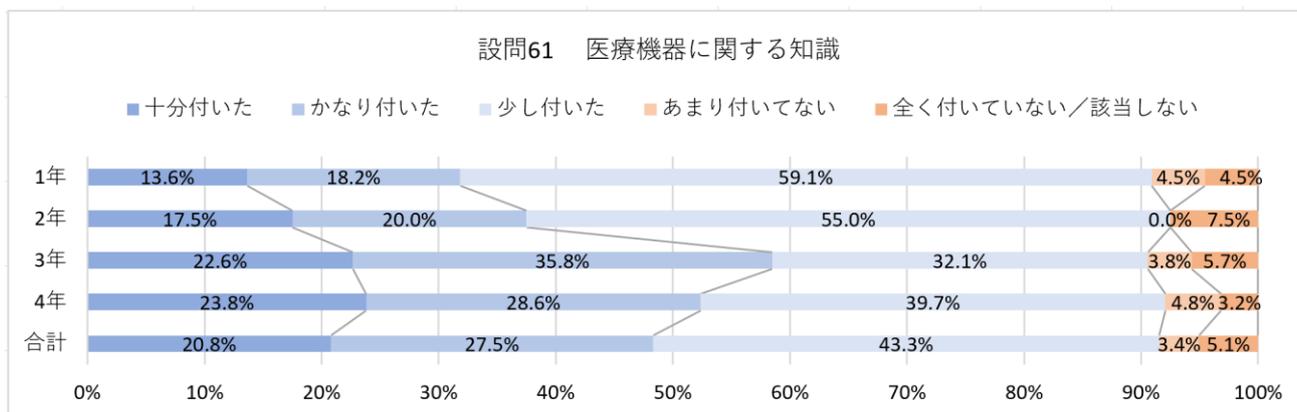
「全く付いていない/該当しない」の割合は全体的に低い（1年生のみ 0%、他は 2~3%）。

考察は以下の通りである。

- ・1年生では約半数の学生が「少し付いた」と回答しており、基本的な知識習得の段階である。
- ・2年生で「かなり付いた」「十分付いた」の割合が増加し、基礎知識の定着が進んでいる。
- ・3年生で「かなり付いた」の割合が最も高くなっており、臨床応用や専門科目を通じて知識が深化していると考えられる。
- ・4年生では「かなり付いた」「十分付いた」の割合が低下し、「少し付いた」「あまり付いていない」の割合が増えている。このことから、3年生で得た知識が時間の経過とともに薄れたり、別の専門領域の学修にシフトすることで、相対的に基本的な電気・電子の知識が下がる可能性がある。3年生でピークに達した基礎知識の定着を維持するため、4年生でも継続的な復習の機会を提供す

ることが望ましい。

「設問 61 医療機器に関する知識」については以下の通りである。



上記グラフより、学年ごとの「十分付いた」「かなり付いた」の割合は、以下の通りである。

- ・1年生では 31.8% (13.6%+18.2%)
- ・2年生では 37.5% (17.5%+20.0%)
- ・3年生では 58.4% (22.6%+35.8%)
- ・4年生では 52.4% (23.8%+28.6%)

以上より、「十分付いた」「かなり付いた」の割合は、3年生でピークを迎えた後、4年生では若干減少傾向である。

次に「少し付いた」の割合は、下記の通りである。

- ・1年生では 59.1%、2年生では 55.0% と、過半数が「少し付いた」と回答している。
- ・3年生で 32.1% に減少し、より高い理解レベル（「かなり付いた」「十分付いた」）へ移行している。
- ・4年生では 39.7% へやや増加している。

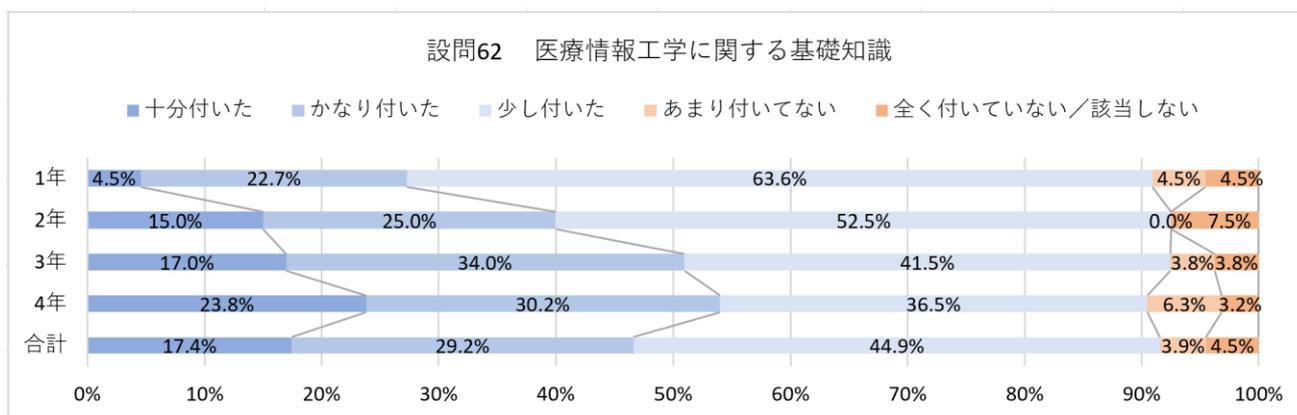
最後に「あまり付いていない」「全く付いていない/該当しない」の割合は、以下の通りである。

- ・1年生では 9.0% (あまり付いていない 4.5% + 全く付いていない 4.5%)。
- ・2年生では「あまり付いていない」が 0.0% になったが、「全く付いていない」が 7.5% に増加している。
- ・3年生 (9.5%)、4年生 (8.0%) では、「あまり付いていない」「全く付いていない/該当しない」割合が若干減少している。

考察としては、以下の通りである。

- ・1年生では約6割が「少し付いた」と回答し、基本的な知識の学修段階にある。
- ・2年生で「かなり付いた」「十分付いた」の割合が増加し、知識の定着が進んでいることが分かる。
- ・3年生で「かなり付いた」「十分付いた」の割合が最も高くなり、医療機器に関する理解が深まる重要な時期であると推測できる。
- ・4年生では3年生より若干自己評価が低下しており、3年生でピークに達した知識を一部の学生が理解を維持できなくなっている可能性がある。この状況に対応するため、実習や演習を通じて医療機器の知識を実践的に活用する機会を増やす事が提案できる。

「設問 62 医療情報工学に関する基礎知識」については以下の通りである。



各学年の特徴は、以下の通りである。

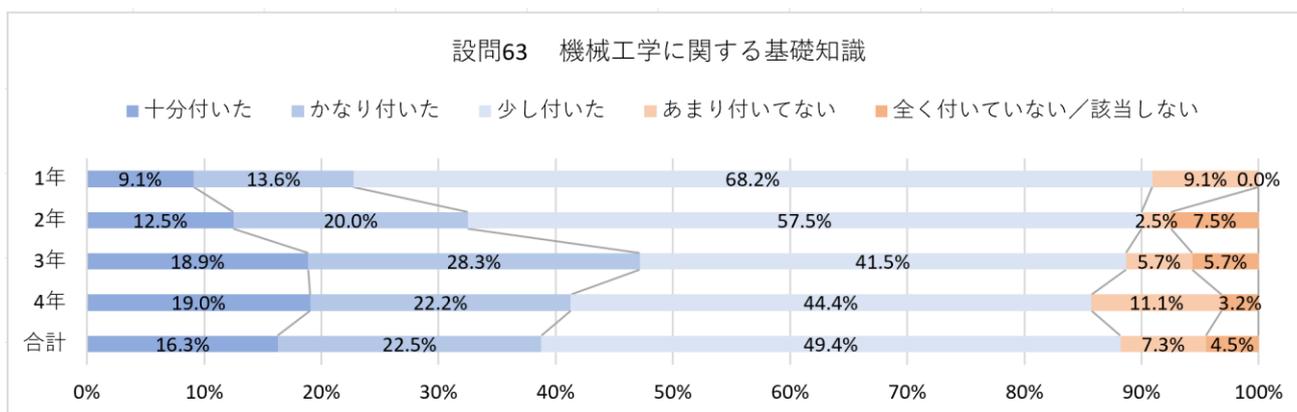
- ・1年生：「少し付いた;63.6%」と回答した割合が最も高く、知識習得に不安を感じている学生が多いことが推察される。
- ・2年生：1年生に比べて、「十分付いた;15.0%」「かなり付いた;25.0%」と回答した割合が増加しているが、依然として「少し付いた;52.5%」と回答した割合が最も高い。
- ・3年生：2年生と同様の傾向が見られ、「かなり付いた;34.0%」と回答した割合が増加した。
- ・4年生：「十分付いた;23.8%」「かなり付いた;30.2%」と回答した割合が他の学年よりも高く、知識習得に自信を持っている学生が多いこと推察される。

考察として、以下の通りである。

- ・学年が上がるにつれて知識習得度合いが高まることから、カリキュラムが体系的に組み立てられていると考えられる。
- ・知識習得度合いにばらつきが見られることから、学生個々の学修方法に差がある可能性がある。
- ・4年生で知識習得度合いが高いことから、卒業研究や国家試験などを意識して学修に取り組む学生が多い。

1,2年生へのサポートとして、知識習得に不安を感じている学生が多いことから、基礎的な知識の習得をサポートする体制を強化する。そして知識習得度合いが高い学生の学修方法を共有することで、他の学生の学修効果を高めることができる可能性がある。

「設問 63 機械工学に関する基礎知識」については以下の通りである。



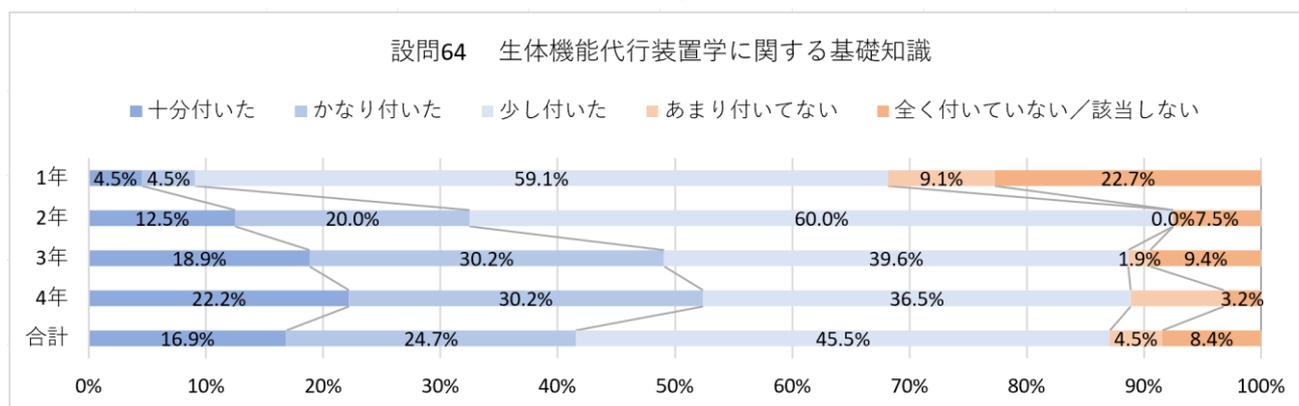
各学年の特徴としては、以下の通りである。

- ・1年生:「少し付いた;68.2%」と回答した割合が最も高く、知識習得に不安を感じている学生が多い。そして、該当科目の開講が2年生という事も要因として考えられる。
- ・2年生:1年生に比べて、「十分付いた;12.5%」「かなり付いた;20.0%」と回答した割合が増加している。「少し付いた;57.5%」と回答した割合が1年生と比べ減少している。
- ・3年生:2年生と同様の傾向が見られる。「かなり付いた;28.3%」と回答した割合が増加している。
- ・4年生:「十分付いた;19.0%」「かなり付いた;22.2%」と回答した割合が高く、知識習得に自信を持っている学生が多いことがわかる。

以上より、学年が上がるにつれて、「十分付いた」「かなり付いた」と回答する割合が増加する傾向が見られる。

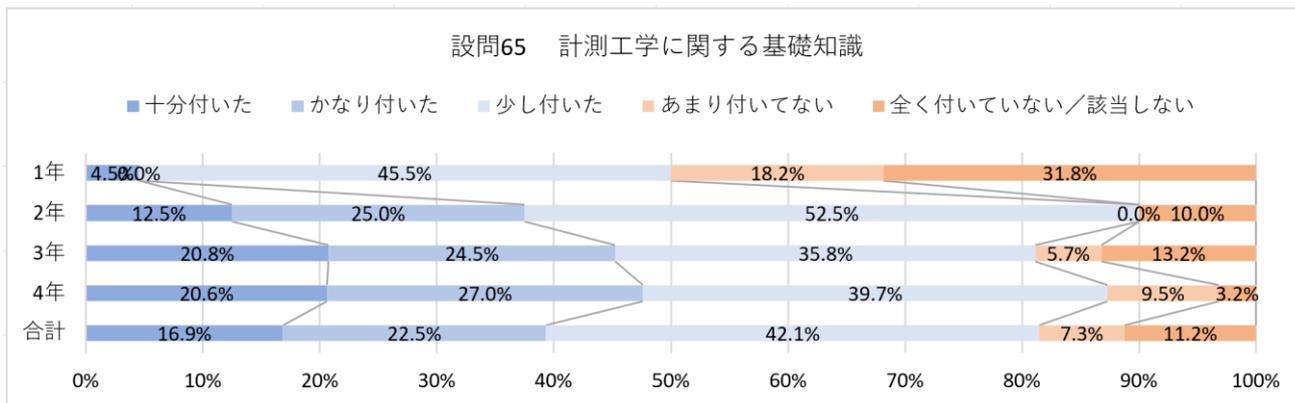
考察として以下が考えられる。学年が上がるにつれて知識習得度合いが高まることから、カリキュラムが体系的に組まれていると考えられる。次に、知識習得度合いにばらつきが見られることから、学生個々の学修方法に差がある可能性が考えられる。最後に意識について、4年生で知識習得度合いが高いことから、卒業研究や国家試験などを意識して学修に取り組む学生が多い可能性が考えられる。

「設問 64 生体機能代行装置学に関する基礎知識」については以下の通りである。



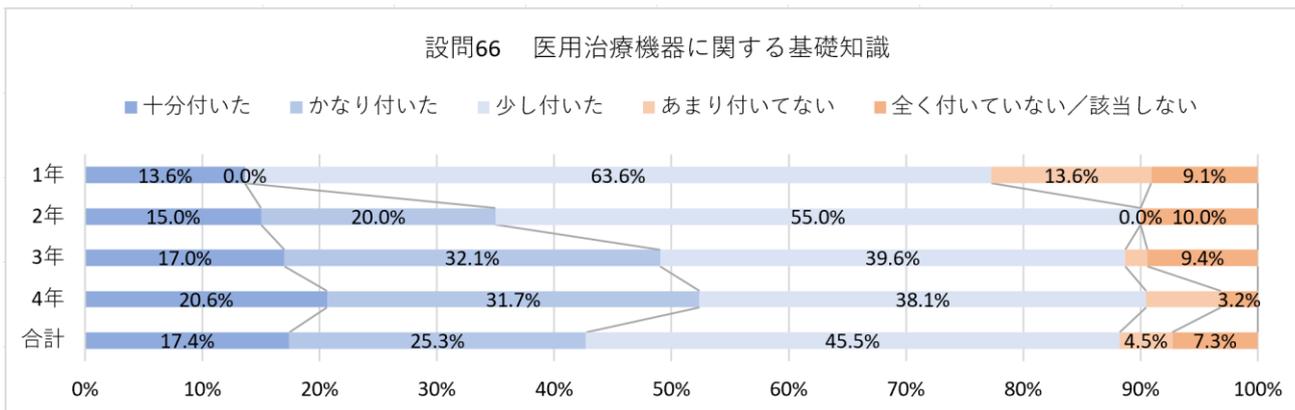
学年別の傾向は以下の通りである。1年生は「全く付いていない/該当しない」の割合が22.7%と最も高く、これは、該当科目の開講が2年生という事が要因として考えられる。2年生では「少し付いた」の割合が60.0%と4学年の中で最も高く、基礎知識をある程度習得できている学生が多い傾向が見られる。3年生、4年生は「十分付いた」「かなり付いた」の割合が他の学年よりも高く、学年が上がるにつれて基礎知識の習得度合いが高まる傾向が見られる。

「設問 65 計測工学に関する基礎知識」については以下の通りである。



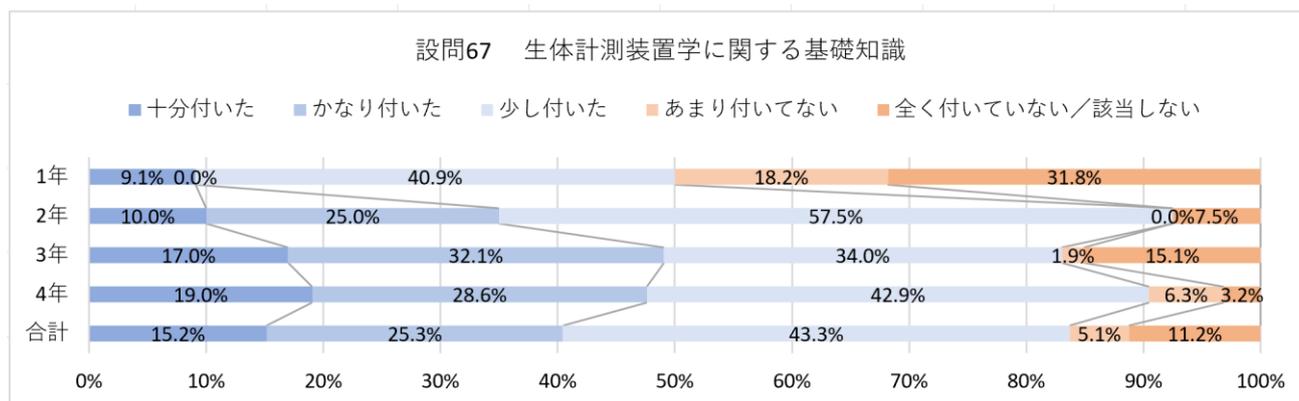
上記グラフより、学年が上がるにつれて理解度が向上する特徴が見て取れる。それは、1年生では「十分付いた;4.5%」から「少し付いた 45.5%」と回答した割合は合計 50%だが、学年が上がるにつれて増加し、4年生では「十分付いた;20.6%」「かなり付いた 27.0%」「少し付いた;39.7%」の合計が 87.3%となっていることから明らかである。このグラフから、学年が上がるにつれて計測工学の基礎知識が向上することが分かる。

「設問 66 医用治療機器に関する基礎知識」については以下の通りである。



上記グラフより、学年が上がるにつれて理解度の向上が確認できる。1年生では「十分付いた;13.6%」「かなり付いた;0.0%」「少し付いた;63.6%」を合わせて 77.2%であるが、4年生では「十分付いた;20.6%」「かなり付いた;31.7%」「少し付いた;38.1%」で合計 90.4%となっていることから明らかである。これは、学修の進行とともに知識が蓄積されることを示している。

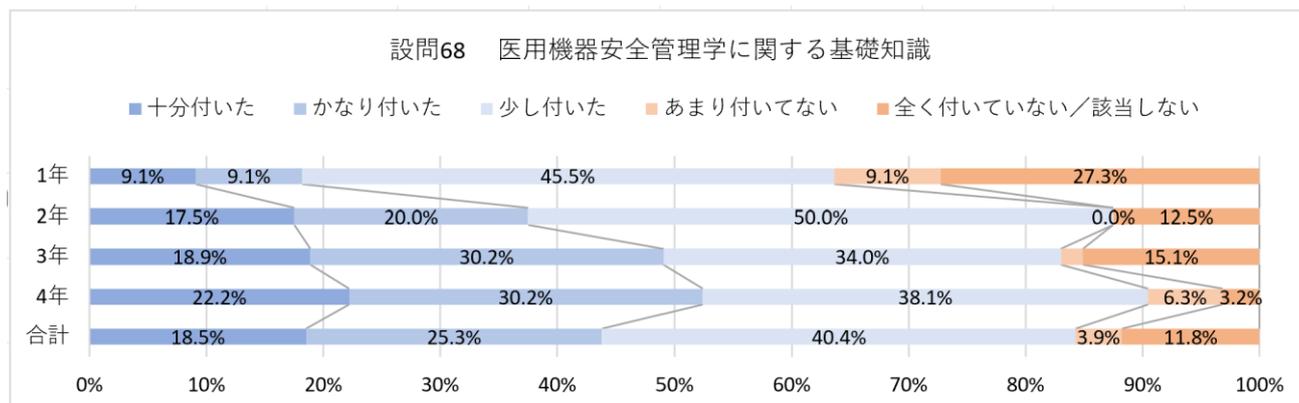
「設問 67 生体計測装置学に関する基礎知識」については以下の通りである。



上記グラフより、学年が上がるにつれて理解度が向上する傾向がある。その理由は、1年生では「十分付いた;9.1%」と「かなり付いた;0.0%」の合計が9.1%と低いのが、4年生では「十分付いた;19.0%」「かなり付いた;28.6%」と合計47.6%まで上昇していることから明らかである。学修が進むにつれて知識が定着する傾向を示している。

また、1年生の「あまり付いていない」「全く付いていない/該当しない」が高い値の理由として、該当科目の開講が2年生という事が要因として考えられる。

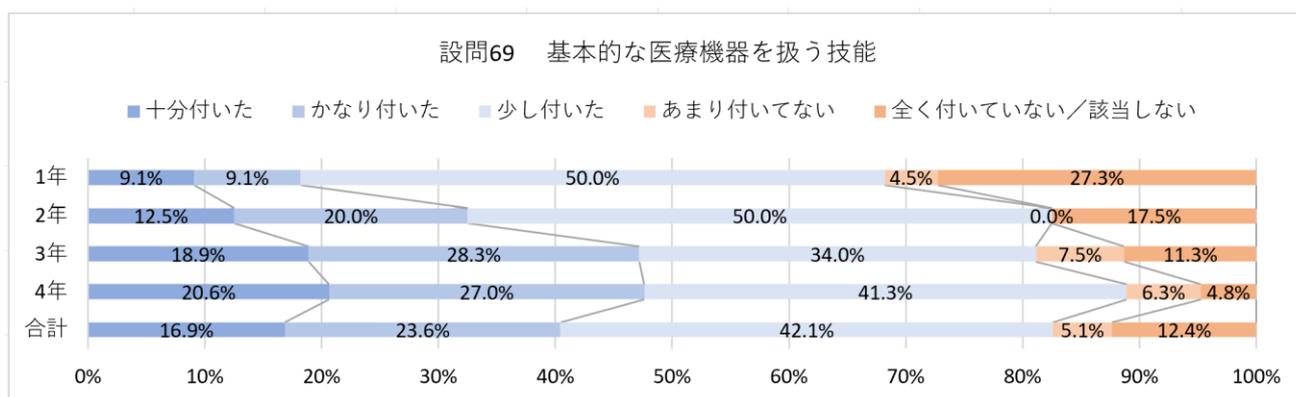
「設問 68 医用機器安全管理学に関する基礎知識」については以下の通りである。



上記グラフより、学年が上がるにつれて理解度が向上する傾向がある。その理由は、1年生では「十分付いた;9.1%」と「かなり付いた;9.1%」の合計が18.2%と低いのが、4年生では「十分付いた;22.2%」「かなり付いた;30.2%」と合計52.4%まで上昇していることから明らかである。学修が進むにつれて知識が定着する傾向を示している。

また、1年生の「あまり付いていない」「全く付いていない/該当しない」が高い値の理由として、該当科目の開講が3年生という事が要因として考えられる。

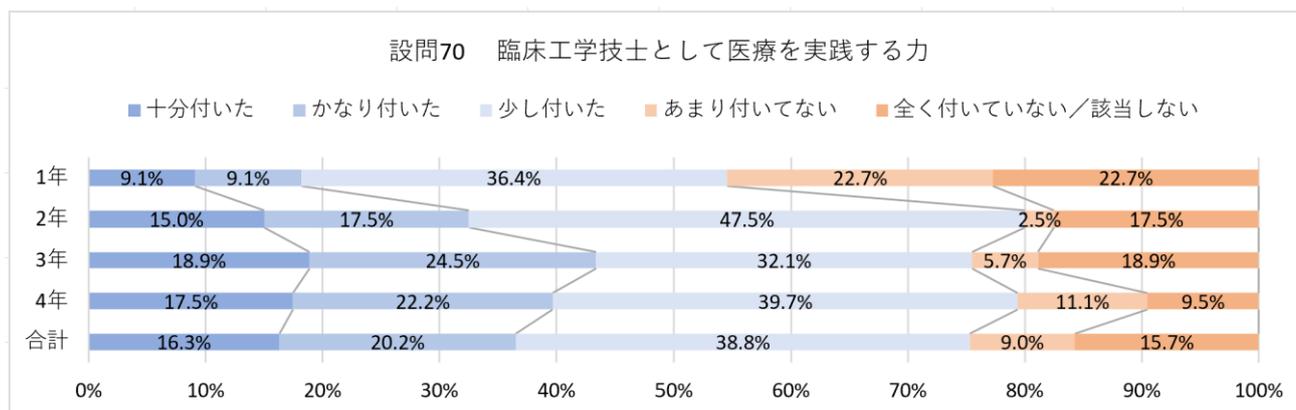
「設問 69 基本的な医療機器を扱う技能」については以下の通りである。



上記グラフより、学年が上がるにつれて技能の習得度が向上していることが明確に表れている。その理由は、「十分付いた」や「かなり付いた」の合計割合は、1年生では18.2%だが、4年生では47.6%に増加していることから明らかである。「十分付いた」および「かなり付いた」の割合は学年が上がるごとに増加しており、実習や講義を通じた技能向上が見られる。

また、1年生の「あまり付いていない」「全く付いていない/該当しない」が高い値の理由として、該当学年は、教養科目・基礎科目が中心の為、数値が高いと言える。2年生にて「全く付いていない/該当しない」が高値の理由は、本コースにおいて2年生頃より、臨床工学技士国家試験受験を断念し、一般企業への就職を志望した学生が数値を上げている可能性がある。

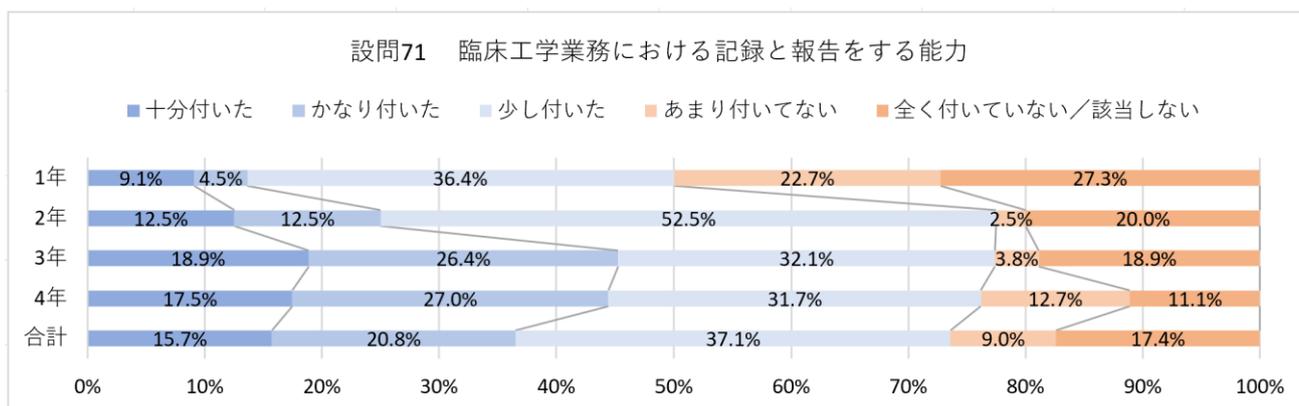
「設問 70 臨床工学技士として医療を実践する力」については以下の通りである。



上記グラフより、学年が上がるにつれて技能の習得度が向上していることが明確に表れている。その理由は、「十分付いた」や「かなり付いた」の合計割合は、1年生では18.2%だが、4年生では39.7%に増加していることから明らかである。特に「かなり付いた」の割合は学年が上がるごとに増加傾向にあり、実習や講義を通じて医療を実践する力の向上が見られる。

また、1年生の「あまり付いていない」「全く付いていない/該当しない」が高い値の理由として、該当学年は、教養科目・基礎科目が中心の為、数値が高いと言える。2・3年生にて「全く付いていない/該当しない」が高値の理由は、本コースにおいて2年生頃より、臨床工学技士国家試験受験を断念し、一般企業への就職を志望した学生が数値を上げている可能性がある。

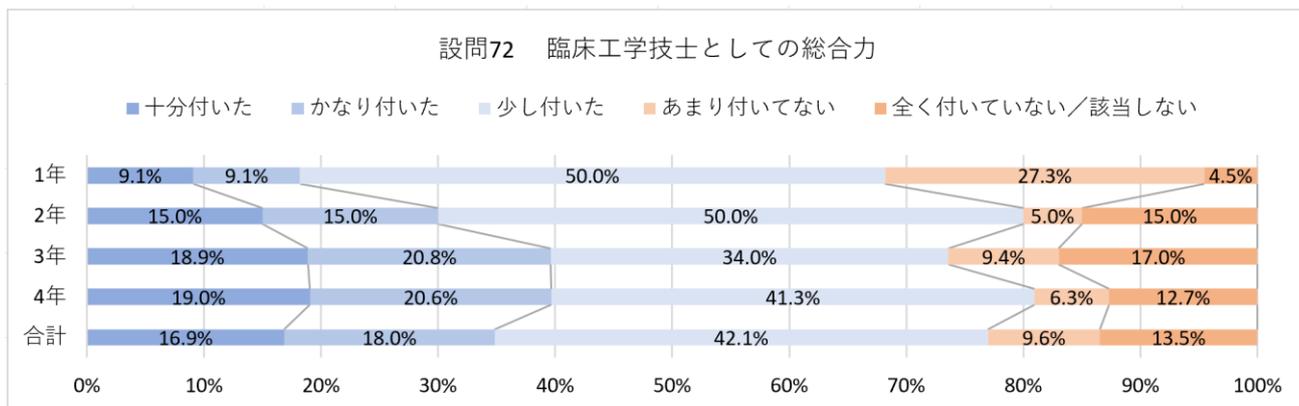
「設問 71 臨床工学業務における記録と報告をする能力」については以下の通りである。



上記グラフより、学年が上がるにつれて技能の習得度が向上していることが明確に表れている。その理由は、「十分付いた」や「かなり付いた」の合計割合は、1年生では13.6%だが、4年生では44.5%に増加していることから明らかである。特に「かなり付いた」の割合は学年が上がるごとに増加傾向にあり、実習や講義を通じて医療を実践する力の向上が見られる。

また、1年生の「あまり付いていない」「全く付いていない/該当しない」の割合が高い理由として、該当学年は教養科目・基礎科目が中心の為、数値が高いと言える。2・3年生にて「全く付いていない/該当しない」が高値の理由は、本コースにおいて2年生頃より、臨床工学技士国家試験受験を断念し、一般きぎょうへの就職を志望した学生が数値を上げている可能性がある。

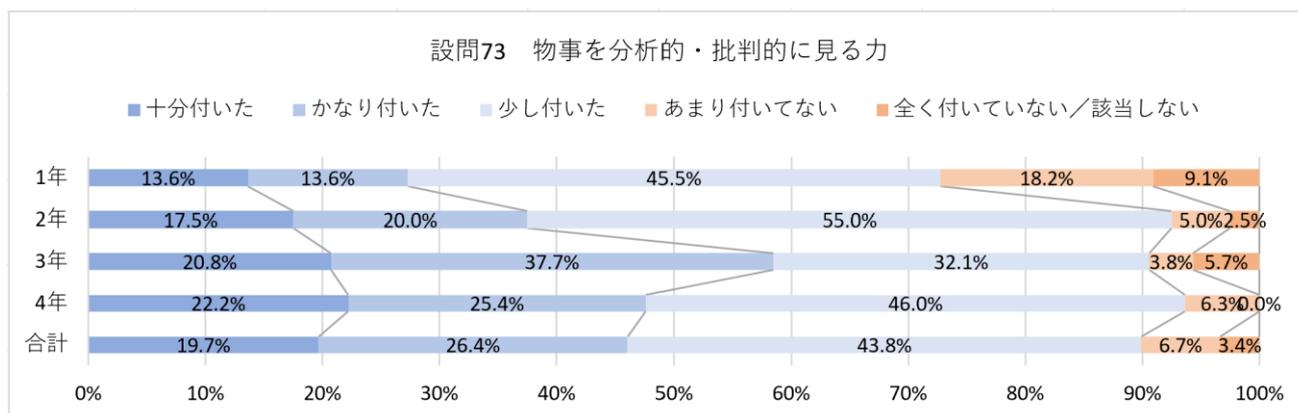
「設問 72 臨床工学技士としての総合力」については以下の通りである。



上記グラフより、学年が上がるにつれて技能の習得度が向上していることが明確に表れている。その理由は、「十分付いた」や「かなり付いた」の合計割合は、1年生では18.2%だが、4年生では39.6%に増加していることから明らかである。特に「十分付いた」の割合は学年が上がるごとに増加しており、実習や講義を通じて医療を実践する力の向上が見られる。

また、1年生の「あまり付いていない」「全く付いていない/該当しない」が高い値の理由として、該当学年は、教養科目・基礎科目が中心の為、数値が高いと言える。2・3年生にて「全く付いていない/該当しない」が高値の理由は、本コースにおいて2年生頃より、臨床工学技士国家試験受験を断念し、一般企業への就職を志望した学生が数値を上げている可能性がある。

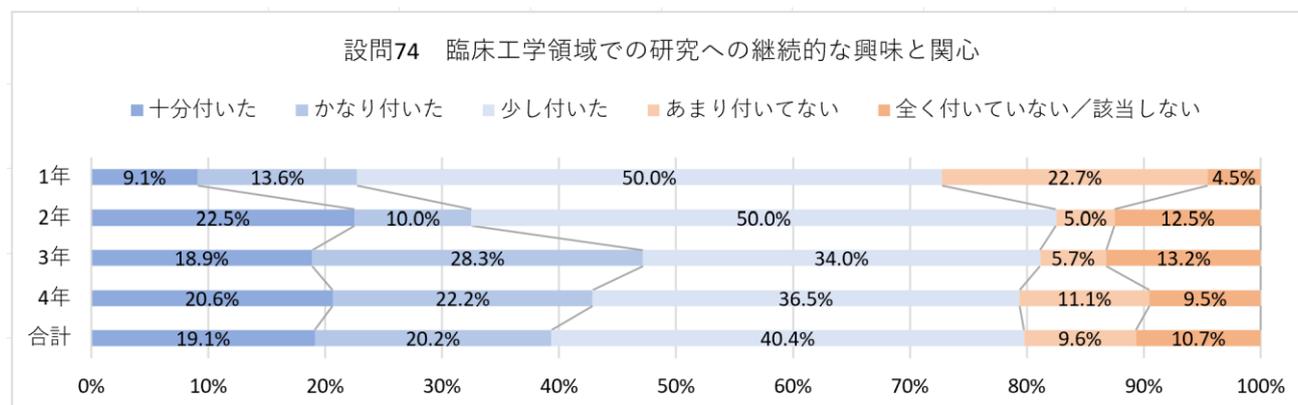
「設問 73 物事を分析的・批判的に見る力」については以下の通りである。



上記グラフより、学年が上がるにつれて物事を分析的・批判的に見る力の習得度が向上していることが明確に表れている。その理由は、「十分付いた」や「かなり付いた」の合計割合は、1年生では27.2%だが、4年生では47.6%に増加していることから明らかである。特に「十分付いた」の割合は学年が上がるごとに増加しており、実習や講義を通じて物事を分析する能力の向上が見られる。

また、1年生の「あまり付いていない」「全く付いていない/該当しない」の割合が高い理由として、該当学年は、入学直後の新しい環境に順応する過渡期の為、数値が高いと言える。

「設問 74 臨床工学領域での研究への継続的な興味と関心」については以下の通りである。



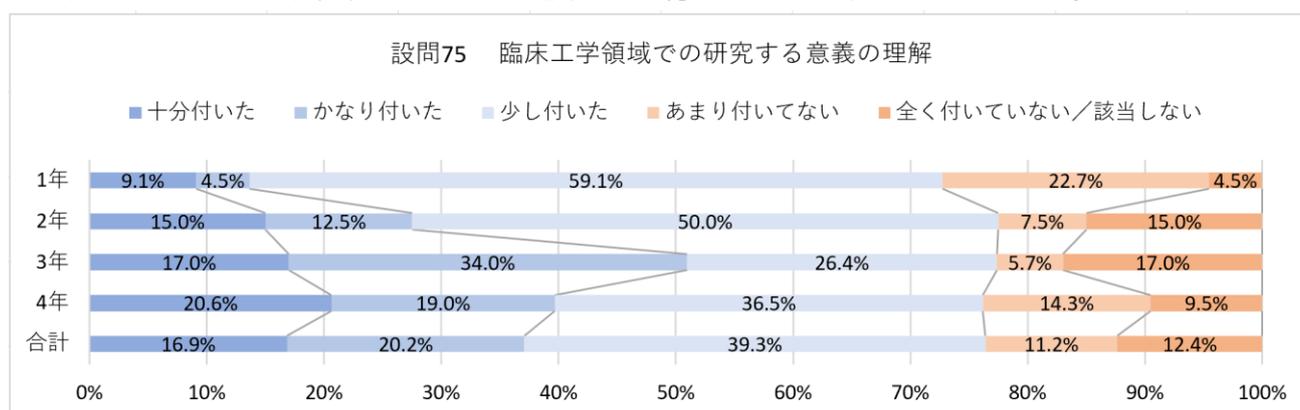
上記グラフより学年ごとの傾向は、下記の通りである。

- ・1年生は、「あまり付いていない;22.7%」、「全く付いていない/該当しない ;4.5%」がやや高めであり、これは入学当初の講義が一般教養と基礎科目が中心という事から、関心がまだ定まっていない可能性がある。
- ・2年生では、「十分付いた;22.5%」が増加した。一方で、「全く付いていない/該当しない;12.5%」はやや高いものの、全体として関心が深まっている。
- ・3年生は「かなり付いた;28.3%」の割合が4学年の中で最も高く、研究への興味が高まる時期と考えられる。
- ・4年生では「十分付いた;20.6%」、「かなり付いた;22.2%」と比較的高い割合を維持しつつも、「あまり付いていない;11.1%」が3年生よりも増加しているのが特徴的である。

考察としては、以下の2点が挙げられる。

- ・グラフより3年生が最も研究に興味を持ちやすい傾向が見られるため、この時期に研究活動への動機付けを強化する事により、より深い関心へと発展しやすい可能性がある。
- ・グラフでは4年生での「あまり付いていない」「全く付いていない/該当しない」と回答した割合が2年生および3年生と比べ増加している。この理由として、進路選択の影響が考えられる。例えば、臨床工学技士として病院や企業への就職が決まった学生は、研究よりも実務に重点を置くようになり、研究への興味・関心が薄れる可能性がある。また、本コースでは卒業研究が選択制であるため、研究に興味がない学生が卒業研究を選択せず、結果として数値が減少している一因と考える。

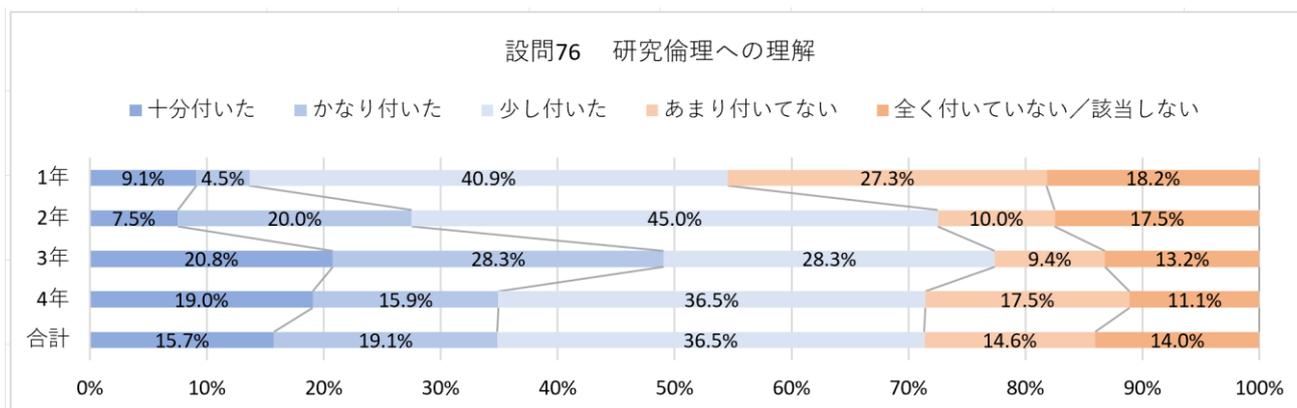
「設問 75 臨床工学領域での研究する意義の理解」については以下の通りである。



グラフより学年傾向は、1年生は「少し付いた;59.1%」が最も高く、「あまり付いていない;22.7%」と「全く付いていない/該当しない;4.5%」の合計割合が高い事から、研究意義を十分に理解するに至っていないことが示唆される。2年生は「十分付いた;15.0%」、「かなり付いた:12.5%」と向上しているが、「全く付いていない/該当しない;15.0%」が1年生より増加しており、研究意義への理解が二極化している。3年生は「十分付いた;17.0%」、「かなり付いた;34.0%」と増加する一方で、「あまり付いていない;5.7%」、「全く付いていない/該当しない;17.0%」もある程度存在することから、研究に対する理解が深まる学生とそうでない学生に分かれる傾向がある。4年生は「十分付いた;20.6%」の割合が4学年の中で最も高く、研究意義を理解している学生が増えている。一方で「あまり付いていない;14.3%」、「全く付いていない/該当しない;9.5%」も依然として存在している。

以上より、学年が上がるにつれて研究意義を理解する学生が増加している。しかし研究意義を十分理解していない層が一定数いるが、これは卒業研究が選択科目という事が要因として考えられる。

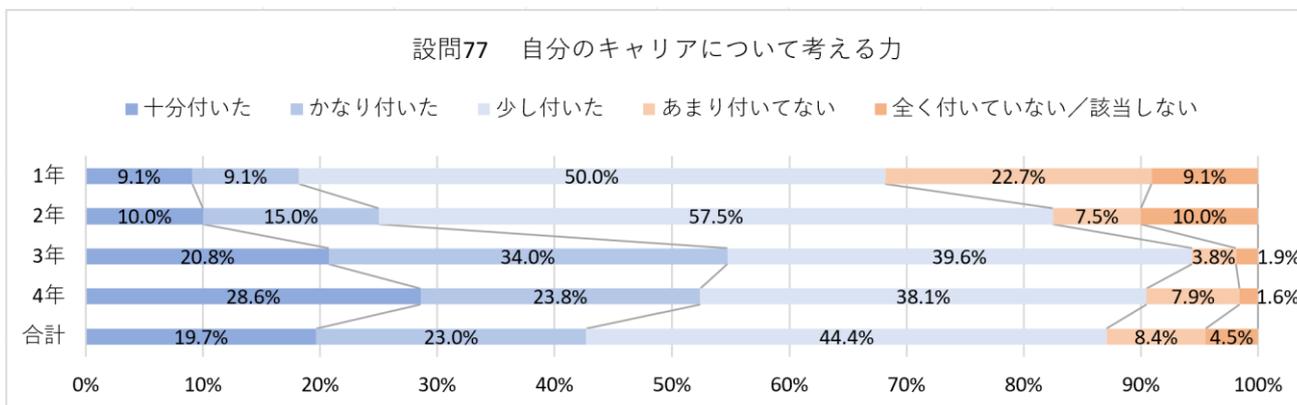
「設問 76 研究倫理への理解」については以下の通りである。



全体的な傾向は上記グラフのコース合計より、「十分付いた;15.7%」「かなり付いた;19.1%」「少し付いた;36.5%」と合計 71.3%となった。過半数以上が研究倫理について何らかの理解が得られたと感じている。

一方で、「十分付いた」と回答した学生は 15.7%にとどまっており、研究倫理について十分に理解できたと感じている学生は少ない。一方で「あまり付いていない;14.6%」「全く付いていない/該当しない;14.0%」と回答した学生も存在する。これは卒業研究が選択科目という事が要因として考えられる。

「設問 77 自分のキャリアについて考える力」については以下の通りである。



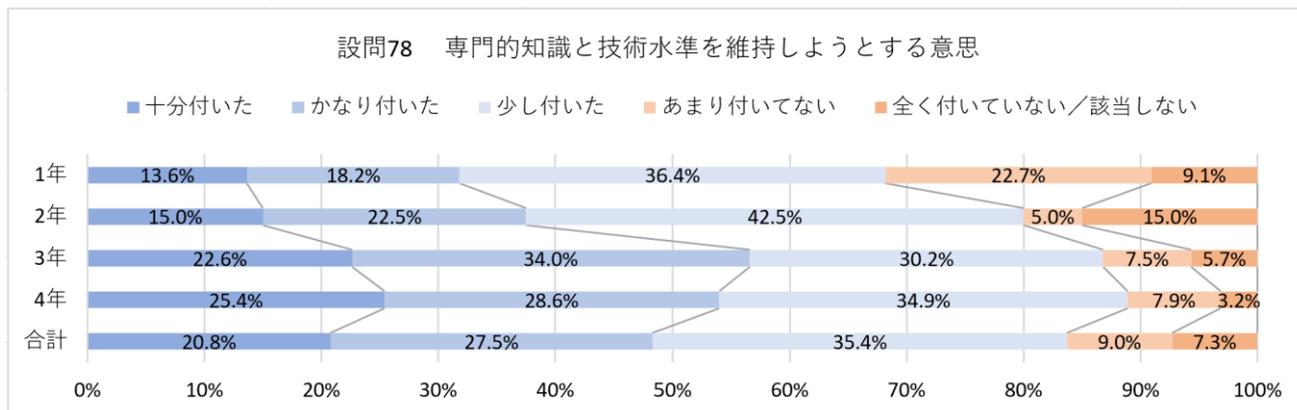
コース合計より、全体的な傾向は、「十分付いた;19.7%」「かなり付いた;23.0%」「少し付いた;44.4%」と合計 87.1%の学生がキャリアについて考える力が身につけていると回答している。しかし「あまり付いていない;8.4%」「全く付いていない/該当しない;4.5%」と回答した学生も合計 12.9%おり、キャリア支援の改善の余地があることを示唆している。

学年別の傾向では、高学年ほど自己評価が高い傾向である。3年生と4年生は、他の学年と比べて「十分付いた」「かなり付いた」と回答した割合が高く、キャリアについて考える力が身についたと感じている学生が多いことが理由として考えられる。これは、高学年になるにつれて就職活動や進路選択を意識する機会が増えるためと考えられる。1年生は自己評価が低い傾向にある。1年生は、「あまり付いていない;22.7%」「全く付いていない/該当しない;9.1%」と回答した割合が最も高く、キャリアについて考える力がまだ身につけていない学生が多い。1年生は、入学したばかりでキャリアについて考える機会が少ないためと考える。2年生はばらつきが大きい。2年生は、他の学年と比べて「少し付いた;57.5%」と回

答した割合が最も高い一方で、「あまり付いていない;7.5%」「全く付いていない/該当しない;10.0%」と回答した割合も高く、キャリアについて考える力の自己評価にばらつきが見られる。

今後の施策として、低学年向けのキャリア教育の導入の検討、具体的にはキャリアに関する情報提供や自己分析の機会を設ける。次に高学年向けのより実践的なキャリア教育の導入として、インターンシップや企業訪問などの機会の提供、就職活動対策講座や模擬面接などの更なる実施などが施策として考えられる。

「設問 78 専門的知識と技術水準を維持しようとする意思」については以下の通りである。



コース合計より、「十分付いた;20.8%」「かなり付いた;27.5%」「少し付いた;35.4%」と合計 83.7%の学生が、目的の能力が身についたと感じている。学年が進むにつれ、この傾向が顕著になる。一方で「あまり付いていない;9.0%」「全く付いていない/該当しない;7.3%」と回答した学生もおり、この層には、専門的知識と技術水準を維持しようとする意思への施策が必要である。学年別では1年生が「あまり付いていない」「全く付いていない/該当しない」と回答した学生の割合が高い。これは、入学したばかりで専門的な学修や研究活動に触れる機会が少ないためと考えられる。施策としては、まず低学年向けの専門分野への興味関心を高める教育の導入がある。例えば、専門分野の魅力や将来性を伝える講義やイベントなどの更なる実施を行う。次に学生が気軽に相談できる体制の整備も必要である。学修やキャリアに関する疑問や不安を抱えた学生が、気軽に相談できる窓口や相談員の設置とその周知を今まで以上に行う。これらの施策を実施することで、学生の専門的知識と技術水準を維持しようとする意思を高め、主体的な学修やキャリア形成を支援することが期待できる。

以上